

嵐のあと

夫婦協力今日をなした高橋宇太郎氏

本籍地	新潟縣高田市三丁目五十三番地
負傷	左大腿部銃創、同左大腿部三分一ノ部ヨリ切斷

失はれた左脚

奉天の大戦は、沙河、遼陽の大戦に破れたクロボトキンが、重なる連敗の汚名を、一舉にして雪がうと、死者狂ひになつての一戦だつただけに、日露戦史上未曾有の激戦であつた。

然しこの大激戦も、第三軍の大迂回による左側背面攻撃によつて、勝敗の数は明かとなつた。

『何十萬といふ大軍が、這々の體で逃げるのを追つかける』

んだ。何が愉快つて、こんな愉快な事があるかつてんだ。『いい保養だなあ、壽命が延びらあ。』
『どうだ味方の砲兵の正確なことは。蜘蛛の子を散らすやうだ。』

『これを肴に、一杯キユーツとやりてえな。』

など、可い氣持になつて追撃して行つた我軍は、鐵嶺に至つて又頑強な抵抗を受けねばならなかつた。

鐵嶺は奉天北方の要地である。敵の一部は此處に止つて、又も我軍に手向つた。

『逃げるのが商賣の癖に、ロスケの奴味な眞似をやりやがる。』

『一揉みに揉み潰せ。』

明治三十八年三月十四日、高橋宇太郎は、歩兵第三十聯隊の野戦隊の一員として、此鐵嶺の戦場で負傷した。

斷濠を飛び出し、突撃に移つた瞬間、左の股を何かで撲られた様な氣がしたと思ふと、身體の重心を失つてバツタリ倒れた。

『何糞つ。これしきの傷。』

雜貨商から小鳥商に

白色桐葉章及び一時賜金二百圓を下賜された彼は、親戚のすゝめに従つて結婚し、直江津町に分家して雜貨商を初めた。

左脚が義足だから歩く商賣はできないので、坐つてゐてできる雜貨商を初めたのだ。

『ちよいと、はたきを一本頂戴な。』

『へえ。どうも有難うございます。』

『おい。バケツを見せてくれ。』

『へえ。』

『小父ちゃん、竹馬つくる芋をくんないか。』

『はい、今あげますよ。』

客あしらひから、品物の仕入、丁稚の使ひ方、何の商賣でも商賣となれば樂ではない。

『俺は戦争で一遍死にかゝつた人間だ。商賣は平時の戦争のやうなものだ。骨身を惜しんちやあ勝てないのだ』

と彼は口癖のやうに言つた。そして朝早くから起きて不

『切らないと命が危いのだ。』
一本脚の癩兵——に俺もなるのか。と思つて彼は暗然とした。然しこの片脚は、御國に捧げた尊い片脚なのだ。身命全部捧げるつもりだつたのに、片脚位何惜しからう。遂に大腿上三分の一を殘しただけで、左脚は切斷されて終つた。

と思つて起き上らうとするが起てない。鐵嶺戦といへば日露戦争も終局である。三十七年二月、鎮南浦に上陸して以來、九連城、鳳凰城、黑溝臺、沙河、遼陽と連戦して、武運芽出度一度も負傷しなかつた自分が、今頃になつてやられるなんて殘念だ。糞つ、と力んで見たがどうにもならない。

左大腿部銃創——診察した軍醫は首をかしげた。

『彈丸が骨に當つてゐるし、切斷しなければならんな。まだ貫通してくれた方がよかつたのだが。』

『軍醫殿、片足になつちやあ歩けないです。何とかして切らないで下さい。』

自由な身體を動かして働いた。妻も彼の此の氣持を汲んで、彼以上に甲斐々々しく働いた。
然し運命は彼に味方しなかつた。開業後八年目に店を閉じねばならなくなつた。使用人が掛金を集めて逃げて終つたり、仕入の思惑が外れたりしたことも一因だつたが、何よりの原因は、人を信用し過ぎて、貸倒れが續出したことと、豊富な資本を擁した有力な競争者が近くに現れた事だつた。

どうにもやりくりがつかなくなつて、店を閉じた日、

『さてこれからどうしたものだらう。』

と彼が腕を組んで思案に暮れてゐると、

『一筆啓上、一筆啓上』

と縁側で、彼が日頃愛養してゐた頬白が明るい聲で、慰めるやうに鳴き出した。その聲を聞いてゐるうちに、彼はハタと膝を打つた。

『さうだ。小鳥屋をやつて見よう。』

去年高田市の呉服屋をやつてる友人が、セキセイインコを一番賣つたら良い金になつた。小鳥屋をやると儲かるか

も知れない。と話したことを思ひ出したのだ。彼は早速高田市に行つて、その友人に自分の決心を話してみた。
『うん、それはいい。大いにやり給へ。今この高田市に小鳥屋は一軒しかない。君のやり方さへよかつたら繁昌すること疑ひなしだ。』
と大いに激勵してくれた。
妻も賛成したので、早速高田市に移轉して小鳥商を初めたのは、大正二年の春の初めだつた。

妻は女人夫に

初めは馴れないから、文鳥、カナリヤ、セキセイインコ、一紅鳥、拾姉妹、等の強健で、飼方が簡單で、比較的よく巢引(雛を育てること)する鳥から初めた。
少額の資本で初めるのだから、初めは一番か二番買つて、それに育雛させて、段々殖やす方法を執つた。
小鳥の住家は、巢箱、餌入、水入、菜差、これ位で充分である。餌は粟、稗、黍等の穀類、又は路傍などによく出る禾本科植物の種子を主食物とし、小松菜、大根、白菜等の青菜と、菜種、荏胡麻、麻の實等の油餌を副食物として與へる。それに水と與へる。これ等の飼料は安價で容易く手に入るし、それに彼等の喰べる分量は少量だから、費用は餘りかけないですむ。夏になると副食物として、胡瓜や西瓜の白いところを與へたりしてもいい。
『小鳥屋なんて風流すぎて、今の時世にはむくまいが。』
『小鳥の口を氣にしてゐる内に、人間の口が乾上らねばいいがね。』



MASAYOSHI

などとひやかす人もあつたが、
『俺あ、もう人を相手の商賣はこりごりだ。八年雜貨屋をやつて、人情の表裏は身に泌みたよ。それよりやあ小鳥を相手にする方がどれ位氣が利いてるか解らんね。小鳥は俺をペテンにかけはしないし、それどころか、こつちが熱心に飼つてやれば、きつとそれだけの恩は返してくれるんだ。人間よりやア小鳥の方がどの位ましたか。』
かういつて彼は一笑に附した。そして益々仕事に精出した。
だが運命はまだ彼に微笑みかけなかつた。

仕事に馴れなかつたので、病気で斃れる小鳥が少くない上に、販賣の方も思はしくなかつた。折角高い金を拂つて仕入れた巻毛カナリヤが、原因不明の病気で死んだ時など、彼は我兒を失つたやうに悲しんだ。経済的の損失ばかりでなく、折角貴重な生命を持つた小鳥を、唯自分が不注意だつた爲に殺して終つた事が、すまなくて残念で堪らなかつたのだ。

「ねえ、私、女人夫になつて見るわ。」

経済的にどうにもならなくなり、早晚この小鳥商もやめねばならなくなつた時に、妻は突然言ひ出した。

「お前が、女人夫に？」

女人夫といへば女の労働者だ。五つを頭に三人の子を家に置いて、女人夫に出ようとした妻の決心には、彼は泣けた。だが生活は最早世間體などを顧慮してはゐられない状態になつて來てゐる。噫自分が足さへ完全なら——。

「何にも言はぬ。頼む。」

彼は妻の前に頭をさげてさう言つた。

翌日から妻は辨當を持つて人夫に出初めた。「ヨイトマ

ケレや、農家の養蠶の手傳ひ、百姓の手傳ひなど、幸ひ世界大戦の最中で、仕事は次から次へとあつた。毎日一圓宛にしても月に三十圓だ。彼等にとつてはこれは大きい。彼はこの妻の助けを得て、自分は家で子供の守りをしながら、熱心に小鳥を飼つた。

遂に一家繁昌

「小鳥なら高橋さんさ。」

「うんあそこは安いし、それに何から何まで實によく親切に注意してくれる。」

「あそこの親父は、小鳥を賣る時はまるで自分の娘を嫁にやるやうな心持で居るらしい。」

天は自ら助くる者を助くと言ふ。彼の熱誠は漸く認められ、市内の愛畜家等が口々にかういふやうになつた。その上世界大戦の末期で好景氣につれて、小鳥を愛好するものも俄に増加して來た。妻も人夫に出ないでもすむやうになつた。

彼はこの趨勢を見逃さなかつた。その頃には小鳥の飼育

には最早充分熟練して來たので、今度は販賣の方面に熱心に力を入れ初めた。

新聞に廣告したり、パンフレットを配つて小鳥の飼養が副業として有益であることを宣傳したりした。高橋小鳥店の名は漸く縣下に知られ初めた。

「高橋さん、そんなに副業を宣傳したら、やがて方々から小鳥の賣物が出て、お前さんの商賣は上つたりになるでせうが。」

「おせつかいの忠告をする者もあつたが、彼は、縣下で賣れなくなつたら、共同して東京や大阪へ出しますよ。それでもいけなくなつたら、外國へ輸出しませう。」

現に尾州や泉州四國などの農家では、文鳥やカナリヤを副業として大規模に飼つて、東京や大阪へ賣り出しているし、年々カナリヤ、白文鳥、セキセイインコ、拾姉妹などは、日本から外國へ何十萬圓と賣り出しているつて事です。この新潟縣でも一つ外國へ賣り出す位盛んになるといいです。がね。」

と微笑して言ふのだつた。軍人である彼はかういふ事

も國家本位の考へ方を忘れないのだつた。

彼は貞節な妻との間に八人の子を儲けた。長男は高田師範學校を三年前卒業し、二男は現に五年に在學し、三男は高田農學校三年生、四男五男三女は小學校在學、長女は東京に嫁し、二女は高田郵便局の交換手をしてゐる。八人の子が皆健康で、一人として軌道を踏み外した者のないのは、一つは彼の徳でもあらうが、主として妻の養育が宜しきを得たためであらう。

「子供が皆當り前に出來たらしいのは私の自慢です。私はいつも子供に言ふんです。小鳥に見習つて、本當ですよ、小鳥は私にとつちや救ひの神ですよ。他人様は苦しみながら働いてるのに、私は樂しみながら働いて、しかも儲かるんです。朝起きると、小鳥達が私の顔を見て嬉しうに囀ります。それをきくと、私は壽命が延びるやうな氣がします。私には小鳥の一羽一羽に、佛さまの光りが宿つてゐるやうに見えるのです。私は小鳥にどの位教へられたか解りません。」

と彼は會ふ人毎に話すのだつた。

神への土産

|| 義足の身を以て働いた竹内乙助氏 ||

本籍地	北海道河西郡芽室村大字芽室村 字芽室村北一線西一四五
負傷程度	左足膝關節切斷、右下足貫通銃創

「あんたみたいになら、さうつめて働いては體に毒だが...」
妻が心配していった。

「なにをいふんだ。人間は働いてこそ値打があるんぢや。
儂ア働くのが一番の楽しみよ」

乙助は朗らかにさういつて、歟を擔いで元氣に出て行く
のだった。

どうしてはたの者は、儂が汗みどろになつて働くのを中心配するのだらう?...さう思ふと、彼は不思議でたまらなかつた。

...自分の體が人間なみではない——左足が一本なくて、義足をはめてゐる。それでみんな體に無理が行くと思つて、心配してくれるのだらうが、義足でもちやんと一人前に働けるぢやないか。人間と生れたからには働かなくては申譯ない。働けるまでは働かなくてはならぬ。それでこそ日本人に生れ、お上の御奉公が出来るといふものだ。
彼は歩きながら考へてゐた。みんなが自分の體のことを心配してくれる氣持は有難かつた。しかし、彼にしてみると、むしろ「駄目ぢやないか、もつと働け!」といつてくれる人が欲しかつた。

「あの時は決死の覺悟だつた。生きて故郷に歸れるとは夢にも思はなかつた。それが、幸か不幸か、足一本失つたきりて生きて還つた。それを思ふと、のらくらしてゐてはお上に申譯がない。戦死した戦友達にも會はせる顔はない」
彼の眼前には壯烈無比な二〇三高地奪取戦の光景が、パノラマのやうに浮ぶのだった。

竹内乙助は北海道河西郡芽室村の百姓であつたが、丁年に達して三ヶ年の兵役を終へてからは、郷里にあつてひたべき命を拾つた。獲つた命は拾ひ物だ。この拾ひ物を十分に生かして、神様のものによい土産物を持つて行かう」
さう考へて来ると、彼は自分の前途に洋々たる光明をみるこゝが出来た。

しかし、この體で百姓がつとまるかしらん...さう考へて来ると、不安に心が曇ることもあつた。けれども、創は順調に快癒し、義足をはめてみると、最初は不馴のため具合が悪かつたが、馴れてくるに従つて立居振舞も自由になり、歩行にもさして不便を感じないやうになつた。

「ようし、この分なら百姓をつゞけて行けるぞ!」
彼は欣喜して郷里に歸つたのである。そして、血のにじむやうな汗みどろの活動がはじまる。

「お前の働き具合は、まるで馬車馬みたいぢやないか。もう少し體を大事にしなけりや、第一お前の體は普通の人と違ふんだから...」

近親のものが見かねて注意する程、彼は朝早くから日の暮れるまで働きつゞけた。馬耕に穀物搬出に、何等常人と

すら家業に服してゐた。程なくして日露戦役勃發し、南滿の戦線が破竹の勢ひで進展するに反し、旅順攻圍軍は日マ屍山血河の悪戦苦闘をつゞけるや、第七師團の救援をみるに至つた。即ち、彼は召集せられて、第二十六聯隊第三大隊第十中隊に屬して旅順にわたり、第三回及び第四回の總攻撃に参加して武勳を輝かした。ついで二〇三高地奪取戦に馳せ参じ、死力をつくして奮戦したが、十一月二十九日未明、左右兩足に敵彈を蒙り、涙をのんで後送せられたのであつた。幸ひにして右下足の貫通銃創はさしたることもなかつたが、左足の銃創は悪化のため切斷の止むなきに至り、終に左膝關節より切斷してしまつたのであつた。

衛戍病院にあつて療養に専念しながら考へた。
「補正行はその最期に際して、七度生れて朝敵を亡ぼさんといつた。七度生れるといふことは、神様の眼からみて、この人物なら七度もこの世に送つてもよいと、鑑にかなはねば出来ないことだ。即ち、この世を終へて天に歸つた時、神様から御苦勞であつたと喜んで迎へられ、御苦勞だも一度世に出て働いてくれと頼まれることだ。自分は死す



變るところなく活動した。一日の仕事を終へてかへると、體は綿のやうに疲れた。しかし、彼はそれを面には出さなかつた。戰場では疲れたからといって休むわけに行かぬ場合がある。ねむいからといって眠ることも出来ない。それを思ふと蒲團の上で安樂に疲れを癒すことの出来る自分は幸福ではないか——。

『乙助さんを見習へ！』

いつの間にか、さういふのが村での通り言葉になつてしまつた。若い身空で遊ぶことばかりを考へてゐるのらくろ息子は、必ず親からさういつて説諭された。

農閑期になつても、彼はごろ／＼してはゐなかつた。木材の運搬などの労働に従事しては、一錢でも多くの収入があるやうに努力した。

『乙助さん、働くのもいゝが大抵にしなされや』

彼の無茶苦茶な働きぶりを見るに見かねて注意する人もあつた。しかし彼はさういつた忠告には耳もかさずに働きつづけた。

かうした不斷の努力は漸次實りはじめた。生活は次第に

彼の子どもも今や成人して、父の勤勉に見習つて一心に家業をもり立てた。

『お父さん、もう休んで下さい。今後は私が努力して、お父さんの名を辱しめないやうにしますから……』

長男の切なる請ひを容れさせられて、彼は隱居の身分にならざるを得なかつた。

しかし、長い間働きたれた彼は、何もしいては居れない。孫の守をしながら、盆栽や野菜の手入れなどをして、楽しく餘生を送つてゐる。

『人間の一番大切なことは、協同一致の精神だ。人間はお互に持ちつ持たれつで暮さねばならない。しかし、大抵の人は、自分の品は十錢でも高く賣らうとし、他人の品は十錢でも安く買はうとする——私はこの金を兩方て相談して五錢づつ分け合ふのが本當の人間の行ひだと思ふ』

これは彼が長い人生の旅から得た経験だ。もし彼のいふやうなこの精神があつたら、實際勞資間の争ひもなくなるであらう。

樂になつた。五年にあげず襲つてくる凶作そして饑饉に直面しても、どうにか切抜けるやうになつた。自分達一家が切抜けるばかりでない、近隣の百姓を助けることが出来るやうになつた。

凶作のあとには、必ず悲惨な光景が、村のそこ此處で見られた。肥料代や税金はおろかその日の糧食にも困つた百姓は、どうしても、抜け切れぬ借金の手枷足枷からのがれるために、愛する血を分けた娘を金に代へるのだつた。かうした慘状をみてゐると、彼は黙つては居れなかつた。血と汗の結晶ではあつたが、惜し氣もなく自分の貯金の中から、幾分を割いてこれを救ふのであつた。

『竹内さん、このお禮はどうしたらよいか分りません。貴方は命の恩人です……』

救はれた者は涙を流して感謝するのだつた。しかし彼は手をふつて事もなげにいふのだつた。

『なアに、この世は持ちつ持たれつでさア……』
努力の上に積む努力——終に彼の奮闘は酬いられた。相當の土地が彼の名儀となつた。新しい家が出来た。そして

使命に生く

第二國民の黨育に努めた中村信雄氏

原籍地	福岡縣山門郡三橋村棚町九七〇
程負度傷	左大腿部貫通銃創

『中村先生はいらつしやいますか？』
聞き馴れた聲が聞えて来た。訪れて来たのは、彼が出征前に教鞭をとつてゐた小學校の管理者だつた。
『先生、その後、傷の方はいかゞですか。大分よろしいやうに聞きました。』
『有難うございます。まあ大分よくなつたやうですが、どうも痛みがとれなくて困つて居ります。』

『さうですか。それはいけませんア...』
客は何かいひたげに、ちつと彼の顔をみてゐたが、思ひきつたやうに膝をすゝめた。
『時に先生、實はお願ひがあつて参つたのですが...』
『はア、何事でせう？』
『御不自由なお體のところを、御無理かと存じますが、實は、先生に御出馬を願つてもう一度、私方の學校で教鞭をとつて頂きたいと存じまして...兒童達も大變先生を慕つて居りますし、學務委員や有志の者も、みんなその希望を持つて居ります。』
思ひがけぬ話を切り出されて、彼はちつと客の顔を視つめてゐた。
『しかし、松葉杖ではねえ...』
『そんなことはありませんよ』
客は強く首をふつた。
『先生は名譽の御負傷ではありませんか。松葉杖をついてゐられるのは、恰度金鷲勳章を下げてゐられるのと同じだと思ひます。勿論そのお體では、體操などは出来なくなり

ますまいし、御不自由ではあらうと存じます。しかし、私達の考へでは、さうした姿の先生に接すことだけでも、兒童の精神教育に對する影響は甚大であらうと存じます』
客の聲は次第に熱を帯びて来た。
『いろ／＼御事情もありませんが、このところ控へて御承引願へますまいか』
『はア...』
と答へたまふ、彼はちつと頂垂れた。自分のことを斯くまで考へて呉れる先輩の厚情が、沁々と胸にしみわたつたのだ。
『御厚情の程、たい痛み入ります。この體では十分に責任を果せるかどうかと存じますが、皆様のお助けで出来るだけのことをやつてみませう。どうせ一度はこの命は御國のために捧げたのです。死んだつもりでやつてみませう』
その言葉は、感謝と熱誠のために顫へてゐた。

彼中村信雄は、福岡縣山門郡三橋村に生れ、入營までの數年は、土地の小學校で教職にあつて、第二國民の黨育に
つくしてゐた。適齡に達して歩兵第四十八聯隊に入營したのは、明治三十六年十二月——時既に日露間の風雲漸く急を示げんとする時だつた。明けて二月、日露間の國交斷絶と共に、彼の聯隊は直に出動征途に就いたが、彼等新兵はあとに残され、ひたすら訓練に力めて、晴れの出征の日を待つた。
同年五月、待ちに待つた動員下令を見、彼等勇躍して征途に上つたのである。本隊に合すると共に各地に轉戦、遼陽の戰を経て、十月の沙河會戰に於て、彼は左大腿部貫通銃創を蒙り、涙を呑んで後退しなければならなかつた。一日も早く全治して再び戦線へ出たいと願つたが、経過ははかばかしくなく、病院生活の中に、その年も暮れ、春も過ぎた七月になつて退院することになつたが、未だに彼の左脚は自由がきかないのだつた。松葉杖に縋つて歸郷したものの、患部の疼痛は去らず、自宅にあつて醫療や湯治に専念しつゝあつたのである。

小學校管理者、學務委員その他有志の推輓否み難く、再び懐しい教壇に立つた時、彼は第二の國民を養成することの重大な責務と意義とを深く感じた。出征前として何も蔑ろにしてゐた譯ではないが、日露戦役後の日本は一躍して世界の日本に進出した、この新興日本の將來を守るものは今の少年である。この少年の指導如何が、十年後二十年後の日本の興亡を左右する事になるのだ。

この重大な意義に鑑み、彼は教育勅語と軍人に賜りたる勅諭の御精神に基き、ひたすら子弟の教育に勵んだ。松葉杖の先生、それは、彼の小學校の名物の一つとなつた。幼いながらも兒童達の胸には、この日露戦後の勇者の面影が強くやき付けられた。十數年の間、彼は兒童達の間に、崇敬の的となつてゐた。

大正五年になつて、思はぬところから、轉任を懲瀆された。新天地開拓のために渡鮮せる戦友から、黃海道載寧郡北票尋常高等小學校長として來任するやうにと勧められたのである。

この地域は兩側に載寧江本支流があつて、東西北の三方

つた。しかし、すべての反對をおし切つて、敢然として渡鮮したのである。

草創の際とて、學校の組織も整はず、學校經營の苦心は一通りではなかつた。従つて、事務多端にして寸暇なく、而も氣候不順で不馴な土地とて、傷癩の身に殊更ひどくこたへ、甚しい疲勞のため、極度の神經衰弱に陥つた。

『先生のお蔭で大分學校の方も整ひましたし、この上御骨折願へれば幸せですが、私の方の慾ばかりもいつて居れません。そのまゝでは先生はいよ／＼お弱りになるばかりですから、この際、もうすこし樂な方へお移りになつてはいかゞでせう』

上司の者が見るに見兼ねて、勧めるのであつたが、今一步といふこの際、こゝを去るには忍びなかつた。悲壯な覺悟をもつて、學務に盡瘁しつゞけたので、漸次小學校も整備して來た。その頃から、彼には一つの理想が燃



え上つて來た。それは、自分が手懸にかけた子弟と共に農事に従ひ、自ら指導者となつて子弟に農業の實際を教へると共に、且つはその人格陶冶に努力しようといふのである。この附近

はこの大河に限られ、外部との交通は渡船による外はなく、而も結氷期や風雨や雪の時の危険はこの上なかつた。しかも教育機關は未だそなはらない頃とて、移住の内地子弟は小學校に通ふためには近くとも三、四里の距離があつた。そのために、折角學齡に達しても、義務教育を受ける時期を逸してゐる有様だつたので、附近住民が相圖つて、學校を新に設置することになつた。それが北票公立尋常高等小學校であつた。

傷癩部は氣候の變り目や多季などには、づきん／＼と傷んだ。この體で氣候の不順、ことに寒冷の嚴しい朝鮮に行つたら、どうなるか心配になつた。しかし、朝鮮開拓なる國策の許に、故郷を離れて活躍してゐる同胞を思ひ、十分な教育を受け得ない子弟の不幸を思ふ時、彼の心は動かされた。

『こんな體でも、御國のお役に立つのなら本望ではないか...さうだ、自分の命は御國のために捧げたものだ。御國の大陸發展への一捨石となつたら本望ではないか』周囲には、彼の體を心配して、口を極めて止める者もあ

は僻陬の地として、小學校以外の教育機關はなく、父兄は大抵自作農程度で富裕ではないから、子弟を遊學せしめることも出来ない、かういつた教育上の缺陷を補はうといふのであつた。この理想を實現するために、大正十年、辭意を願ひ出た。しかし當局では、彼が全然教職より去るのを惜み、幾度か再考辭意を懇懇したが、彼の決心は固かつた。そして大正十一年の五月に及んで、依願免本官となり、彼の希望は達せられたのだつた。

植民地の繁榮は健全なる農業の發達によつて決すること勿論である。彼はこの見地から優秀なる農夫を育成すべく、子弟を集めて農業に従事した。折にふれ、彼は教育勸語と軍人勸諭の精神によつて、子弟の思想嚮導につとめた。それは實に生き甲斐のある生活だつた。そのため彼の健康も漸次恢復して來た。

彼に對する地方民の敬服は甚しく、大正十二年二月には推薦せられて同地學校組合管理者となつた。そして、健康ならざる身を挺して、教育制度の充實と向上に力めた。しかし、この濕潤な土地は、彼のためには保健の地では

なかつた。

『自分が骨を埋むるところは、この地以外にはない！』さう決意して、忍べるだけは忍んだが、この上無理をしては、自分の健康を保つことが出来ないことを感じた。そして、昭和二年に至つて、涙を吞んで地方民と惜別し、現住地——平安南道鎮南浦府麻山里に引き移つたのである。この地は氣候も温順なので、彼の體にはよかつた。爾來、

彼はこの土地にあつて果樹園を營みつゝある。大正八年に實父を、同十一年には妻を、同十五年には實母を喪ひ、現在は家族五人であるが、物質的には甚しく裕福とはいへないけれども、常に「誠」の一字を生活の根幹とし、軍人勸諭の大御心に遵ひ奉るを旨とし、世道人心のために微力を盡すを忘れない。その半生を貫くたゞ一つの精神は、實に報國の一語につきる。

現在では、府會議員、同業産業兩組合評議員、金融組合評議員、該地方青年會々長等の要職にあつて、不自由な身を推して地方自治のため、發展のために盡してゐるのである。

粒々辛苦の跡

|| 刺繡師として成功せし中丸留吉氏 ||

本籍地 神奈川縣高座郡六會村西俣野九五八
負傷 兩大腿骨貫通、左大腿骨折、左二足關節骨折(左足跛)

『なあに、人間決して短氣なんぞ起してなるものぢやありません！』と中丸留吉氏は語り出した。
『近頃三原山とか、瓦斯心中だとか、毎日の新聞に二人や三人の短氣者を見ない事はありませんが、——人間死ぬ氣になりや、何だつて願ひの叶はない事ア、ありやしません！ 然し何ですよ、——人間誰だつて、死んで仕舞ひ度い氣になる事が、一生に一度や二度はあるものですよ。私なぞも、……まあ、あの時よくぞ死ななかつたと思ひ出しますよ』

彼は當年五十一歳の中老紳士。今大連市信濃町四十三番地に大きな刺繡店を經營して、使用人日支人合せて十數名を使い、月收九百圓(實益は三百圓を下らず)資産も二萬圓以上と言はるゝ成功者である。彼は左足の自由を持つてゐない。これは往時日露戰爭の折に、奉天の戰闘でうけた名譽の負傷の名残である。私達は感動すべき、彼の成功苦心談を傾聴しよう。

『私は神奈川縣高座郡六會村西俣野九五八の農家に生れました。で、ずつと農業をやつてゐたのです。明治卅七年十月二月第七師團歩兵第二十七聯隊に入營した時には、あの日露戰爭の眞最中でせう。喜びましたね。何しろ若さの元氣一杯でしたから、鬼ヶ島征伐の桃太郎のやうに胸が躍りましたよ。翌年の卅八年二月十日には、早くも出征して、奉天の戰線に馳せ参じたのは二月二十六日でした。露助の生ツ首を、五ツ六ツ素つこ抜いてやらうと、でぐすね引いて待つてゐたのに、運が悪かつたのですね。まだ何一つ戦功も立てないのに、三月五日の戰闘で私はやられちやつたのです。奉天の戰は敵も死物狂ひです。打出す矢弾は文字

通りに隙間もないくらゐでした。その矢弾をくゞりぬけて奮戦してゐる最中、ガンと頭に響いたと思つたつきり、命よりも大切にしている銃を固く握つたまゝで、其の後のことは何一つ覚えてませんでした。気が付いて見ると野戦病院のベッドに寝かされてゐて、足をしこたまやられてゐるんですね。敵の砲弾の破片が兩足の大腿部を貫通してゐて、殊に左足は、大腿骨が折れてゐて、その上左番二足關節までが骨折してゐるんですね。その痛む事、意識が戻つて来るにつれて、もうその痛さは堪えられませんが、もう堪らぬ、これア死んだ方がましだ。命は、陛下に捧げる積りで出征した自分だ、死んで早く樂にならう——さう思ひ私は身跳きして腰の銃剣を探つて見るがありません。それはその筈、病院に收容さるゝと共に、腰のものなどは皆取り外してあるのです。で、私は身もだえして銃剣を取りに立ち上らうとするが、體の自由が利きません。猶も暴れ廻る。それを戦友に慰められて思留りました。何しろ戦傷者の数が夥しいので、手當を受けるまでには、随分長い間待たされる始末です。やつと應急の手當を受けると

死ぬやうな苦痛をしのんだまゝ、荷馬車に乗せられて數時間たがごととゆられ、やつと、遼陽の兵站病院に送られ、落着く暇もなく又大連の兵站病院に送られました。それでも重傷なので遂に同年の四月二十六日、更に宇品に送還されて廣島の豫備病院第七分院に入れられました。それから今度は又東京の豫備病院の方へ送らるゝ事となつたのですが、到頭私は途中で重態に陥つて仕舞ひました。護送の看護長は驚いて私を大阪の豫備病院に擔ぎ込んだのですが、そこで前後二回の大手術が行はれました。又擱きの日の悲觀病が私に取り付きます。あまりの疼痛の甚だしさに、私は再三言葉を盡して左足の切断を嘆願しました。此の疼痛の原因を除いて仕舞へば、後は屹度樂にならうし、此の際樂にさへなれば、私はもう一生の片輪などはどうでもいゝと思つたのです。然しその時の係りの軍醫殿は、随分と物の解つた親切な方でした。「君が強つての希望なら、それア切斷せん事もないが、然し君、よくよく考へて見る事だぞ。今痛みはひどからうが、じつと我慢すれば、二年も三年も續くものぢやない。

それに君の傷は、骨が役に立たなくなつてゐるのぢやない。だから此の際我慢をぢつと通して見給へ、癒つた後でどんなに君はその足を有難がるか判らない。所が今切斷すれば、君は一生一本足の案山子だ。——考へて見給へ、痛いや苦しい所の事では無いと思ふぜ！」私は軍醫殿のこの情理に服しました。そして今この通りこの左足があるのですが、よくぞあの時切斷なんぞしなかつたと思ひますよ。短氣は損氣、あゝ、萬事短氣で得をする事は何も無いのです、桑原、々々」

と彼は深い感慨に思ひ入つて更に語り續いだ。

「それから同年の十一月、東京の戸山分院に送られて、ずつと治療を續けて貰つたのですが、お蔭で經過は段々と良く、翌る三十九年二月一日には、恩給法第九條、第五項症といふ事になつて、兵役免除の上、歸郷を命ぜらるゝ事となりました。然し歸郷後も専ら療養に努めて、轉地だ、湯治だ、とあらゆる手を盡したのですが、患部の激痛は少しも去りませんで、同年の六月再び東京衛戍病院に入れて貰ひ、今一度の手術をして貰ひましたが、その結果は先づ

以て經過もよく、七月には相州湯ヶ原温泉へ轉地をして、翌月八月には再び歸郷する事が出来て、更に第九條第四項症に變更される事となりまして、御覽の通り左足がきかなくなつて跛になつてしまひました。

偕て、私の治療のお話はこれ迄ですが、廢兵になつてからのお話はこれからなのです。不具者になつた、さあその體で食つて行かねばならない。——その深刻な苦惱を、經驗者以外の誰が想像出来るでせうか。

私は郷里に歸つて來た。少々の恩給は頂ける、然し家が貧しい私は、逆もそれだけでは暮して行けないのです。忽ち生活難に陥つて、全く途方に暮れてゐますと、偶々東京巢鴨の廢兵院といふのが開院されたと聞いて、私は明治四十年の五月、頼んでそこへ入れて貰ひました。

これでやつと小康を得た形です。私は先づ、落ちつきました。然し私は、一日でも早く生計の法を考へねばなりません。長い一生です。一生廢兵院の御厄介になる譯に行きません。それに第一私の自尊心と向上心がそれを許しません。



「何か自活の通を講ぜねばならん。といつて、この體では農業はつゞけて行けないし...これは何か手の職を覚えなくてはならん。それより外に進むべき道はない」

さう考へてゐる矢先、癡兵院主事又森大尉殿の御斡旋で東京市牛込區改代町の刺繡師金森伊兵衛氏に入門して、刺繡の技を習得する事になつたのです。これが今日私が刺繡で身を立て、居る因ですが、そこで私は約八ヶ月、一心不乱に刺繡の業を見習ひました。その間の苦心も並大抵ではありません。何しろ鉞や鐵砲を持つ外は、手先の仕事といつたら繩を綱ふことより知りません。急に上品な刺繡をはじめたのですから、人知れぬ苦勞をしました。それでも兎に角一人前の刺繡職工となれましたので、それから癡兵院で製作品を作り、若干の賃金を得る事が出来るやうになりました。ところが、何の光榮ぞ、明治四十一年の六月、今の參謀總長宮 閑院宮殿下が癡兵院に御台臨遊ばされて、癡兵の製作品として、私の羽二重刺繡ハンカチーフを、御台覽御嘉賞、その上御買上の榮まで賜つたのであります。猶又、四十一年四月には、畏くも 明治大帝の、天覽の光榮にすら浴したのであります。

となりました。そこで、推薦せられて、明治四十一年十二月、御恩ある癡兵院を出て三越呉服店の刺繡部に這入りしました。私は日給九十錢を得て、茲に初めて獨立の生計を得る事が出来たのです。獨立の生計！これをどれ程、私は願ひ、憧れて、これ迄の艱難辛苦を續けて來たのでせう！私はその時の歡びを、今もまぎ／＼と覚えてゐます。一生片輪で乞食になるのか、と思つてゐた私が、堂々完全な男子達に立ち混つて、人並みに生きて行く事が出来る事になつたのです——」

と彼は非常な感慨に満ちて、暫く心の感動を收めてゐるやうだつたが、

『何？ それから？ ——それからは大失敗』
と彼は明るく笑ひ出した。

『三越に三年居ますと一生懸命なものだから、腕も上り、信用も加はりましたね。こゝで一番獨立して一旗あげてやらうと思つて、大きな希望でこの大連に渡つて來ましたね。それが明治四十四年の三月で、當市の伊勢町に居を構へて店を開いたのです。所が大失敗、何しろ其の頃、大連

はまだ人口も稀薄でしたからね、刺繡などの需要は、まだまだなかつたのです。忽ちに大成金になる考への私が、到頭食つたり食はなかつたりに墜ちて仕舞つたのですよ、はは、ムム——

所が實際は、彼はその悲境の中を、堅忍不拔、不具の身を提して東奔西走、晝は各町を廻つて注文を集め、夜は夜更け迄その業に従つて孜々汲々、遂にはその地理に通じ、又人々の同情も擱んで、到頭立派な一本立となつて仕舞つたのだつた。

其の後妻を迎へて夫婦共稼ぎとなつて、家運は益々隆盛、遂に本文の冒頭に述べた通りの今日を築き上げてゐるのであるが、我々は此の不撓不屈の士、而して功成つて功に誇らない謙抑のこの好紳士を、心から我々の模範であると考へる。

猶、彼は社會救護の念に極めて厚く、公共事業に盡瘁する事一再ならず、特に赤十字社の爲には功勞顯著である爲、大正十一年十二月二日、赤十字社大連支部は銀側時計を贈つて謝意を表し、更に昭和三年二月には、赤十字社

總裁宮殿下より最高表彰の有功章、及び木杯一組を賜つてゐる。

なほ、在郷軍人會大連第三分會 長松崎貞良氏の談話は彼の人格を窺ふに好個の適例である。

『昭和六年の事變以來、皇軍戦傷病兵及び遺骨の送迎に對して、氏は不自由の足を引摺つて殆ど毎回送迎の勞を惜まれません。氏が傷兵會の旗を奉持し、左脚を引摺りながら、慰靈祭に玉串を奉奠する様は、實に感激なくしては見ることが出来ません。昭和八年三月より九年四月までの間に、軍隊、戦傷病兵、遺骨の送迎、その他患者の見舞など約三百五十回に及んでゐます。平均毎日一回の送迎がある譯ですが、氏は忙しい家業の傍ら、よくこれ程の奉仕がつゞけられるものと、祕かに驚き、心から崇敬してゐる次第です。この三月には自分の手で立派な分會旗（時價約八十圓）を拵へて寄贈されました。分會員の等しく感激してゐる次第です。なほ餘談ながら、氏は人の借金の保証人になつて、多大の損害を受けて居られます。しかし氏は人を責めることもなく黙々としてゐられます。かうしたと

ころにも氏の崇高な人格があらはれ、吾等の等しく尊敬おく能はざる次第です。また、氏の近所の人の話ですが、氏の家からはたゞの一度も氏の怒聲を聞いたことがないさうです。夫婦喧嘩は勿論のこと、店員を叱りつける大聲も聞いたことはないといひます。近所の人達はむしろ不思議に思つてゐる位ださうです。何でもないことのやうですが、こんなところにも氏の人格がうかゞへるてはありませんか。』

因みに彼には三男があつて、長男は東京三越呉服店刺繍部に在つて刺繍の實地見習中であり、他二男は家庭にあつて學業に専念中、又妻女は貞節勤勉、家庭は常に和樂に満ち、全く近隣の羨望の的となつてゐる。又店員に對すると實に慈父の如く、店主と店員との間の情愛の細やかさ美しさは、近隣の噂であるといふ。

輝く義足

職務を完全に遂行した牟田作一氏

本籍地	佐賀縣神崎郡神崎町大字神崎四
四番地第一	
程負傷	左腿部骨折貫通銃創

明治三十九年の冬。

雪がチラ／＼降る、寒い或る朝のことであつた。久留米の衛戍病院の門内に、質素な洋服姿の、見るからに實直さうな三十前後の青年が、少し跛をひき乍ら這入つて来て、懇懇な態度で、院長に面會を求めた。

受付の者が來意を聞き、
『私は佐賀縣神崎郡神崎町の者で、牟田作一といふ傷痍兵

ですが、おかみから戴いた義足の事で、お願があつて参りました』

『さうですか。では院長に申上げて見ますから、暫くお待ち下さい』

と院長室に行つて、その旨取次ぐと、院長は書類を整理してゐた手を休めて、

『直ぐ會はう、丁寧に應接間に待たせておくがよい』

『ハイ』
そこで牟田作一と名乗る若き痍兵は、早速院長の面會室に通された。待つ程もなく院長は、にこやかな微笑を湛へつゝ姿を現はした。若者はきちんと直立不動の姿勢を取つて、自分の姓名を名乗ると、

『さ、まあ掛け給へ』
戦争での負傷者は、即ち貴い國家の犠牲者である。院長は極めて愛想がよかつた。

『何か、義足の事に就て、相談があるといはれたさうだが』
『ハイ、實は少しゴムの具合が悪くなりましたので困つて居りました所、在郷軍人分會で、こちらへお伺ひして直し

て戴くがい、といはれましたものだから、お手敷を煩はして寔に恐縮千萬でございますが、お願に参つた様な譯でございます」

「お易い御用だ、證明書さへあれば何時でもやつて上げる。傷は痛む様な事はないかな」

「お蔭様でもう全く何ともございませぬ」

「併し今日の様な寒さには、いくらか疼痛を感じるだらう。傷痕といふものは随分長くチク／＼するものだから」

優しい勞はりの氣持が、院長の言外に溢れてゐた。牟田作一は頭を下げて、

「私などは左足一本を失つたばかりで、未だ／＼軽い方でございますから、痛いの痛くないと申しては罰が當ります」

「何處でやられたのかね」

「沙河の戦鬪でした。骨折貫通銃創で、此處から切斷致しました」

と左腿の中頃を抑へて見せた。

「ふうむ、沙河の戦鬪は随分激しかつたさうだな。私の知人も五六人あすこで戦死してしまつた。君は四十八聯隊で

出征したんだらう」

「ハイ、四十八の第十二中隊です」

「十二中隊は戦功のあつた隊だと聞いてゐる。よく併し生残つたな——」

さういはれて、彼の眼前にはあの當時の慘狀が彷彿として浮かび上つてきた。

明治三十七年十月十四日から十五日にかけての沙河の激戦だ。敵は頑強に抵抗をつゞけて、一步も退く様子もない。敵は度重なる敗戦の恥を雪がうとする。我が軍はこれを一氣に撃破しようとする。こゝに端なくも大激戦が開かれた。彼の中隊二百二十三名中、この二日間の戦鬪で百四五十名の死傷を出したのをみても、激戦苦戦の様が偲ばれる。しかし、彼の中隊はよく最後の五分間まで持ちこたえた。辛うじて敵を撃退して後、第十二中隊で健在だつたのは僅かに六七十名に過ぎなかつた。しかも、中隊長鶴田大尉まづ敵弾に重傷、つゞく小隊長高園中尉また重傷、廣瀬少尉、富永特務曹長みな重傷、米田曹長は即死、隊の幹部は殆んどなく、わづかに志波軍曹が中隊の指揮に當つて

るたのである。

「あの激戦によく生き残つたものだと、自分でも不思議に思つて居ります」

牟田作一は感慨深かさうにいつた。

「それは天命ぢやよ。しかし、君も片足なくては種々不自由だらうね？」

「始めの三四ヶ月は全く困りました。義足に慣れませぬし氣持もいら／＼致しまして——。けれ共慣れてしまひますと、平氣です。歩行も人並で、自轉車にも乗つて居ります」

と、牟田は朗らかに笑つた。院長は彼の健康さうな顔色を見て、満足げに頷きつゝ、

「義足は、恩賜の物だらうね」

「さうであります」

恩賜の一言に、牟田は再びびんと椅子から立上つて、軍隊言葉でさう答へ、感謝に充ちた眼ざしをした。

「今、醫官に命じて、よく修理させる。決して遠慮は要らないから、故障が起つたら、どん／＼申出なさい。現在の物が役に立たなくなつた場合には、新品を調へて上げる」



『さういふ時の費用は、どんな具合になるのでせうか』
『陛下の優渥なる恩召しによつて一切、宮内省から支辨されるのだ。だから、金がなくても、心配することはない。陛下は絶えず、諸君等の様な勇敢な犠牲者の身の上を御軫念あらせられて、特に折々御内帑金を賜はるのだ』
『ハッ—』
牟田の双頬に熱涙が溢れ出た。感激の爲に言葉も出ないらしい。

嗚呼、陛下には、吾等草莽の微臣に對して、斯くまでも大御心をお使ひ遊ばされてゐるのであつたか—。有難いことである。畏れ多い極みである。自分達はこの大御心に答へ奉る爲に、至誠純忠の一國民として、粉骨碎身しなければならぬ責務があるのだ。
彼はきつと唇を噛みしめたまゝ、暫く身じろぎもしなかつた。

二

牟田作一は入營前までは、家業の農業に従事して、極め

て眞面目に働き、近隣きつての模範青年であつた。
農耕の傍ら、孜孜として讀書にいそしみ、習字に勵んだので、なまじつか上の學校に行つた連中よりも、能筆家で學力もついた。

歩兵第四十八聯隊に入營すると、その明敏な頭腦と、眞摯な性格は、上官の認むる所となり、忽ち成績は群輩を凌いで、上等兵に昇進し、やがて善行證書、並に下士適任證書を授與せられ、意氣揚々と歸郷した。
町内の人達はこの様な優秀な兵士を、自分等の所から出したことを誇り、—牟田の作一さんを見習へ、といふのを、若者共への訓戒の言葉とした程で、何か事が起ると、直ぐ彼の所に持つて來た。

地方での優良青年は、軍隊での模範兵となり、軍隊での模範兵は又必ず、地方での模範青年と仰がれる—といふ言葉は、彼の上にびつたり當て嵌まつた眞理で、彼の感化は町の後進青年達の間に浸潤し、いろ／＼の不徳な氣風は次第に影を潜めて、牟田作一は若き町の指導者の位置におかれたかの如く見えた。

となつた。

『軍醫殿、早く癒して下さい。牟田は戦友の仇を取りにゆかねばなりません』
己れの傷の重きも忘れて、彼は口惜しげに叫ぶのだつた。

『いや、癒してやりたいのは山々だが、お前の傷は少し深過ぎる。或は二度と銃を持つことは出来いかも知れぬぞ』
『えつ?』

彼の面は、悲痛な驚きの爲に歪んだ。
遂に彼は内地に送還されて、左大腿部を切斷し、三十八年の六月十日を以て、兵役を免除された。

彼は寢臺の枕を掴んで、男泣きに泣いた。
不具者になつたのが、悲しいのではない。二度ともとの職業に就くことの出来ぬのが辛いでもない。幾多の戦友を殺し、而して己れを沙河の赤土の上に叩きつけた、憎む可き露軍に對して、報復の銃火を浴びせてやる日が、永遠に巡つて來ないか、と思ふと、腸をかきむしられる様な氣がしたのであつた。

軍隊での厳格な規律的訓練を受けて、身心共に一段と磨かれ、世に立つてゆく上に於ける大きな自信を得た彼は除隊の翌年の春、即ち明治三十五年の四月に、福岡縣の巡査の試験を受けてこれに合格し、任地に赴いた。此處でも彼は拔群の成績をあげて、將來の出世を約束されてゐたが、二年目の三十七年には、日露の國交が斷絶して、露兵は續々と滿洲の野に南下し、日本も亦、乾坤一擲の大決心を以て、皇軍を海の彼方に送り、亞細亞の一角に、漠々たる戦雲は漲つたのである。

牟田作一も直ちに召集令を受けて、聯隊に馳せつけた。そして、六月の十五日に、長崎港を出發、蓋平、大石橋、海上、鞍山店、金山嶺、首山堡、遼陽、と各地に轉戦して弾雨、砲煙の戦陣生活にまみれ、意氣益々揚つた時に、沙河の會戦だ。
嗚呼、恨みは長き沙河の戦闘。
敵の銃弾は無慘に左足を打貫いて、彼は燃ゆるが如き憤怒の念を抱きつゝも、瘡つける身の詮すべもなく、戦陣を退いて、野戦病院に空しく呻吟の日を送らねばならぬ運命

三

名譽ある負傷者として、郷里に歸つて後、彼は暫く家で、静養の日を送り、専ら書物に親しんでゐた。

併し何時までも遊んでゐる事は、境遇が許さぬし、且つ彼の様に勤勉力行の精神に富んだ若者にとつて、無爲の生活は堪えられないものではない。

恩賜の義肢をつけて、歩行の練習をし、健康の保持にため乍ら、職を求めてゐると、以前から彼の眞面目な性行に感心してゐた町の有志達が奔走してくれて、神崎町役場の書記に任命され、以来明治四十一年に家事の都合で辭任するまで、篤實に勤務を續けた。

そして四十三年の五月に、佐賀區裁判所神崎出張所で、登記事務に關する代書業を始め、併せて、収入印紙の賣捌きを爲しつゝ、年收は千圓以上を上げるに至つた。

この間、彼は我國にとつて重大なる纖維工業に目を付けた。日本の將來を思ふ時、彼は日本に纖維植物の少いことに氣がついた。こゝに彼は私費を投じてマオランの研究を

數年來つゞけ、その栽培がこの土地に適してゐることを確めるや、村民に對してその栽培を説き薦めた。その成果は漸く芽を出し、今や郡内に六百人の栽培者をみるに至り、マオラン栽培神崎郡組合までが成立し、彼はその組合長におかれて組合の中心人物となり、義足の身を以て東奔西走、指導獎勵にあたつてゐる。今や、斯業は漸く發展し、組合員からは生みの親としての信望と尊敬をうけてゐる。聞くところによれば、組合員は次回の縣會議員選舉には彼をおし立てようと、より／＼計畫中だといふが、この方面からの収入も相當にあり、安樂な生活を送りつつある。

彼が戦争で片足を失つても、些かも生活に困る事のなかつたのは、青少年時代からの、彼の勤直で向上心に富んだ性行が郷里の間に深い信望を博して居つた一點に起因する。非常時日本の青年諸君よ！ これを見ても、平常に於ける生活態度の如何が、どんなに一人の運命を支配するかが判るであらう。砲火の閃く所にだけ戦争があるのではない。鋤を握り、ハンマーを振る。そこが、即ち御身等にとつて、日常不斷の貴き戰場であるのだ。

深夜の怪燈

夜の目も寝ず働いた井上重吉氏

本籍地 埼玉縣南埼玉郡大山村大字荒井
新田四四九番ノ二
程負傷 左大腿骨折直貫銃創

「おや、今頃店に灯りがついてゐるが、どうしたのだらう」
福田足袋店の主人は、眞夜中に便所に起きて、店から灯りが洩れるのを見つけ、不審の眉をひそめた。

「もしや泥棒でも——」
そつと窺いて見様と、ぬき足さし足、店の間に近づき、障子の隙間から目を光らせた。
と——、そこには、一人の青年が、裁ち板の上にかがみ

こんで、豆ランプの光りをたよりに、せつせと足袋を縫つてゐる。

「なあんだ、あれは此間見習に這入つたばかりの重吉ぢやないか。」

泥棒でないと分つたので、ほつとしたものの、併し重吉が何の爲に、こんなに遅くまで仕事をしてゐるのか？ あ奴は、家が貧しいし、それに戦争で不具者になつてから、變に無口で、暗い顔をしてゐるが、ひよつとすると、主人の目を掠めて、足袋を盗んだりするのではなからうか？ などと、漠たる疑ひが湧いて來て、暫らく重吉のすることを見詰めてゐたが、重吉は唯一生懸命、針を運んでゐるだけで、一向變つた素振りをするでもなかつた。

「重吉！」
主人は聲をかけて、障子を開けた。重吉はびつくりして頭を上げ、

「あ、旦那ですか——」といったが、悪いことを發見けられたかの様に、眞赤になつて目を伏せた。
「何をしてゐるんだ、こんな夜中に」



井上重吉の家は埼玉縣南埼玉郡大字荒井新田で、家は代々の土着の百姓。重吉はその三男であつたが、貧農の家に生れた者の常として、早くから家業を手傳はさせられた。

どちらかといへば、鈍重な性格で、どんなに辛いことがあつても、じつと腹の中で噛み殺して、愚痴もこぼさず、不平も鳴らさず、素直に、勤勉に、農事に精を出す朴訥な若者だつたので、両親や兄達から可愛がられ、村の人達にも氣受けがよかつた。

徴兵検査には合格したが、残念乍ら、第一補充兵に廻されて、入營は出来なかつた。

両親達は、一人でも人手の多いことを望んでゐたので、結局その方を喜んだが、彼は、朋輩の誰彼が、軍服を着て、剣を下げ、颯爽たる姿で歸省して来るのを見たりすると、流石に羨やましくてたまらず、自分の不運が嘆かれるのだつた。

二

「はい——、相済みません」

「仕事なら晝間にするがよい。こそくと泥棒の様に、そんな所で——。灯りが點いてゐるから、びつくりしたぞ」と言ひ乍ら、重吉がやりかけてゐた足袋を見て、

「そんな拙い物を作つて、誰にやらうといふんだね」と擲諭つた。重吉はいよく深く俯れて、

「誰にやらうといふ譯でもございせんが、一日も早く、一人前の職人になりたいと思ひまして、晝間習つた縫方を練習して居つたのです」

その真剣な返事を聞くと、主人は少し面喰つた形で、まじく重吉の顔を凝視めた。重吉の眼は、思ひなしか、涙ぐんでゐる様で、

「私のような不器用で、その上不具者は、餘程心がけませんと、皆さんにとつて却つてお邪魔になるばかりです。斯うして、親切に私を置いて下さる御主人に對しても、優しく勞つて下さる店の方々に對しても、早く仕事が出来る様にならなければ申譯がないと考へまして、毎晩二三時間づつ稽古してゐるのでございますが、お目障りになりましたら、止めますから御勘辨下さいませ」

「さうか。さうだつたのか」

主人は、強く胸を衝たれて、熱いものが咽喉もとにこみ上げて来るのを感じた。斯んな真面目な、こんなしほらしい心掛とも知らないで、疑つたり、擲諭つたりしたことが濟まない様な氣がし出したのである。

「いや決して目障りだとか、何とか言ふ譯ではないが——併し、そんなに根をつめては、身體にさけるよ」

「有難うございます」

「お前がそんな心がけて勵むのだつたら、私も明日から、一生懸命に教へてやらう。なあに、不器用でも、不細工でも、熱心さへあれば、人にやれることだ、お前にだつて直ぐ上手になれる私も長年、この商賣をやつてゐるけれど、お前の様に熱心な人は始めて見た。その意氣でやりぬきなさい、きつと成功するよ」

「は……はい」

重吉は膝の上に涙を落してゐた。

殊にその頃は、日露の風雲が、漸く怪しくなつて、轟々たる國論が沸騰し、どうせ一戦争なくては濟まなうな、緊張した空氣が津々浦々まで流れてゐた時代である。「ロシヤを征伐するとなると、俺達が一番に出て行つて働くんだけ」

兵隊になつた連中は、昂然として肩を並べかして見せた。彼等は實際、若者達の間では、一躍英雄になつたかの如き調があつたのだ。

「俺だつて、いざとなれば、彼等に負けるものか。天子様の爲に、日本の爲に、きつと大きな手柄を立てて見せるぞ。」

温和しい重吉は、心の中で叫んで、戦争の始まるのを待つてゐた。明治三十七年、遂に、日露の戦火は交へられ、軍隊はどしどし滿洲に渡る。

勝つか？ 負けるか？...日本興亡の秋である。國中をあげて、熱狂の嵐が吹きまくつた。

そして、待ちに待つた召集令狀が、遂に彼にも配られて來た。彼は躍上らんばかりに勇み立つて、その年の八月、

歩兵第三聯隊補充大隊第一中隊に入隊し、九月の半ばまで教育を受けて、野戰隊補充の爲に、愈々出征の途につくことになつた。

そして、十一月二十六日、彼の所屬する隊は、三里橋北方高地で、優勢なる敵軍と出會し、猛烈果敢な戦鬪を開始した。シューツ／＼と敵陣の飛來する下で、彼は、沈着に射撃を續けた。僅か一月餘りの戰陣生活だつたが、もう弾の音にも慣れて、意氣地なくお辭儀する様なことはなくなつてゐたのだ。

烈しい射ち合ひの後、敵は少し崩れ立つて見えた。勇敢な我軍の兵は、ここぞとばかり、前へ／＼と出て猛射を浴びせる。重吉も負けじとばかり起ち上つて、二三間先きの四地を見つけ、そこに據らうと駆け出した。

と、突然、左足が利かなくなつて、ぼつたりとつんのめつた。次の瞬間、焼けつく様な腿の痛み。

「糞ッ。やりやがつたな」

彼は齒噛みしつ、その儘伏せの姿勢になつて、どんとん射ちまくつた。それは無我夢中の動作で、何時の間にか

脚の痛みも打忘れ、敵が退却し始めた時には、「糞ッ」と叫んで、進撃し様としたのだつたが、残念乍ら、もう鮮血はべつとりと服を濡らして、一歩も歩くことは出来ない。左大腿骨折貫銃創であつた。涙をのんで野戰病院に送られ、そこから又東京豫備病院に送還されて、遂に左足を失つた。

三

足の自由を失つては、再び農業に就くことは出来ない。かと云つて、彼の家は、勿論彼を遊ばせておく程の餘裕はない。

「何をやつたらいいか」

彼は熱心に考へた。そして思ひついたのが、同じ村の柴山にある、福田足袋店の、足袋縫工である。これなれば、坐つてゐて出来るのだから、不具者にでもやれる譯だ。

彼は、福田足袋店の主人に頼んで、見習工に住みこんだ。持ち慣れた針を持ち、使ひ慣れた機を使ふことは、戦争の苦痛にも、傷の痛みにもまして辛かつたが、貧しい自分

の家を思ひ、不自由な自分の身體を顧る時、此處が一生の大難關。この關所を越えぬば、自分は遂に廢人となつて了ふのだ——と血の涙を吞んで、彼は頭張つたのだつた。その頭張りが、深夜の怪燈となつて、主人の眼に止つてしまつたのである。主人は、それからといふもの、我子の如く重吉を勢はり勵まし、手を取つて仕事を教へてくれた。彼が何か不調法をしてかした時、他の店員が、「號さんには困つたもんだね」

などと笑ひでもし様ものなら、自分の悪口を言はれた様に、眞赤になつて怒るのであつた。

彼の腕はめき／＼と上つた。

そして、二年目には自分の家で、獨立して足袋縫仕事をやるまでになり、その親切丁寧な商ひ振りは、忽ちに人の信用を博して、充分に自活の道を開くことが出来た。

現在では、本職の傍ら、小學校兒童の學用品などを賣つて、村童達から優しいおぢさんとして慕はれてゐるが、その長年の勤儉努力の實は結んで、家の建替も完成し、商賣は益々繁盛して、恵まれた平和の日が続いてゐる——。

一流の實業家

|| 負傷を忘れて働いた井上丑太郎氏 ||

本籍地	徳島縣徳島市寺島町字本町北二
	百二十九ノ一
負傷程度	右足趾間貫銃創

徳島縣の徳島市にある、多田商行といへば、諸機械附屬品販賣業株式会社として、地方的に有名な會社で、當今の不況時代にも不拘、堅實なる營業方針の上に立ち、隆々たる發展を見せてゐるが、此の社を背負つて一切の切廻しをやつてゐるのは、井上丑太郎といふ、當年六十一歳の常務取締役である。

井上常務は、常識圓滿にして、識見高く、頗るの精勵家

一

で、徳島實業界に信望の厚い人であるが、唯ひとつ、人と變つた面白い癖を持つてゐる。

それは「井上さんの片胡座」と云つて、椅子に腰かけてゐる時、必ず右足を、左の内腿にびたりとくつつけることだ。井上氏は長年の間、この片胡座をもつて營々と仕事をやつて来た。机に向つて事務を執り出したが最後、一分一秒も休まず、端然と片胡座を組んで奮闘する。見様によつては、それが、坐禪三昧に這入つてゐるかの如く感ぜられる貌だ。

併し、この有名な「井上さんの片胡座」は、決して彼が豪傑流の行儀關はずでやつてゐるのでもなければ、わざと奇癖を發揮してゐるのでもない。彼、井上丑太郎氏は不具者なのだ。彼の右足は、明治三十七年、八月三十一日の首山堡奪取戦で、敵彈の爲に打碎かれたのである。

だから彼は、絶えずこの傷つける足を、左腿に押しつけて暖氣を通はせ、冷却から來る疼痛を防いで居るのだ。

二

彼の出生地は徳島市寺島町字本町で、明治二十七年に、現役兵として、丸龜の歩兵第十二聯隊に入隊した。

温厚で、眞面目な性格の上に、頭も俊敏だったので、忽ち隊中の模範兵になり、上等兵に昇進して屢々善行證書を授與された。

そして三十七年、日露大戦が起ると、充員召集の命を受け、六月に入隊し、間もなく満洲に出征した。

當時、満洲出征軍を二大別して、旅順攻圍軍、野戦北進軍と言つて居つたが、彼は北進軍の中央軍たる野津道貫將軍の統率する第四軍の、後備混成第十一旅團、後備歩兵第十二聯隊第二中隊に屬し、日露戦史に名高い首山堡奪取戦に参加することになった。

首山堡の奪取は、遼陽攻撃の序幕として、重大な意義を有するもので、我軍は悉く決死の覺悟を以て敵の銃火の中に躍りこんだのだつた。

遼陽城頭夜は更けて
有明月の影凄く
霧立ち單る高梁の

中なる慟濼聲絶えて——

悲惨凄絶なる軍歌に唄はれてゐる。

軍神橋中佐の戦死も、この戦だ。

山上を乗取つては又乗取られ、屍山血河の未曾有の大激戦。すき間もなく飛來する彈雨の中を、我軍の將士は傍目もふらず突撃した。その中に伍して、彼も背を裂き、齒を喰ひ縛つて、溝を飛び、石礫を蹴飛ばし、猛進を續けたのであるが、何時しか全身に輕傷を負ふて、服は破れ、血汐は滲み、足の運びも重くなつた。

なかに、これしきのことにつ。——彼は全身の勇氣を奮起して、尙も戦線を前へ、前へと進んだ。

と、右足にギリツツと激しい痛みを感じて、挫と轉んだ。やられたのだ。——未だく命は奪られない。呼吸のある限りは戦ふぞ!

心で絶叫して、銃を杖に起上らうとしたが、どうしても起てない。銃弾は右足趾間を貫通して、完全に彼の歩行機能奪ひ去つたのだつた。

この重傷を蒙つては、いくら彼が心逸つても再び戦線に

立つことは出来ない。無念の涙を呑み乍ら野戦病院に送られ、そこから又内地に送還されて、各地の豫備病院を轉々したが、どうしても无通りの脚力を恢復することは難しかった。そして三十九年の二月に兵役を免除され、郷里に起隊する身とはなつた。

三

彼が郷里に歸ると間もなく、徳島縣に歩兵第二十二旅團司令部、並に歩兵第六十二聯隊が設置せられたので、これに順應して、四十一年の秋、旭株式會社なる陸軍用達社が創設され、彼はその社から乞はれて書記に就任した。足こそ人よりも不自由であるが、勤勉實直な性格は重役の信頼をかち得て、彼は社になくはならぬ重要な人物となつた。所がやがて或る事情によつてその會社は解散したので、清算事務を引き受け、これを終ると共に翌日四十二年一月成立した、阿波煙草元賣聯合會社の社長から懇望され、又書記として調査課に勤めることになつた。其後、煙草事業法が實施されて、同社は、煙草元賣協同人

既に彼は年六十を越えたが、元氣は頗る旺盛で、粗衣粗食に甘んじ、老夫婦の仲睦じさは、周國の人々の語り草になつてゐる。そして今や愛娘も良聲を迎へて、三人の愛孫をあげ、生活は坦々として、家に春風流るの幸福である。昭和七年の勅令第二百五號により、氏は豫期しなかつた特別扶助年金を授與されたので、聖恩の優渥なるに感激して、直ちに二十餘名の老战友と計り、記念事業として、後進子弟の思想善導及び、會員の相互扶助の目的を主とする徳島縣傷病老兵會を組織しつゝある。以下に氏の感想文の一節を引用して後進諸士への戒めとしよう。
『自分は明治三十八年兵後免除後、今日に至る迄の生活過程に於て、未だ嘗て非常に困惑したといふ事を感じない。尤も人間生活である限り種々の出来事に遭遇する事は他人同様自分にもあつたのであるが、病氣や、負傷や、損失や、缺乏はあるが、これは當前の事で、一朝その様な事に遭遇した場合、平常から豫めこれに備へておきさへすれば、決して狼狽も困惑も感ぜずに済むのだ。其の平常からの備へといつても敢て至難な事ではない。始終心を平靜に



の西野謙四郎氏が譲り受け、事業經營を續ける様になつたのであるが、西野謙四郎氏は元衆議院議員で、人も知る、徳島實業界の大御所だ。流石にその人物を見ぬく炯眼は鏡く一介の書記井上五太郎を登庸して、販賣主任の地位に据えたのだつた。西野氏の知遇に感激した彼は、粉骨碎身、職務に當つてめきめきと成績をあげ、事業的手腕の凡ならざるを示しつゝ、大正六年に至つた。

もといこの營業は一定の方針が立ちさへすれば、後は何人にも出来得る仕事であるから、彼はこれを後進者に譲りたいと思つてゐた。ところへ、丁度求むる人があつたので、その方へ轉向した。それは四國四縣に於ける社會事業家として、第一人者たる、徳島毎日新聞社長、多田爲太郎氏であつた。そこで徳島毎日の廣告部主任となり、勤続一年餘にして、多田社長の經營する株式會社日本化學工業所技術部主任に轉じた。そこに在ること二年、更に現在の多田商行の支配人として移つたのが大正九年の八月で、その後社長及び株主一同の絶対信望を負ふて、當務取締役の要職に就いた譯である。

持つて自ら戒め、法外な慾望を起さず、家業に親しみ、萬事質素にしてさへ居ればよいのだ。さすれば日々執つてゆく業務には自然と趣味が生れ倦怠が起らぬ。餘計な物費りもないから無理もゆかず多少の貯へも出来る。これ即ち平常の備へであつて、自分は唯夫れだけを守つて居る。人によつては、坦々たる歩み易い路のあるにも不拘、態態深淵高岳のある危険道を好んで進まうとする。そして行詰りを生ずると、忽ち嘆聲を放つて他人に救援を需むることを恥と思はぬ。虎穴に入らずんば虎兒を獲ず、とは或る特種の場合であつて、日常生活に、さうした冒險的射倖心を起すのは絶対禁物である。

それから一つは禁物は依頼心だ。最も判り易い例は現に吾々元軍籍にあつた者の仲間、色々の恩給や年金の受給者の生活状態がそれである。假に百人の受給者中、恩給や年金證書を擔保に入れて高利の負債をせず生活苦を懸へない者が果して幾人存在するであらうか。

之に反して退職當時、僅かの一時賜金のみを得た人や負傷入院中、戦地への補充員缺乏の爲、治療完からずして事

故退院を命ぜられ、再征三征の後、隊から其儘歸されて、一錢の賜金も受くる事の出来なかつた人で、恩給受給者よりも、寧ろ今日に至つて重い傷部障害のある人が澤山あるが、其人達の生活はさまで惨めではないのが多い。如斯、一體國家から生活を保障されて居る者が苦しんで、保障されて居らぬ者が却つて安定を得て居るのは、何に起因するか、強ひて一概には言へぬが、前者は年金、恩給への依頼心により怠惰に流れ不用意となり易く、後者は自ら働かなければ喰へぬとの緊張した觀念から、一意専心生活に精進するといふ所に、その點の分岐が大いにあることは明瞭な事實といはなければならぬ。

明治大帝陛下の降し賜つた勅諭の五ヶ條、讀法の七ヶ條を精神として居つたならば、決して生活に困窮する筈はないのである。苟くも人間と生れて来た以上、向上心なく、希望なく、計圖なき者はない。ただ各自の分を辨へ、度を知つて、平凡生活の中に、眞の奮闘努力の價値を發見する事こそ最大の要務だ』
言々眞理を語つて、深く味はふべき説ではないか。

働くことの樂み

不具の身を顧みず働いた大西安次郎氏

本籍地	三重縣度會郡豐濱村大字野依一五
程負傷	左下腿骨貫刺創(機能不良)

『大西さんも、あの體であゝまでして働かんでもよさうなもんだ』

『ほんとによ、何か小商賣でもやつたらよからうに...』
兎角世間といふものは煩い。右へ轉んだといつては蔭口をきゝ左へ倒れたといつては悪口をたゝく。大西安次郎が跛をひきながら、野良仕事にいそしんでゐる姿をみて、いたましいと同情する人も多かつたが、冷たい侮蔑の眼で見やる人も少くなかつた。

そんな事を一々氣にかけてゐては、この世は渡つて行け

ない。安次郎は黙々として農耕に従事しつゝけた。不自由の身をも顧みず、三十年の長年月、土を汗でこねるやうな努力をつゞけ、遂に今日を成したのである。

大西安次郎は三重縣度會郡豐濱村の農家に生れた。生れ落ちると共に土臭い乳に育てられた生粹の百姓である。幼い頃から五風十雨を氣にするやうな環境に育つた。十八歳にして父を喪つて後は、若年ながらも一家の責任を双肩に擔ひ、父祖傳來の田畑をよく守り、農を以て自分の天職と信じて、銳意家業に勵んだ。

かくて大地の懷中にすく／＼と成長して、明治三十二年には丁年に達した。男子一世晴れの徴兵検査である。鋤と鍬とて鍛へ上げた身體だ。ものゝ見事に合格して歩兵第三十三聯隊に入隊した。在營三年、その間臺灣守備として渡つたりなどして、無事に軍務を卒へて歸郷すると共に、安次郎は再び大地の懷中にとび込んで、朝には雞鳴と共に起き出て夕べには星を載いて歸る百姓生活を始めた。

『安さんはよう働くのう。若いに似合はぬ甲斐性者だよ』

村人達はたのもしさうに安次郎の後ろ姿を見送るのだつた。そのまゝ平穩につゞいて行つたら、或ひは平凡ではあるが幸福であつたかもしれない。しかし、さうは行かないところに人生の神祕があり、また國家人としての義務と責任がある。

即ち、日露兩國間にたちこめてゐた暗雲はいよゝ濃くなり、今にも大雨沛然として濼らん情勢にあつた。果然、明治三十七年二月十日、露國に對する宣戰の大詔は下された。召集令は忽ち彼の許にも飛んで來た。

「困つたく、家で唯一つの男手である自分がなくなつては……」

家には年老いた祖母、意力衰へた母、そして嬰兒を抱へた妻の女手ばかりしか残らない。彼は赤紙を焼めながら暗然たらざるを得なかつた。をの瞬間！

「馬鹿、軍籍に身ある間は必ずこの日あるを豫期してゐるべきではないか。今や國家存亡の秋だぞ、行け！行け！」どこからか天來の聲が叱りつけるやうな氣がした。彼は燃える勇氣に胸を躍らしつゝ、歡呼の嵐に送られて征途に



彼はこの日、この首山堡の激戰に參加し、雨と降り激ぐ銃彈、岩に碎ける浪のごとく飛び散る砲片の間を縦横して奮戰した。不幸、戦ひ半ばにして左下腿部に盲貫砲創を受

上つた。

彼の屬した第二軍は、遼東半島の南岸なる鹽大澳に上陸し、先づ普蘭店を占領し、つゞいて金州、南山の險を抜き、破竹の勢ひ物凄く勝軍は北進又北進、八月の末には遼陽に迫つた。敵の總司令官クロバトキン將軍は、主力を遼陽に集め、今までの慘敗の恥を雪がうと待ちかまへた。我が軍では八月二十二日遼陽攻撃の命下り、第一軍は右翼、第二軍は左翼、第四軍は中央から進んで戰線實に十餘里、二十六日から活動をおこして次第に敵を壓して行つた。しかし、敵も名にし負ふ堅軍、守りを固うして退かない。

遼陽を抜くのに最も邪魔になるのは首山堡だ。首山堡は遼陽の南西約一里半、高さわづかに百米ばかりの丘陵に過ぎないが、遼陽の咽喉ともいふべき重要地點、敵はこゝに堅壘を築いて死物狂ひに守つてゐる。

八月三十一日、橋中佐の率ゐる大隊に突撃命令下り、こゝに屍山血河の壯烈なる戦ひが交はされ、青史に燦然と輝く橋中佐の悲壯な最期が展開する。古今に比類なき血戰、有名な首山堡の激戰である。

けたのである。

※ ※ ※
數個月にわたる治療の甲斐なく、彼の左下腿部の砲創は癒えられども、左下肢はその機能を失つてしまつた。かくて、明治三十八年五月下旬、召集免除となり、久しぶりに郷里に歸つた。

『名譽の戦傷者！』

一村をあげて彼を歡迎してくれた。嬉しかつた。しかし又心苦しくもあつた。名譽の戦死をとげて、郷土の名をあげようと思つてゐたのに、かうして命を全うして歸つて來ようとは――。

歸郷した當初は、戦争の話聞きに來る客が絶えないので、何とはなしにぼんやり一日一日を過ごしてゐたが、一月とたち、二月と過ぎて、さうした訪客の足もまばらになつて來ると、彼は自分の將來を眞剣に考へなければならなくなつた。

『その體では百姓の仕事は出來まい、まア急ぐ事はないゆつくり何か考へるのだね！』

慰め顔にいふ人もあつた。しかし、父祖傳來のこの田の畑、自分が耕さねば誰が耕すのだと考へるとき、どうしてもこの土から離れることは出来なかつた。

『とはいふものゝ、この體ではとても野良仕事はやつて行けまい。今の中ならどうにかならう、何か商賣でもはじめしてみようか』

實際、歩行さへ十分でないのに、どうして百姓の勞役に耐えられよう。しかし、馴れない商賣に手を出して、萬が一失敗でもしようものなら、名譽ある軍人の名を汚すことにもなる。といつて、べん／＼として遊んで居られる身ではない。何か生きる道を考へねばならない。あれを思ひ、これに迷ひ、彼は心を悩ました。

『さうだ、俺は矢つ張り百姓をつゞけよう』
たうとう、安次郎は決心した。母もある、そして妻もある――みんなと一緒に働いたら、たとへ人の三分の一しか働けなくとも、何とかやつて行けるだらう。

國の基は土だ。土を離れては國もない、人類もない。この土を嘔み育て、限りなき幸を掘り出すことこそ、自分で十年――長いやうで短い。十五年――暮してみれば夢のやうだ。十五年もたつと、子供だ子供だと思つてゐたのがもう物の役に立つやうになる。

『お父さん、お父さんは暫く休んでなよ。仕事は俺がやるよ』彼の手から無理に鍬を奪ひ取つて、子供は一人前らしく働くやうになる。

二十年経つ。もう子供は一ぱしの若い衆だ。長い年月、父の苦闘の姿をみせつけられてゐるから、普通の家の子とは違つてゐる。いつまでも親に苦勞をかけて脛に噛りついてゐるやうといふ不了簡は露ほどもない。

『お父さんは少し働きますよ。お父さんにその體でさう働かれちゃ、俺達あ夜の目も寝ずに働かなけりやならん事になるよ』さういつた微笑ましい抗議が出る。安次郎は段々身も樂になつた。

その間に、子供はふえて、家族の數も十一人となつた。十一人が一束となつて働く。十一人が力を協せればどんな事でも出来ないことはない。辛いこともあつた。苦しいこともあつた。しかし、それ

の尊い天職だ。自分は不自由ながらもこの天職に従つて、餘生を御國のために捧げよう。戦場で残した使命を、農耕によつて果さう――彼はさう決心した。

歩行さへ十分でない彼にとつて、百姓の仕事は樂ではなかつた。ことに、春秋の氣候の變り目になると、傷部は痺して全然知覺さへ失つた。

『矢つ張り俺は駄目かな。百姓仕事は出来んかな』
どうかすると氣持が挫けることもあつた。しかし、彼は負けなかつた。或時は松葉杖にすがつて、片手で鍬をふるつた。しやがんで仕事が出来ない時には、大地に坐つて働いた。

『感心なもんだナ』
村人たちは、最初片輪で氣の毒なといふ憐憫を感じてゐたのが、いつしか感嘆の聲に變つてきた。
不具の彼が率先して働くのだから、一家の者の氣組みもちがふ。彼にあんまり苦勞をかけるな――さういふ氣持で働くから、能率は上る。自然収入もふえて行く。

は決して空しい苦勞ではなかつた。漸次家運を挽回して、村でも相當の地位に立つやうになつた。しかるに、五年前長男安右衛門君の事業が經濟界の恐慌のあふりを喰つて失敗してから、父祖傳來の田畑は他人の手に渡るやうな結果となつた。折角築き上げた家産は一朝にして倒潰してしまつたのだ。しかし、そんなことに屁古垂れる彼ではない。

一難襲ひ来る毎に新たな勇氣にふるひ立つ、堅忍不拔の精神の持主だ。一度は敵手に奪はれた陣地ながら、又しても捲土重來の意氣を以て奪取せんとしてゐる。正しくかの首山堡の戦ひに於ける我が軍と同じ意氣を以て、生活戦線に血みどろの奮闘をつゞけてゐる。しかし彼の後ろには幾多の新手もふえた。必ずや近き將來には再び凱歌をあげるこ

とが出来てあらう。なほ、安次郎は自分が御國のために命を捧げようと思つて、遂に果せなかつたところから、子供の中から自分の素志をつゞ者を出したい念願で、五男の健藏を海軍に志願せしめ目下服務中である。又次男の安之丞は上海事變に際しては補充兵として召集を受け、皇軍の威武發揚のために努力して目出度く凱旋した。

松葉杖の果樹園主

働く樂しみを悟得した大野龜十郎氏

本籍地 愛媛縣温泉縣利氣村大字和氣濱
負傷 左大腿骨折銃創(膝關節切斷)

愛媛縣温泉縣和氣村大字和氣濱の裏山一帯は、春先から初夏にかけて、色とりどりの花に美しく飾られる。

『今年も亦大野さんの果物畑は豊作ぢやさうな』

村人達は羨しさにうなづきながら、目もさめるやうな花に眺めているのである。これはこの村での各所ともいふべき、大野果樹園である。大野果樹園は裏山一帯に跨る三町二反八畝、蜜柑、葡萄、枇杷、桃、梨等四季折々の果物を産出してゐる。

この果樹園主が松葉杖の隻脚であり、而も一世にしてこ

石たたみかたき岩もいくさひと

身を捨て、こそうち碎きけれ

畏くも 明治大帝が歌はせられたごとく、半歳にわたる悪戦苦闘により、十里の風腥きまでに、尊いものはもの身血をもつて血ぬられた戦場であつた。

明治三十七年八月十九日第一回の總攻撃が開始せられた。大野氏の屬する隊は東雞冠山攻撃に向ひ、望臺めざして眞一文字の突撃を試みた。この際、彼は左大腿骨折銃創を蒙り、左足膝關節より切斷の止むなきに至つたのである。聖戦に参加すること僅かに三ヶ月、戦場の花と散るべき機をも逸して、空しく廢兵となつた時、彼は悲憤の涙をふりしぼつた。

しかし、人生萬事は天命によつて左右せられる。今更悔んでも仕方がない。各地衛戍病院に於て懇篤なる治療を受け、漸く全治すると共に兵役免除となつて歸郷したのであつた。

『お父さん、申譯ありません。戦争半ばで片輪になり、十分な御奉公も出来ませんで...』

の産をなしたといへば、誰しも驚かない譯には行かない。即ち、園主は大野龜十郎氏、往年の日露後の勇士、今では大果樹園の主、この地方での名士である。

日露戦後が勃發した當時、大野龜十郎氏は父の許にあつて農事にいそしんでゐた。

『俺のところにも何か言つて來さうなものだね』
新聞紙上で花々しく出征して行く皇軍の寫眞をみる毎に彼は胸を躍らしながら、召集令の來る日を焦立たしく待ちあぐねてゐた。彼は三十五年除隊の豫備役である。

『この未曾有の國難に際して、御奉公の機会を逸しては日本男兒としての面目が立たん。父祖に對しても申譯がない』
一人でやまもきしてゐる最中、四月二十七日充員召集の赤紙が配布されたのである。彼は勇躍して歩兵第二十二聯隊に編入、五月二十一日出征、第三軍に屬して旅順攻圍戦に向つた。

旅順攻圍戦の苦心は今更改めて呶々する必要はない。徹頭徹尾、碧血をもつて彩られた有史以來の苦戦であつた。

彼は父母の前に兩手をつくのだった。生きては歸るまい、死して護國の鬼となつて歸らう——さう出征する時には誓つて行つたのに、かうしてノメノメと歸つて來たことを思ふと、思はず不覺の涙にむせぶのだった。

『龜十郎、戦争だけが御奉公ではないぞ。かうして片田舎に居つてもいくらか御奉公は出来る。片足ぐらゐなくつたつて御奉公の道はあるぞ』
父は慰めと激勵の心をこめて云つた。

『そんな體では百姓も出来ない。急ぐことはない、ゆつくり將來のことを考へるのだな。俺も何とか思案してみよう』

さう父は云つた。しかし、家の中にあつて無爲にごろごろしてゐることは、働かされてゐる彼には出来なかつた。

『龜十郎、近所の手前もあるぢやないか。まるで片輪のお前をこき使つてゐるやうで...』
母は女らしい氣の廻し方をする。彼はそんなことに頓着なく、松葉杖に身をまかせて、父と共に野良に出て働いた。

しかし松葉杖の身では野良仕事は激しすぎる労働だった。不具者といふものは、兎角自分の不具の點にのみ心を悩まし勝ちだ。「こんな體でなければ」とか「體さへしつかりして居れば」とかいふ氣持を出す。悔いても今更及びのつかない嘆きだ。彼はそんなことをくよくよと考へなかつた。一本しか脚がないのが人間だと諦めてしまへば何の苦勞もない。言ひかへれば、自分が不具者だといふことを忘れてしまへば、恥しくもなければ嘆くこともない。

しかし一本脚では到底百姓としての労働には堪へられなことに氣がついた時、彼は緻密な頭をしぼつて考へた。「なまじ馴れぬ商賣に手を出しても、成功することは危ぶなかしい。幸に、家には土地がある。この土地を利用して何か出来ないだらうか……」

ふと果樹園のことを考へついた。この地方は氣候溫暖で果樹には最も適してゐる。しかも果實の需要は年と共に盛んになりつゝある。

『さうだ、俺は果樹園をやつてみよう』
彼はさう決心した。果樹園の仕事は普通の農業と違つて、

しやがんで仕事をする必要もあまりなく、一年中の一定期間の外は一日中働きづくめに働くこともない。これなら松葉杖にすがつてもやつて行けよう。

彼は右の決心を父に打明けた。父は一も二もなく賛成してくれた。早速、畑の一部に果樹を植ゑつけ、本などによつて研究をはじめた。何でも初めてからさうくうまく行くものではない。殊に果樹園などいふものは氣長に數年後の成果を待たねばならない。やつてゐる中に、どうやらうまくやつて行けさうな自信が臍氣ながらついて來た。

もつと進取の氣象に富み、研究心の旺盛な彼は、全国各地の果樹園視察を思ひたつた。思ひたつたらちツとして居れない。早速旅装をととのへては、有名な果樹園を片ツ端から訪問した。これによつて彼の果樹園經營に關する知識は豊富になつた。ことにこの視察旅行によつて優良な苗木を手に入れる道がひらかれた。新しい栽培方法も會得した。販賣上の新天地をも拓くことが出來た。

『栽培法を改良し、經營さへうまくやれば、これは男子一生の仕事になるぞ』

はじめはまだ馴れぬことゝて幾分か危懼の念を持つてゐたが、すつかり自信を得た。新しい元氣にかられて、彼は家業にいそしみだした。松葉杖にすがりながら、彼は山に登り谷に下り、或ひは果樹の剪定に或ひは施肥に或ひは除草に、汗みどろになつて働いた。果樹といふものは可愛いもので、長年接してゐると、まるで自分の子供みたいな愛著が感じられて來る。葉の色一つで、その樹の性質がわかる。悪いところを直すためには、枝を剪つてやらねばならぬ。さうして一本一本を愛み育てる中に、時期が來れば見るからに美しい果實を生みだしてくれるのだ。

年と共に果樹園から上る収入がふえてきた。餘財を得れば新たに土地を買つて擴張する。さういふ具合で、年々果樹園はひろくなり、今では三町二反八畝といふ、見渡すばかりの廣大な裏山一帯には、蜜柑、葡萄、枇杷、桃、梨等數千本が、早春から初夏にかけては香はしい花を咲かせ、夏から秋にかけては美果をみのらせる。そして収入も年々六千五百



圓を擧げ得るやうになつた。
現在では右の果樹園の外に、田地六反二畝、雜地六反二畝、宅地四百九十二坪を擁し、村内屈指の分限者と仰がれ

るやうになつた。

『よくこれまでやつたな！』

彼は廣い果樹園を見まはしながら考へる。二十餘年の苦心が夢のやうに考へられるのだ。しかし、それは夢ではない。すべて物事は種子を蒔かねば生えぬ。彼が戦傷のために不具となり、松葉杖に身をゆだねながら、奮闘努力した成果が、今やかくのごとく大きな實を結ぶことになつたのだ。終始一貫、軍人精神を忘れず、至誠奉公につくした當然の結果が、今日赫々と現はれて來たのだ。

『松葉杖で山登りはつらいでせう？』

と尋ねれば、

『いや、この方が却つて足が早くてよろしいですよ』

と答へて、彼は朗らかに笑ふ。

相當の恩給（年額七百六十五圓）も頂戴してゐることゝ、田舎のことだし、暮さうと思へば何もしなくてもやつては行けよう。しかし、彼はそんなものに頼らなかつた。自から進んで新天地を開拓した。そこに不撓不屈の軍人精神を窺ふことが出来る。

彼は同業者を鳩合して成園組合を組織して、自から會長となり或ひは代議員となり、又は各役員に歴任して、斯業の共存共榮に努力して來た。即ち、肥料の合同購入や販賣方法や出荷方法に於て、協調の足なみをそろへ同業者の福祉に貢献したのである。また、曾ては和氣濱部落區長代理として、部落の向上親和のために努力し、現在は和氣村家屋税第一次調査委員の公職にあつて、至誠奉公の實をあげつゝある。

彼は本年五十六歳の春を迎へた。長男唯幸は既に妻を迎へて三人の孫があり二男義一、三男傳、四男二郎、それぞれ相當の年齢に達し、父の業を援けつゝある。

『大野さんも、もう少し樂にしてもよいでせう』

さういふ人もあるが、彼はまだ樂隱居なぞ夢にも考へない。人間は働けるまで働くのが義務だとの觀念の許に、今日なほ自ら率先して、活動をつゞけてゐる。彼にしてこの意氣があるのだから、家族もちつとしては居れない。今や家族十一人、一家總動員を以て、家業に精勵しつゝ、一家團樂の生活を樂しみつゝある。

高座の勇士

|| 好きな道で成功した矢代米作氏 ||

本籍地	新潟縣
負傷程度	左大腿部骨傷貫通銃創

名譽の負傷

日露の戦は今や正に酣——滿洲の空は暗澹たる戦雲に閉されてゐた。殊に、こゝ旅順には凄惨な腥風が吹き荒れてゐた。二〇三高地の奪取戦——それは東西の戦史上でも最も壯烈凄愴なものであつた。これを抜かずば旅順の陥落は何時の日になるか分らない。旅順を落さずんば日露の戦はいつ果つべしとも見通しがつかない。

第一回、第二回、第三回、既に三回にわたつて總攻撃は

敢行された。しかし、その度に屍山血河の壯絶なる光景が展開されるのみで、流石は名にし負ふ金城鐵壁、我軍決死の攻撃も十分に功を奏しないのだつた。されど、たとひ屍山を築き血流れて河となるとも、斷乎としてこれを陥さねばならない。時に明治三十七年十一月三十日、第四回の總攻撃は決行された。

『カタク』といふ音が敵陣から聞えたら、あれは機關砲といつて怖しいものであるから、命令がなくとも各自伏せの姿勢で進め』

中隊長の命令だ。やがて響く突撃喇叭の唳々たる調、戦友互ひに見合はす顔と顔、その顔には一様に決死の色がみなぎつてゐる。

ワーツと叫ぶ喊聲！

ドド——ンと天地に轟く砲聲！

天に冲せんばかりの濛々たる砂煙！

頭上をかすめて飛び交ふ彈丸の唸！

その間を縫つて我が決死の勇士は轟地に敵砲壘めがけて眞一文字に突進した。

「畜生、人に後れはとらんぞ！」
歩兵第二十五聯隊第九中隊の上等兵矢代米作君は、なだらかな斜面を一段に駆け登りはじめた。矢代上等兵にとつてはこれが始めての戦争だ。初陣の功名をあげるべき機会だ。彈丸の唸りも炸裂する音も耳には入らぬ。目ざすは敵壘、眞一文字に進みに進んだ。

「残念！」
裂帛の叫び、思はず右をふりむけば戦友がのけぞり返つてゐる。

「やられたツ！」
悲壯の聲に左を向けば、こゝにも朽木のやうに崩れる戦友の姿。

「畜生、露助奴、この仇は今にとつてやるぞツ！」
燃え上る敵愾心かられて、矢代上等兵は齒がみしつゝ突進した。

彈はいよ／＼激しくなる。體の上下左右を掠めて唸つて行く。
突如！ 矢代上等兵はパツタリ倒れた。體中が電氣にか

かつたやうにチーンとしびれた。

「うぬ、こゝで倒れてなるものか！」
満身の勇氣をふるひ起して、矢代上等兵は立上らうとした。そして初めて左脚が動かなくなつたのに氣がついた。見れば軍袴の腿のあたりは、布を引き千切つたやうにズタズタになつて、鮮血にまみれてゐる。

「畜生、これしきの傷！」
氣丈な矢代上等兵は又しても起き上らうとした。しかし氣ばかり如何に焦つても、いふことを聞かぬ體をどうしやう？ 齒がみしながら両手で匍ひ上るやうにして進んだ。しかし、夥しい出血のために、いつしかその氣力も失せて、心氣も朦朧として霞むのを、どうするとも出来なかつた。

驟然として悟る

創は左大腿部骨傷貫通銃創であつた。
一旦後送されて野戰病院で一通りの手當をうけた矢代上等兵は、更に内地に送られ、十二月二十四日廣島の本院で大手術を受けた。

幸ひに戦死は免かれたものの、左脚は元通りには快癒せず、立居振舞も不自由な生れもつかぬ跛となつてしまつた。翌三十八年四月には東京の分院に送られ、ひたすら療養にとどめた。今とちがつてベッドなどの設備もない不完全な頃とて、アンペラの上にズラリと重傷患者が横たはつてゐた。みな戦ひのために名譽の負傷をした勇士達だ。

三十九年五月九日、兵役免除の恩典に浴した彼は、不自由な體を郷里なる越後の父母の許にはこんだ。久しい病院生活の間は、不具になつたことが淋しくも苦しくもなかつた。同じ運命を背負つた戦友達と、嬉々として何の苦勞もなく楽しい生活をつゞけて来た。

しかし今、一社會人として廣い世間に放り出された時、彼は憂鬱にならざるを得なかつた。父母は朝早くから元氣に野良仕事に出掛ける。それを黙つて見送らねばならない現在の自分だ。
「これから後、俺はどうして生きるのだ！」
考へると彼は悲しかつた。
兵役に服するまで務めてゐた、西洋料理店のボーイとし

ての仕事はもう今の自分には働けない。父母の仕事をひきついで、百姓になることもこの體では駄目だ。どうしようとも、どうならうとの的もなく、一年ばかりの間朝から酒を求めた。酒を飲んで陶然としてゐる間が極樂であつた。酔ひがさめた時の淋しさには耐へきれず、又しても盃を上げた。しかし、さういつた生活が長くつゞけられる筈はない。

「駄目だ、こんなことをしてゐたのでは——」
一年ほどして愕然としてさう思つた。何のための三年の長い間軍隊生活をしたのだ！ 教へ込まれ叩き込まれた軍人精神、堅忍不拔の精神はどこに置き忘れて来たのだ！ 一死報國の軍人精神は戦争の時だけ必要なのか！

さう考へて来ると、今までの自分の生活が後悔されて来た。さぞかし父母は心配なされたらう。
「俺はなんといふ不孝者だ！ たとひ體は不具となつても命のあらんかぎり自分出来る仕事をして君國に報ずるのが軍人精神ではないか」
心機一轉した彼は、更生の道をひらくべく、勇躍して上



京した。かういつた體になつた以上、肉體労働に従事することは出来ない。もとく演藝が好きだったので、この方で身をたてようと思つた。



「矢代さんは聲がいゝから、義太夫をやつたらどうです？」
さうすゝめる人もあつたが、義太夫は中年からの稽古では駄目である。それよりも手取り早い落語家にならうと思つた。これなら自分も楽しんでながらやれるし、人にも聞いて貰つて楽しんでもらへる。

功成り名遂げて

その頃、高座で大分人気をよんでゐた柳亭左樂——この人は日清日露の兩役にも出征した人であつたので、傳手を求めて弟子入をたのんだ。左樂も彼の身の上を聞くと、いたく同情し、一も二もなく承諾してくれた。

「何でもさうだが、ことさら藝事といふものは修業と忍耐が大事だから、そのつもりでみつちり勉強なさ」と、左樂は勵ますやうにいつた。

かくて明治四十一年六月十五日、芝雀といふ藝名を貰ひ、翌十六日から築地の青柳亭ではじめて前座として高座に上つた。

好きこそ物の上手なれ——彼は一心に修行を重ねた甲斐あつて、師匠も驚く程の上達をした。彼は音曲の方がとりわけ好きだつたので、その方を専門に修行した。修行すればする程面白くなつた。

一年後には藝名を芝雄と改め、刻苦勉勵をつゞけること十年、彼は終に真打となり、名を桃月亭雛太郎と改めた。真打といへば座頭格である。

十年といへば長いやうで短い。その十年の短日月に素人から斯界に入つて真打までなるのは、正に異數の成功といふべきであらう。

十二年目には落語協會の準幹部に推され、斯界の指導者の立場になつて、斯道の向上發達に盡瘁すること數年、昭和六年二月二十四日、隱退大演藝會を催して、こゝに矢代君は功成り名遂げて、華々しく斯界を隱退したのであつた。

今や既に樂隱居の身、風月を友として安樂な餘生を楽しんでゐる。

「成功者といはれるのは恥しい次第ですが、これといふのも師匠のおかげです。私の経験から申しますと、負傷後凱旋した當時は、うかくと過し勝ちです。何しろ周圍からは名譽の負傷者など、ちやほやされますからね、かくしてゐれば一年や二年はすぐ終つてしまひます。私は一年ぐらゐで氣がついて、將來の道を考へましたからいゝものゝ中には随分長いこと夢のやうに過してしまひ、それと氣がついた時には時機を失して困つた人もあるやうです...。」
彼はつゝまじやかにさう語るのだつた。

出世の糸

朝鮮で辛酸をなめた淵上美登見氏

本籍地	大分縣東國東郡西武藏村大字富清
程負度傷	左膝節部貫通銃創(跛行)

淵上美登見は井戸端で顔を洗った。
夜明けに近い霽れた空には、曉明星が燦として鏡色に澄んでゐて、どこかで遠く一番鶏が鳴いてゐた。
『美登や、飯の仕度が出来た。早く来いよ』
父の聲が聞えた。
『はい、いま行きます』
彼は返事をする、不自由な身体を杖にすがりながら母

屋の方へ歩いて行つた。母屋では、もう父や兄妹が膳の前に坐つてゐた。膳の上には父の心盡しの赤飯とお頭つきの鯉の鹽焼とが置かれてあつた。
『何はなくとも目出度い門出だ。心ばかりの祝ちや。どうかどつさり食べておくれ』
父は機嫌よさうにいつた。
『有難うございます』
彼は父のよそつてくれた赤飯を噛みしめた。けれど悲しさが胸にこみ上げて来て、ろくに咽喉へ通らなかつた。
彼は幼少にして母に死別した。それから後といふものは父の手一つで今日まで育てられたのだ。今別れに際して、その間の父の苦勞が思ひうかべられ、感謝の涙は睫をぬらすのだった。父は無言だった。兄妹達は横を向いて眼をふいてゐた。彼はふと思ひ直して、門出に涙は不吉と無理に笑顔をつくつて箸を取つた。
こゝは大分縣東國東郡西武藏村にある淵上の家。
淵上の家は先祖代々農業に従事してゐたが、美登見は商業に志し、大阪市へ出て苦學をしつゝ簿記學校を卒業し

たが、時局の刺戟を受け軍人として身を立てようと思ひ、大正五年、十九歳の時、現役志願をして首尾よく入營した。そして大正七年シベリヤに出征して、數々の戰鬥に参加した。翌年の春アムール州アンドレフカの激戰の際、左膝關節に貫通銃創を受け、第三、第二、第一の野戰病院を轉々し、更に小倉の衛戍病院へ還送された。手篤い療養を受け、漸く大正九年の秋になつて退院することが出来たが、左足は自由を缺くに至り、兵役免除となつて故郷へ歸つた。家は父祖傳來の百姓であるが、彼の體は既に農業如き勞役には耐えられない。しかも生計豊かならざる一介の農家なれば、いつまでも徒食する譯には行かなかつた。それかといつて、田舎のこと故、彼に適する仕事が見つかる譯ではなかつた。
彼は途方に暮れた。
『これから後の長い人生を、自分はどうして過さうといふのか?』
それを思ふと暗然たらざるを得なかつた。殊に當時は世界大戰後の經濟界恐慌のため、すべての事業は逼塞して

しまつてゐたので、方々に依頼狀を出してみたが、就職口はなかつた。五體完全な健康者さへ失職して困つてゐる場合だ。ましてや彼の如き不具者の這入り込む餘裕などある譯はない。
内地では駄目だと思つた。そこで彼は朝鮮行きを思ひ立つたのである。向ふへ行つたら内地程のことはあるまいといふ氣がした。早速父や兄妹に相談すると、初めは不具の體で見も知らぬ遠い土地へ去るのを危んだが、彼の固い決心に動かされて承知した。父は貧しい中から方々奔走してまはつて、旅費やら當分の生活費などのために、小千圓を都合してくれた。
今日がその出立の日である。
食事を終へた頃には、早くも朝日影がすゞけた障子を赤く照してゐた。彼は着物を着替へると、先づ佛壇の前に坐つて、母をはじめ先祖の靈に對して訣別をつげた。その上で父の前に出て兩の手をつかへた。
『では、お父さん、行つて参ります。どうかお體を大切にして下さい』

「お、お前も思はないやうにな。あんまり無理をしては
いかなぞ」父は兩眼をしばたいて、彼の顔をぢつとみつめ
てゐるのだつた。兄や妹とも涙のうちに別れをつけて、
彼は立ち上つた。

「左様なら懐しい家よ、故山の山よ...成功して歸るまで
のお別れだ。眼にうつるすべてのものが懐しかつた。彼は
街道を歩きながら、右を見左を見更に後ろを振りかへりつゝ
故山に別れを惜んだ。

父は自からトランクをさげて、三里の道も遠しとせず、
停車場まで見送つてくれた。やがて汽車が動き出す。

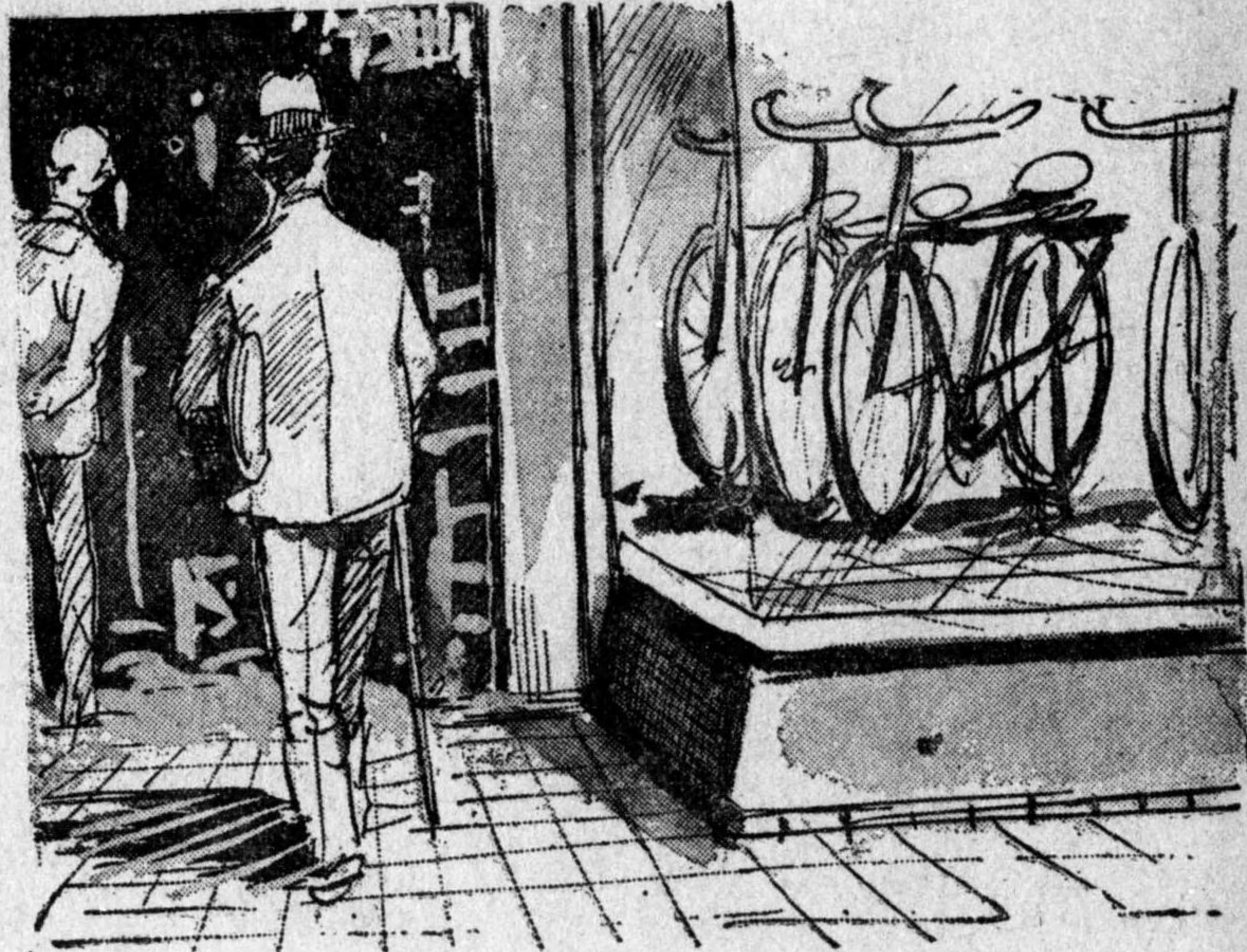
「美登見、體を大事になア」

「お父さんも...」

車窓にかかりついて、親子は叫びあつた。父の眼には涙
が露のやうにキラ／＼閃いてゐた。

二

朝鮮の春は九州とは比較にならぬ程うすら寒かつた。毎
日のやうに白いものが、ちらちらと降つてゐた。



彼の目ざすところは、京城であつた。京城の知人の家に
假の旅装を解くと、一息つく暇もなく不自由な體を引き摺
つて、各方面に求職して歩いた。

しかし、この地さへも矢張り不景氣の渦中にあつた。朝
鮮まで来たなら、まさか仕事に困るやうなことはあるまい
— さう思つてゐた彼の豫想は裏切られてしまつた。しか
も彼の體は勞働には耐え得ないので、求める仕事の範圍は
狭かつた。事務員のやうな仕事以外には、彼の體は耐えら
れないのだ。毎日々々根氣よく歩きまはつた。そして毎日
毎日疲勞と落膽とを土産に歸つて來るばかりだつた。
一月経ち、二月経ち...持つて來た金が次第に減つて行
くのが心細かつた。

「いつそのこと、國へ引上げようか」

さうした弱い心になると、彼は父と別れを惜しんだ車窓
のさまが目にかんだ。こんな氣の弱い事ではいかな。成
功するまで何の顔もあつて故山にま見ることが出来るか
... さう思ひ直しては、自からの心に鞭打つのだつた。
今日も今日とて、朝からとびまはつた。新聞の三行廣

告や、それからそれへ傳手を得て色々な家を訪ねまはつた。

しかし、大抵のところでは、デロリと一目見たゞけて、

「どうもね、家の仕事は忙しいんで、とても貴方には勤ま
るまい」と頭からはねつけられるのだつた。さういはれる
と、彼は自分の決心や事情を訴へて同情にすがる勇氣もな
く、喪家の狗のやうに悄然として辭去する外はなかつた。

「あ、やつぱり國へ歸らう。知らぬ土地に來てこんな
苦勞する位なら、まだしも國へ歸つて野たれ死した方がよ
い」彼は公園のベンチに崩折れるやうに腰かけて、ぢつと
地面を見つめてゐた。知らず／＼涙がぼと／＼と落ちて、
音もなく地面に吸ひ込まれて行つた。

「もし／＼」男の聲に彼はハツとして顔をあげた。

「お、君は古園君ぢやないか」

彼は思はず頓狂な聲をあげて立ち上つた。

「やあ淵上君か、矢つ張りさうだつたか。いや、どうも君
らしいと思つて聲をかけたのだが...?」

古園はシベリアに出征した時の戰友であつた。二人は懐
しげに手を握り合つた。

『君とこんなところで會はうとは夢にも思はなかつた。全く奇遇だよ。しかし君は故郷に歸つたと聞いてたが、どうしてこゝへ?』古園はいぶかしげに聞いた。

『實は故郷へ歸つたものゝ、この體ぢや百姓も出來んし、一旗擧げようと知人を頼つてこゝまで來たのだが、思はしい仕事とでもなし實はお恥しい話だが、がっかりして又國へ舞ひ戻らうかと思案してゐるところなんだ』

『しつかりしろよ!』さう叫んで古園が彼の背中を叩いた。

『君だつてシベリア出征の勇士ぢやないか。男子一度志を立て、郷關を出たら最後、成功するまでは死すとも歸らずといふ意氣がなくては駄目ぢやないか——よし、俺が何とかしてやる。傷痍の勇士を飢ゑさせては、國の恥ぢやないか。まあ家へ來いよ、ゆつくり話をしよう』

彼は古園の家に伴はれて行つて、渡鮮以來はじめて、心のわだかまりが解けたやうな氣持で、朗かに談り合つた。古園は在郷軍人として京城で活躍してゐたが、彼の困窮の立場に同情すると、自からとび廻つて就職口を捜してくれた。そして數日の後、彼は古園の斡旋で、京城屈指の大商

店南大門通三丁目自轉車卸商ツキ商會本店に勤めることになつた。彼は天に昇る心地だつた。

彼は不具のために長いこと困つた。それといふのも世間の人が、傷痍軍人に對する同情が足りないのだと思つた。傷痍軍人の意氣を示すためにも、自分はずんずんと蔭日向なく働かねばならないと思つた。さうすれば世間の人が、一般不具者に對する目も違つて來るだらうと考へた。

かくて、彼は十年一日の如く誠心誠意、蔭日向なく、仕事に精勵した。大阪で苦學して簿記學校を卒業した甲斐が、この時になつて現はれた。彼の執務ぶりの熱心さは、主人の認められ、年と共に重んぜられるやうになつた。

かくて、現在では同商會本支店を通じて百八十人の店員中第一位の成績をあげ、主人の絶大な信用の下に會計役といふ、重要な椅子をしめてゐる。彼をこゝまでにしたのは何か、勿論色々な人の世話にはなつてゐるが、結局は彼の熱心誠實な仕事ぶりの賜物ではあるまいか。

彼は毎月一回は心ず父の許に手紙を送り、折々には名物の品を送つたりなぞして、父を慰めてゐるのである。

村での有力者

赤貧から身を起した寺岡彌藤氏

本籍地 北海道虻田郡狩太村字眞狩太番外地
 負傷程度 左大腿部砲彈子貫通挫折

北海道の蛇田郡狩太村に行くと、不自由な左足を引摺り引摺り、然し極めて元氣よく——まるで廿歳臺の若者のやうに潑刺として、村内を忙がしげに歩き廻る跛の老紳士がある。會ふ人が皆低く敬禮して通り過ぎる。それもその等、この老紳士は寺岡彌藤氏と言つて、村内切つての有力者、荒物雜貨の店を開いてはゐるが、現在資産三萬圓と稱せらるゝ、五十三歳の老紳士である。そして忙しげに不自由な足を引摺り廻すのも道理、現在村會議員を勤むるを初めとして、學務委員、常設委員、所得税調査委員、神社總

代、寺院總代、狩太商工會々頭、狩太商業組合長、その他色々の公職を一身に帯びて、日夜村内の發展の爲に心を碎いてゐるからである。

『寺岡様は我が狩太村の大黒柱だ!』と村民達が皆言ふ。然し此の寺岡氏が一介の癡兵から身を起し、嘗ては失望落膽の極、自己の一身を持て餘した人だと聞いては、何人か驚嘆せずに居られるだらうか。

寺岡氏は田舎の極貧な家庭に生れた。非常に階級制度の甚しい地方で、貧乏人は萬事に頭が上らなかつた。生來きかん氣の彼は、それが癪で癪で堪らなかつた。

『今に見ろ! 今に見ろ!』と彼は思ひ續けた。然し田舎に居ては、一生うだつの上らない事を考へて、遂に彼は意を決して東京で店を開いて居る親戚をたよつて上京し、切に頼んで其處の店員にして貰つた。それから彼獨特の、猛烈な努力精進が始つたのだが、其の頃の彼を知る人がよく言ふ——

『寺岡さんはあの頃から奮發が人と違つてゐた』その中に彼は適齡に達して、寄留地の關係から東京の歩

兵第三聯隊に入營した。それが明治卅四年十二月の事、す
 るとその頃から次第に険悪だった東亞の風雲は、愈々その
 急を示げ、遂に帝國は東洋平和維持の爲、野心國露西亞に
 對して戰を宣するに到つた。さあ、歩兵第三聯隊も出征せ
 ねばならぬ。兵士達は萬歳々々と大騒ぎだ。世の中も戰
 争！ 膺懲！ と鼎の沸ぎるが如くだ。この時、人知れぬ
 惱みに思ひ悩むは我が寺岡一等兵の胸の中であつた。
 『出征、元より嬉しい。然し出征する以上、自分は戰死を
 覺悟せねばならぬ。御國の爲の戰死、元よりこれは嬉しい。
 然し自分が郷里を出る時、堅く心に誓つた言葉、東京
 に出るからには石にかじり付いても成功し、この階級制
 度の甚しい、自分の故郷の金持共を見返してやりたい――
 斯う思つた自分の初一念、又男子と生れたからには相當の
 仕事を爲し遂げて、意義ある一生を送つて見たいと願つて
 るたあの決心、...あれをどうしよう。自分の戰死に依つ
 て何も彼もおさらばか』
 斯う思ふ時、志大きい寺岡一等兵は、急に世の中が眞
 暗な様に思ふのだつた。然し一瞬、彼は急に思ひ返した。

『馬鹿を言へ！ 初一念が何だ。一生が何だ。此の皇國の
 危急に殉ずる事が、これが取りも直さず自分の初一念の貫
 徹で、又意義ある一生と言へるのぢやないか。――あゝ、
 さうだ』
 さう考へると彼は急に明るくなつた。潤然と悟つた時、
 彼は眼前無敵の強剛な兵士だつた。命もいらぬ、名もい
 らぬ、全身これ報國の一念をもつてみだされてゐた。明
 治卅七年四月、現役の儘第二軍に屬して出征、十月には早
 くも金州南山の戰闘に参加した。然し第一線に活躍中、不
 幸、敵彈のため擦過傷を負ひ、まだ戰功も立てぬのに野戰
 病院に送られてしまつた。そして重なる不幸は、この野戰
 病院で療養中に又も異國の脚氣病に見舞はれ、遂に内地
 の原隊へ送還と言ふ事になつて仕舞つた。
 内地に歸ると、脚氣の全治は譯なかつた。で同年の十月、
 再び更生の意氣に燃えて滿洲の土を踏む事が出来たが、今
 度は第三軍に編入せられて、旅順の攻撃に加ふる事となつた。
 第三軍は皆の知る通り軍神乃木將軍の麾下で、旅順攻撃は
 九死に一生も望めない難戰苦闘である。

總攻撃は一回二回と續き、遂に第四回の總攻撃となつた。
 今度こそは死すとも敵壘を陥れずにおくものか――決死
 の覺悟物凄く、遂にあの有名な白樺隊の組織となつた。我
 が寺岡一等兵は勇躍この白樺隊を志願し、歩兵第三聯隊第
 二大隊の一員として『難攻不落』の敵の堅壘に忍び寄る事
 となつた。愈々男子本懐の決死の覺悟である。十一月の廿
 六日、夜陰に乗じて白樺隊の進撃は開始された。一進一停
 戰友は次々に斃れた。然し躍進、又躍進、生存者はたとへ
 死すとも日章旗を敵陣高く翻さず止まずと猛進をつ
 づける。翌廿七日の未明、敵砲彈の一破片は猛然と飛來つ
 て我が寺岡一等兵の左大腿に命中した。左大腿部貫通挫折
 の重傷だ。彼は意識を失つて倒れた。
 野戰病院から大連の兵站病院に送られ、それから廣島、
 遂には東京の澁谷分院に送還された。
 其處で殆んど全快に向ひ、猶八十日を相州湯ヶ原温泉に
 療養してゐる中に、どうやら或程度の全快をみたので、明
 治廿九年の六月、寺岡一等兵は兵役を免ぜられて東京に歸
 つて來た。



戦死を期してゐたのに幸か不幸か、彼は一命を拾つて、再び東京の社會戰場に立つ事となつた。しかし、今や昔日の丈夫な體ではなく、身は一個の癡人、——左足は硬直して曲らず、歩行には醜き松葉杖か、頑丈な支へ杖かを必要とするのだつた。

それに心身はとみに衰弱し、向後幾年の静養の後、人間の並の仕事に堪え得らるゝかと、心細い前途の闇を視つめねばならなかつた。

「やあ！ 片輪が通らい！」
心ない子供達が彼を見て離れてた。又控め目の大人達も、行きずりにちらと盗み見て、醜い彼の姿を侮蔑の眼で見送つた。

今や心身消耗し盡した彼は、往年青雲の志に燃えてゐた頃の氣力もなく、徒らに無用の癡癡となり終らせた我が身を思ふて、幾度か失望落膽し、又生存の意義も、そして喜びも、失ひ果すかのやうに思へた。

然しそこは今日の大を爲す程の彼だ。身心共に元氣を恢復し、氣持も落付いてきた時、潤然として心眼は開いた。

賄仕事から客の應待まで心をくばつた。不具の身を以てしては決して樂な仕事とはいへない。しかし、彼はあらゆる苦難を見事に征服した。これ程の努力が酬いられねば人生はお先眞暗だ。店は眼に見えて繁昌し、僅かながらも貯金さへ出来るやうになつた。

六年の後には、貯金も相當の額に達したので、不具の身にとつては過勞な飲食店をやめて唯今の荒物雜貨商に變つた。仕事はいくらか樂でも氣はゆるめない。仕入れに販賣に彼は人並ならぬ苦心を拂つた。勤儉貯蓄——この四字を徹頭徹尾よく守つた。かくて、十數年、今や、その資産は概略三萬圓と稱せられる。

思ふて今日迄の彼の苦戰惡闘を思ふ時、我等は胸に一掬の涙を禁ずるを得ない。彼も亦過去を思ふ時、その感慨如何ばかりであらう。

彼は成功の今日、一般の成功者の如く利己の心の斷じてない。常に人に厚く自分薄く、一家には常に春風そよぎ、村内には名聲到る所に稱えられてゐる。氏の引受けた公職は本文の冒頭に掲げたるが如く、忙しい家業の餘暇は殆ん

「不具何者ぞ！ これ身の悪行の結果に非ずして、國家奉公の爲ではないか。然らば不具何の恥づる所ぞ。出征の時自分は死を決してゐた筈だ。その命を完うしたのは、何か天の使命がある筈だ。この身はすでに世にない筈だつた。命をすてゝかゝれば、例ひ不具なりと雖も、人並の仕事の出来ぬ筈はあるまい。否、何か仕事を成し遂げることこそ自分が國家にしのこした御奉公だ。さうだ！」

彼は奮然志を新にし、母をたよつて、北海道は蛇田郡狩太村へ歸つたのだつた。然し母も亦貧しく、到底病後の彼の静養などは思ひも寄らないので、斷然一か八かの決死の覚悟を定め、その地に獨力、不自由の身で飲食店を開業したのでつたが、一か八かの決死の態度程恐ろしいものはない。次第々々に、近隣の人の同情と好意を得、遂には信用と尊敬とを得る事が出来て、約六ヶ月の後には人の勧めに依つて妻帯して、それから夫妻共稼ぎの奮闘を始めた。彼一流の猛闘ぶり、湖北の寒地に在つて多時外套も用ひぬ程の、その恐るべき堅忍力闘だ。人生は戰場と思へ——さういつた覺悟で、彼は戦争の時の緊張を忘れず、馴れぬ

どこに費され、嘗て村社の新築昇格の際には、莫大なる私財を投じて奔命し、實に三ヶ年の長日月を努力して遂にその目的を達したのであつた。又寺院の佛堂増修築、鐘撞堂の新設、庫裡の改修、それ等に於ける彼の犠牲と努力は、これ又村民の感謝措かざる所である。さればこそ人々は、
「寺岡様は我が村の大黒柱だ！」

と言つてゐる。行き交ひに、彼に低く頭を下げぬ者のないのも宜なる哉である。氏は狩太村の、大黒柱、そして恩人である。

嘗て子供等に離立てられ、行すりの人々に流眄された氏の不具の足は、今や狩太村の村實のやうに光り輝いてゐるのである。

而も寺岡氏は今以て努力を止めてゐない。村の爲に、徳を積むのにも猶足りないかの様子である。

彼の一生は警鐘の如く教訓を鳴りひびかせる。不具何物ぞ！ 殊に皇國の爲、又陛下の御爲にこそ傷いた我等の不具ではないか。

奮ひ立て！ 奮ひ立て！ 途はある、途はある！

この人を見よ

黙々と働きつゞける阿部卯吉氏

本籍地	岩手縣紫波郡彦部村字星山
凍傷	兩脚下腿、膝下ヨリ、右
凍傷	中指、左手、中指、環指
凍傷	小指、根元ヨリ切斷
凍傷	環指

雪の進軍氷を踏んで——
あの悲絶哀絶な軍歌の調べは、何時までも口ずさむ人の又聞く人の胸を切々と打つて、涙が溢れるではないか。
明治三十五年一月二十三日——歩兵第五聯隊は、八甲田山の雪中強行軍を敢行し、白銀の山嶺を東北健兒の脚下に征服せんと、雄々しくも奮起つたのであつた。
だが、罪々として絶え間もなく降り募る雪は、軀て嵐に

一

吹きまくられて、路を埋め、眼界を遮り、天地は只白濁々の一色に塗りとざされて了ひ、冷凍の氣は防寒具を透して將卒の肌を無慘に破り爛らせるのだ。
馬も倒れた。人も倒れた。
自然の暴威と、神州男兒の闘ひ。
それはまさしく、砲煙彈雨の戰場よりも物凄しい闘争場であつた——。
そして僅かの生存者が、辛うじて山麓に辿りついたが、何れも重い凍傷に罹つてゐて、直ちに青森衛戍病院に運ばれた。
この篇の主人公一等卒阿部卯吉も、その中の一人であつたのである。
彼は右の示指、中指、左の中指、環指、小指を失ひ、更に兩脚の膝下を切斷しなければならなかつた。
併し、あの難行軍に一命を取止めたのが、むしろ奇蹟とも言ふ可きであつたかも知れない。生れもつかぬ不具者になり乍ら彼はひそかに深夜のベッドで、
『毘沙門様、有難うござりました。よくぞ私を御加護下さ

れました』

とかねてから信仰する毘沙門天に向つて感謝の祈りを捧げるのだつた。
彼は不幸な生立ちの男である。そして彼の現在の境遇も亦決して幸福ではなかつた。
而も、今又この様な惨めな運命に遭遇するとは、何といふ無慈悲な天の業であることか！
順序として、彼の今日まで踏んで來た暗い生活から物語らう。

二

彼は、明治四十一年の四月、岩手縣紫波郡彦部村字星山に、阿部駒藏の次男として生れた。兄を佐藏といひ、二人とも富貴な農家に、健康な生命に恵まれて、すく／＼と育つたが、彼が三歳の時、生母が病没した爲、やがて第二の母が迎へられた。
これが彼の五歳の春で、それから二男二女が繼母の腹に次々と生れ、此處に世間によく例のある『繼子いじめ』の

暗い家庭生活が繰返され、佐藏と卯吉は庭の隅で相擁して泣く日が多くなつた。
父の駒藏は非常なお人好しであつたので、斯うした子供達の苦しみをまるで知らなかつたが、二人はよく亡き母を慕ふては、
『早く大きくなつて、お互にこの家を出ようぜ』
などと言合つたものだつた。
さうしたことから、彼の幼い心の中には、何時しかに、
——自分はこの家を出なければならぬのだ——といふ強い觀念が植ゑつけられて行つた。
又その頃から、彼は熱心に毘沙門天を信仰する様になつた。後年彼は、どんな動機で毘沙門天を崇めたのかと、考へて見ても、どうしても漠然として思ひ出せないのださうであるが、恐らくは親のない淋しい少年の心に、毘沙門天の男々しい繪像が深く印象されて、その慈悲忍辱の相を擬視してゐると、何となく薄倅な自分を抱きしめ、愛撫してくれる様な氣がしたものに違ない。
彼が十三のころ、家の建増か何かで、自分の所に大工が

出入したことがあつた。卯吉は毎日の様にその仕事を眺めてゐたが、すつかり氣に入つてしまつて、自分も大工にならう——と決心した。そして、翌年、星山小學校を卒業すると直ぐに、父親に嘆願して、村の大工田畑仁太郎方に弟子入りし、三年間、みつちりと修業を積んだ。

腕が出来ると、家を離れた他郷に出て、稼ぎたくなり、北海道に渡つて函館やその附近で、大工の渡世をして暮した。實直で溫和しい所から、何處でも信用を受けて、わりにのんびりとした楽しい日が過ぎた。

二十歳の時に、父親に呼び戻されて歸村し、紫波郡赤澤村の西野タミと結婚した。タミは十八歳の氣立ての優しい娘だつた。夫婦仲は極めて睦く、間もなく一子正三を擧げた。

正三の生れた年の夏、彼は徴兵検査を受けて、甲種合格となり、歩兵第五聯隊に入營を命ぜられた。聯隊では第五中隊に屬して、勤直に軍務を勵んでゐたが、或日家から電報が届いたので、何事かと開いて見ると、兄の佐藏の死去の報知である。

内務班の一隅で、彼は電報で面を覆ふて涙を落した。天にも地にも自分を理解し、慰め、勵ましてくれるものは、兄の外にはないのだつた。その頼り少い兄弟が、死目にも會へないといふのは、何たる淋しさ、何たる悲しさ——

暫くの間は、彼は軍務も手につかないで、呆然としてゐたほどだつた。

だが軍隊生活は、彼の沈んだ氣持を、やがて朗らかな若人の世界に引戻し、第一期を終へ、第二期に這入ると、木工卒に選ばれて、腕に覺えの仕事が出来る様になつた。

三十四年の秋には、岩手縣下の大演習が行はれた。彼はこれに参加して、郷里の家にたち寄ることを許された。躍る様な胸を抑へて、暫くぶりて、我家を訪れて見た。そこには意外な騒ぎが湧起つて居る。といふのは、人の好い父親が、奸悪な一味の者共に瞞されて、祖先傳來の田畑から土藏に至るまで差押へを喰ひ、一家没落の危難が迫つてゐるのだつた。彼は驚いて仔細を聞いたが、弟達や母親は、彼に對して冷たく口をとさしてゐるし、さりと



て懊惱に襲れてゐる父親に向つて、面責に等しいやうな問ひを發する氣にもなれず、痛む心を包んで、悄然と隊に歸つた。

幼くして生母を失ひ、たつた一人の相談相手たる兄には

別れ、今又自分が受繼ぐ可き財産もなくして了つたのだ——

彼のその憂愁を慰めてくれるのは、今では妻のおタミだけだつた。おタミは甲斐々々しく正三を守つて野良仕事に精出し、彼の歸りを待つてゐる。

妻の努力に感謝し乍ら、勤務を續けてゐるうちに、八甲田山の雪中行軍。そして、無慘なる凍傷。不具者としての除隊——となつた譯である。

三

公務による疾病として兵役を免除され、郷里に歸つたのは三十五年の八月であつた。

併し彼には、落着いて静養する暇も與へられなかつた。彼は二千圓の御下賜金を戴く事になつてゐたが、父親に對する債權者共は、未だ負債が整理されて居らぬから、その二千圓を當方に渡せと、頑強に攻めつけて來たのである。今や父の家には、住居の一棟を残して、後は悉く人手に渡つてゐるのだから彼としても全くの無資産だ。而も不

具者の身で、御下賜金まで取られては、親子三人、路傍に飢ゑねばならぬのは知れ切つたことである。

彼は債権者の追求を避ける爲に、一時、昔の師匠の田畑仁太郎の家に身を匿し徐ろに對策を考へた。それには自分分が、分家して了ふに越したことはない。

彼が二千圓の支拂を拒む事を知つた債権者共は、無法にも父親に迫つて、僅かに残された唯一の財産たる一棟の家屋と、そして家財道具の類に至るまで、競買に附するに至つた。而も尙、それを以て憐れりとせず、執拗に彼の二千圓に魔手を延ばして來るのである。

今は躊躇すべきには非ずと、彼は父に向つて分家願の捺印を頼むと、父は繼母の口に乗つて、

『お前は俺の借金の整理をするのがいやなのであらう』と云つて、どうしても聞入れてくれない。彼は困惑したが、此處が一生の大事とばかり、智慧を絞つて、

『私が分家しなければ、お上で金を下げ渡しては下さらぬのです』

と、一世一代の嘘をついて、遂に捺印させ、手続きを済ませた。

ませた。

分家すれば最早や悪辣千萬な高利貸共も、この上追求する譯にはゆかない。彼は御下賜金を手にして、現在地の紫波郡彦部村大字大巻に家を購ひ、父にも一棟を買與へて、老後を安穩ならしめた。間もなく繼母はその家で没した。

四

彼には住ふ可き家も出来、恩給も下る様になつたが、無資産なのと、不具者で働く事が出来ぬ爲とて、生活は樂てはなかつた。

併しおタミは不具の夫を勞はり、幼兒を抱へて、朝は早天から、夜は遅く迄、田畑に出て働き、ともすれば暗く減入りがちな夫の氣を引立ててくれた。それを見ると、彼は全く濟まない様な氣がして頭が下り、自らも、何か働きたいと考へ、或時、試みに下駄の齒入れをやつて見た。最初は鉋や鋸の持方、板の固定法などに苦心したが、段々馴れて來たので、之に力を得て、此仕事を三年間續けた。

さうしてゐるうちに負傷の切斷端も固まり、仕事もうま

自分の身體と調子が取れて、次第に不自由と苦痛が薄らいだので、今度は指物を始め、現在では長男と一緒に、指物の傍ら、塗師をも兼業して、相當の註文を受ける様になつたのである。彼は今年五十五歳であるが、尙鑿鑿として、薬一つ飲まない健康體だ。息子の二人は夫々妻帯し、孫が三人出來てゐる。精練の妻おタミは、不憫にも大正八年、三十八歳で、これからといふ時に世を去つた。

長男の正三は父の業を助け、次男は函館驛の無線電信係を勤めて、彼の日常の世話は、正三の嫁がしてゐる。

生計は豊かな方で、資産として宅地五百三十三坪、田地一反六畝二十七歩、畑地三反歩に家屋一棟、年收二百五十圓位で、恩給は一項症該當者として、千百五十圓の支給を受け、戸數割三十七圓七十二錢を納めて、村内世帯の三百丸十七の内五十一位である。

彼が奮勵刻苦、これまでに至つたのは、第一に聖恩の鴻大なる、次に毘沙門天の冥助と、そしておタミの獻身的な働きと、世間の同情である——と彼は固く信じて居る。彼はこれ等の御恩に少しでも報いなければならぬ、と考

へ、先づ、少年時代から信仰して來た毘沙門天堂の建立を思立つた。昭和七年は彼の八甲田山遭難の三十周年に當る。そこでこの年の十月、獨力で約一千圓を投じて、自宅裏庭に一字を建てた。この御堂の彫刻の全部は彼が精進齋して、不自由な手で仕上げたものである。そして毘沙門天堂の祭禮は、爾後毎年三月に行はれるが、彼は毎朝、夏は五時、冬は六時に起床して、直ちに椽側に出て、皇居を拜した後、毘沙門天に向つて禮拜する。

尙彼は、村の忠魂碑建設には率先して五十圓を寄附し、日本赤十字社には二百圓を寄附して特別社員に推された。もう樂隠居をしてもよい身分であるが、彼は未ださうした安逸を欲せず働いてゐる。板を削る時には兩膝を以て立ち、僅か數本の指を以て器用に鋸や鉋を使ひ、義足は運動の際だけに用ひるが、一里位は平氣で歩けるさうだ。

酒も煙草も嗜まない。好きなのは菓子類だけで、粗衣粗食に甘んじ、勞働を以て唯一の趣味としてゐる。そしていつも朗らかな微笑を湛えて、家庭は和氣霽々として、その睦ましい團樂は村民の羨望の的となつて居る。

第二の曉

果樹園に成功せし後井太市氏

本籍地 香川県大川郡鶴羽村二一五二

負傷 左膝部盲貫銃創(跛行)

「おい、太市、お前を是非養子に貰ひたいといふ家があるんだが、行く気はないかね」

伯父がいつにない眞面目な顔でいつた。

「どうせ私は次男坊ですし、家を出てもいゝ身體ですが、こんな片輪者ぢや貰つても仕様がないてせう」

「それがお前、先方ぢや是非お前でなければいかんといふんだよ」

「えらく御執心ですね。私のやうな者でも關はんといふのなら、行かんでもありませんがね。しかし、伯父さん、相手は金持ちやないでせうね」

「うむ、金持ならね、僕もよるこんでお前に薦めるけど、實は、相手は僕の友達で、鶴羽村の後井といつて、貧乏な家でのう」

「伯父さん、私は相手が金持だつたら行くのはいやですよ。金持の家ぢや働きたがらないですからね。いくら働いて金儲けしたつて、世間の人の目には、當り前としか映らんし、第一彼奴金に目がくれて養子に行きやがつたと云はれるのは辛いですからね」

「えらい、...實はなア、後井の家も昔は盛んだつたが、不運つゞきですつかり衰へてしまふたのだ。それで、お前に来て貰うて昔にとりかへしたいといふ譯でのう」

「それならようございます。行きます」
さういつた譯で、彼が香川県大川郡鶴羽村の後井家の一人娘の婿となつて入夫したのは、大正八年の暮れてあつた。

彼は同じ香川縣の綾歌郡府中村、荒井利八郎の二男に生れたが、家が貧しかったので、小學校を卒へると共に、すぐ指物大工の家に奉公にやられた。その後一心にその職に精出して、漸く一人前の腕になつた頃に適齡に達した。

明治三十四年の徴兵で、彼は歩兵第十二聯隊へ入營、無事三ヶ年の現役を終へて後は、ひたすら家業に勵んでゐた。ところが、除隊の翌年になつて日露戦役が勃發し、充員召集に應じて出征することとなつた。

各地に轉戦しつゝ、同年八月末には滿洲大白山の戦鬪に遭遇したが、その戦ひに、彼は敵弾のために左膝部盲貫銃創を蒙り、涙を呑んで後退しなければならなかつた。療養の結果どうやら傷は治つたけれども、ついに跛となるを免れなかつた。そのため兵後免除されて歸郷し、その後、専ら家業に従事してゐたのである。

二

後井家へ入夫の後、不自由な身を以て働く指物大工では、一家の再興はもとより、一家を支へて行くさへ覺束な

い。これを機會に、鋸や鉋を棄て、鋤や鍬を握らうと決心したのである。

僅かながらも土地を買ひ求め、農業に従事しはじめた。彼等夫婦は、毎朝、翠松長帯を曳く有名な津田の琴林の間から、遠く淡路の島影を眺めながら、熱心に耕作に精出した。野良仕事は決して彼の體には樂ではなかつた。一日の仕事を終へて家路に就く頃には、足が動かない程だつた。殊に寒い冬の日なぞ、左足は鐵のやうに冷えきつて、づきん／＼と痛んだ。

「貴方、すみません、こんな家に来て頂いたばかりに、御苦勞ばかりおかけして」妻が氣の毒さうにいつた。

「何をいふのだ。僕は初めからその積りて來たのだ。ことに僕は日露戦争の時には、死んで歸るつもりだつたのが、かうやつて、跛にはなつたが丈夫で働けるではないか。ちつとやそつと仕事が出来るといつて、不平をいふては天子様に申譯がないわい」彼は朗らかにいふのだつた。

「お前も暫く我慢しなよ。僕の體がこんなんで、お前にも苦勞をかけるが、今に樂にしてやるからなア。僕ア何時ま



でも今のやうな野良仕事ばかりしてゐる積りぢやないのだよ。今に金がたまつたら、果樹園をはじめようと思つてる。お前もその積りで當分の間は、うんと節約して貯金をするやう心掛けておくれよ」彼は果樹園の經營が非常に有望なことを知つて、將來はこの方面に進まうと計畫してゐた。

そして、その目的に一日も早く到達するために、朝は暗いうちから野良に出て、夕闇の迫るころまで働きつけ、夜は夜なべに精出した。寝る間も惜しむやうに、夫婦心を合せて家運の挽回につとめた。

その努力は次第に酬ひられて來た。農業による収入も次第に増加した。かてゝ加へて、増加恩給に依る御下賜金も年額七百二十圓になつたので、生活は樂になつた。しかも、彼は寸刻を惜んで働き、勤儉貯蓄を旨としたので、數年の後には、相當の貯金も出來た。

『いよゝ、永年の希望が實現できるぞ』これもみんな貴方のお蔭です』夫婦は手を取り合つて喜んだ。

久しい間、研究してゐたので、果樹園は順調に進行した。今までの畑は漸次果樹園に改められて、柑橘、柿、無花果

等の果樹が植ゑ付けられて行つた。更に新しい荒地數町歩を買ひ入れ、これを開墾して果樹園に仕立てゝ行つた。

三

昭和六年のある日であつた。彼の家に村の在郷軍人分會の幹事達が數名おしかけて來た。

『後井さん、お目出度う』

『後井さんのやうな方を持つてゐるのは、我が村の誇りですよ』みんなが口々に云つた。

『いえ、もう、さう仰言られると、穴にでも這入りたい程恥しうございますよ。私は當り前のことをしたわけで、日本人としてすべきことをしただけですよ』

彼は恥しさうに揉み手しながらいふのであつた。彼は鶴羽村在郷軍人分會の名譽會員として、分會の事業を積極的に援助した。彼は自分の過去をふりかへつた時、自分がかうして今日安樂に暮せるのは、皇恩の賜物であることを深く感じた。又、幾度かの苦難に遭遇して、よく難關を突破し得たのは、軍人精神のお蔭であることを痛感し

た。この廣大なる皇恩に酬いるためには、後進の教育に力を添へることが、最もよい方法であると考え、彼は在郷軍人會のために微力を盡さうと決心した。かくて、彼は役員會や未教育補充兵教育等には不自由な體にも拘らず必ず出席しては周到な世話をなし、また事業發展の爲には、毎年相當の私費を投じて惜まなかつた。その功績によつて彼は大川郡聯合分會長より表彰せられたのである。

『後井さんが、御不自由な體で會のために盡して下さることを思ふと、我々完全な體をしてゐる者は、全くお恥しい次第ですよ』分會長は感激の眼を輝かしながらいつた。

みんなから賞められれば賞められる程、彼は面映いやうな氣がして、俯伏してゐた。それでも、嬉しく有難く、そぞろに過ぎし日の事など思ひ浮べられて、思はず涙ぐましいでは居れないのだつた。斯くて、彼は村民の信望を一身にあつめつゝ、家業に勵むと共に、公共事業のために盡瘁をつぎつけた。果樹園は年と共に榮え、且つ昨昭和八年、村長等の努力によつて煙草小賣商に指定せられ、家運はいよ

農村のために

自治功勞者と仰がれる青野清吉氏

本籍地	徳島縣板野郡板東町板東字東山田六十九番地ノ一
負傷程度	腰部打撲傷(兩足機能分不充)

『何だ、その態は!』

金棒にぶらりとぶら下つて、泣き出しさうな顔をしてゐる初年兵を、下から見上げて、若い班長は額に疳癩筋を立てゝゐた。

『足掛け位が出来ないでどうする。落つこちた所で砂の上だ。思ひ切つてやつて見ろ』

『やれないであります』

『仕方ない奴だなあ、弱蟲め。よし、下りろ』

叱られ乍ら、その初年兵は悄然と列についた。

『篠塚初年兵、お前ひとつ、模範を示してやれ』

『ハイ』

指名された篠塚初年兵は、つか／＼と進み出て金棒の前に、直立不動の姿勢をとつた。明治三十六年四月の半ば、歩兵第四十三聯隊の營庭である。

初年兵きつての、器械體操の名人篠塚清吉は、掛聲と共に金棒に飛びついた。大振り、中振り、尻上り、足掛け、大車輪、自由自在である。鮮やかな妙技に、一同感嘆の聲をあげた、班長は嬉しげに見守つてゐたが、今しがたの弱蟲初年兵に向つて、

『見ろ、篠塚は熱心だから、こんなに早く上達する。少しは見習はんといかんぞ。篠塚、よし、止めッ』

篠塚初年兵は綺麗な跳躍を見せるつもりで、最後の大幅りを試みた。ところが、四月とは云へ日光の直射を受けて掌が汗でべと／＼になつてゐたので、つい、つるりと滑つてしまつた。

『呀ッ!』

『一二年かゝるだらうが、或は元通りにならぬかも知れないと——』

『うむ——』班長はもう眼をうるませて、詫びる様に、困つたな、それは。あの時、俺がもつと早く止めさせる

とよかつたんだが』

『いえ、そんな事はありません。篠塚が少し慢心して、不注意なやり方をしたのであります。班長殿に御心配をかけて、篠塚は非常に相濟まなく思つてゐるのであります』

さう言ふ篠塚初年兵の、裏れた顔を見ると、班長は抱きしめてやり度いやうないじらしさを覺えるのであつた。

班長の心配も、軍醫の心を盡した手當も、遂に效を奏さず、清吉の兩足は遂に、完全に役に立たなくなつて了つた。

杖に縋つて數歩を歩くのが關の山で、再び懐かしい營舎に歸ることは出来ず、その年の暮に兵役を免除されて、徳島縣板野郡板東町の生家へ歸郷しなければならなかつた。

彼の生家は農業をやつてゐたが、足の自由を失つた清吉は一室にとぢ籠つたきり、外にも出ずに、讀書に日を送つた。

反動が充分につかないうちに、思はず手が離れた爲に、篠塚初年兵の體は不自然な彈み方をして、どんと落ちた途端に、強たかに腰を打つて、

『うむ!』と、呻いたきり起上れない。

『どうした』と、班長が直ぐ走りよつて抱き起した時には顔面蒼白で、眼が上づつてゐる。

『しつかりしろ、篠塚』

班長は自分で篠塚初年兵を引擔いで、醫務室の方に走り去つた。

二

篠塚清吉はそれきり起上れなかつた。嚴格な半面に、をかしい程部下思ひの班長は、暇ある毎に衛戍病院に行つて、篠塚を慰めるのであつた。

『どうだい、少しはいゝか』

『はあ、病みは薄らぎましたが、兩足がすつかり冷えて、おまけに、少し動かすと麻痺しますので、到底歩行は出来ません』

『軍醫殿は何と言つて居られる』

それより外にすることがないのだ。
——俺は一生の不具者になつたのか。もうあの明るい陽の光を浴びて、外を飛歩くことも出来ず、ぢつと蝸牛のやうに背をまるめて、室に坐つたまゝで朽ち果てねばならぬのか。

若い彼の胸は暗愁にとざされた。
労働も、戀も、希望も、すべては己の世界とは遠くかけ離れてしまつた。暗く、味氣なく、呆然と年月を送るよりいつそ死んでしまつたがましではないか。
灰色の光なき生活を脱れて、永劫の静寂の世界へ——覺むることなき甘美な眠りの中へ——。

ともすれば、清吉はその誘惑に負けさうであつた。
併し、何時も死の一步手前で、彼は踏止つた。自分の死後の両親の嘆きを思へば、その不孝を敢てする氣になれなかつたのである。

斯うした惨めな憂鬱の中から、彼を救つてくれるものは偉人や宗教家の傳記であつた。殊に彼は、二宮尊徳などの田園の聖者の生涯に心を惹かれた。

貧家に身を起し、萬難に屈せず勉學にいそしんで、天地の間に横はる冥々の大哲理を發見し、それをしかと體得して、郷土の爲に、又同胞農民の爲に、營々として盡しつゝ死んで行つたそれ等の人の、何と偉大なる足跡であることよ。

自分は今不幸にして、身體の自由を失つたけれ共、幸にして頭腦は人並であるし、又斯うして聖賢の書に親しむ機會を得たのだ。

徒らに嘆いてはならぬ。僻んではならぬ。心を大きく、淨らかに持つて、靜かに自己の修養を積まう。そして、他日、國家社會の爲に貢獻すべき素地を作らう。それが自分に與へられた天よりの義務である——。

清吉は次第に、心眼を開いて、謙虛な、明るい氣持で人生を見、運命を觀することが出来る様になつた。心此處に到達すれば、も早女々しい生存逃避の煩悶もなく、清澄な希望に充ちた態度で書架に向ひ得て、五ヶ年の星霜を過ごしたのであつた。

三

「篠塚の息子は、足こそ立たぬが、非常な勉強家で、學者ださうだ」

狭い町に、さうした噂が立つて、哲學や文學のことを、彼に聞きに来る人も少くはなかつた。近所の人は、手紙の代筆を頼んだり、子供の勉強を見て貰つたりした。それらの一々に、彼は物柔らかな、親切な態度で應待したので、人々は彼を尊敬こそすれ、輕蔑したり、笑つたりする者は一人もなかつた。

そのうちに、町役場で缺員が出来て、彼に書記をやつて貰へまいかといふ交渉が来た。彼は、その頃杖をつけば、數町位は歩くことが出来るやうになつてゐたので、喜んで承諾し、任命を受けたのが、明治三十八年の九月だつた。
書記の職に就くと、彼は人の驚嘆する程、眞面目で、熱心に働いた。そして、長年の好學癖から、町村自治制に関する書物を片端から讀破研究して、それ等の一切の問題に明確な解答を與へ得る様になつたので、役場の誰も彼もが彼を重寶がり、何かあると、直ぐ尋ねに来た。
彼は、自分が其場で分らないと、分る迄調べて、決して



M A S A Y U S H I

好い加減に問題を投げなかつた。

「篠塚はこの町の生字引だ」

町長を初め吏員一同は彼のことをさう呼んだ。眼に見えない、斯うした彼の努力が、實際どれ位町の発展を助けたか知らないのだ。

彼の才能は斯くして實社會の上に、顯然と輝いて来た。

前途は洋々と擴がつてゐる。

明治四十年に、生家の篠塚氏から分家して四十二年の暮に資産家青野氏より妻を迎へ、間もなく分家を廢して、妻の實家に入り、數萬の財産を襲いだ。

そして大正四年の七月には、町の有志一同の信望を擔うて、収入役に選任せられ、一意専心、會計事務の整理刷新を計り、納税成績の向上に腐心した。

この納税問題は、地方の自治機關に於て、最も面倒で且つ難しい仕事とされてゐるのであるが、彼が手をつけ出しからは、目に見えて、一年は又一年と、どん／＼成績が上り、彼の能吏ぶりは、遺憾なく發揮されたのである。

それを見た信用購買組合では、辭を低うして會計理事の

就任を頼み、又農會からも、是非會計幹事になつて貰ひたいと申し込んで来た。

「郷土郷民の爲に役立つことなら——」

彼はさう言つて、この二つの職務を、無報酬で引受けたのであつた。

思ひ見よ、兩足は下駄を履くことさへ出来ない不自由さで——下駄を履くと癩痺が来て歩けないのだ——而も、眞夏の外は、腰から下が冷えてとても苦しく、成可くならば寝たきりにでもしてゐたい體で、この繁劇な事務を、嫌な顔一つせずによつてゆく彼の忍耐を——

これが私心あつて出来ることであらうか。斯くて、ひたすらに一身を郷土の發展の爲に捧げて、こゝに三十年。其の徳望は普く町民の敬仰する所となり、過ぎし昭和七年には、自治功勞者として徳島縣知事より懇ろの表彰を受けるに至つた。現在、氏の保護を受けつゝある信用購買組合は事業着々進展して、近く農業倉庫の建設を見やうとし、總て獨立するの準備を進めつゝあるさうだが、長年の献身的努力の跡を顧みる時、氏には感慨無限なものがあるであらう。

嵐を衝いて

辛酸を嘗め盡した新井雄三氏

本籍地	埼玉縣北埼玉郡星宮村大字池上六九一番地ノ一
負傷程度	右大腿部骨折貫通銃創 右下腿軟部貫通銃創

こゝは埼玉縣北埼玉郡忍町の新井雄三氏の住居だ。

ぼか／＼と暖い春日を背中一杯にあびながら、無心に庭の草花いちりをしてゐる初老がある。その顔は確乎たる意志の閃きをみせてはゐるが、長い年月の勞苦を物語るかの如く、額には深い皺が刻み込まれてゐる。

「あんた、仙之助のところから手紙が来ましたよ」

彼の妻であらうか、質素な身なりの老婆が、縁側に立つて聲をかけた。

「なに、仙之助のところから手紙が——どれ／＼」

老人は嬉しさに立上ると、びつこをひき／＼縁側にとつかと腰をおろした。彼が新井雄三氏である。今年五十六歳だといふが、苦勞して来たせい、年よりはいくらかふけてみえる。彼はもどかしさうに封を切つて讀みだした。

行を追ふて行く中に、彼の頬には微笑が綻びだした。

「なんと書いてあるのだね……ひとりてにこ／＼してゐないで讀んできかせなさいな」

側から妻が背中をつゝいた。

「うむ、坊やがとて可愛くなつたとよ。もう片言をおぼえて、ぢう、ばつばといつとるさうな。その中に孫づれて遊びに来ると書いてあるよ」

「随分久しく見んが、可愛くなつたらうな」

二人は愛くるしい孫の顔を思ひ浮べて、思はず頬笑ますには居られなかつた。いかにもなごやかな田園の春の風景である。なすべき事を成し遂げた人でなければ、味はふこの出来ない心境だ。

「しかし、考へてみれば……」

雄三氏は手紙をたゞみながら呟くのだつた。

「よくまあ、今までやつて来たもんだなあ」
いかにも感慨深かげである。

「ほんとだね、まるで夢のやうだよ」
妻のあさも呟いて深い溜息を洩した。

「我ながら、この體でよく今日まで生きて来たと思ふよ。
その代りお前にも随分と苦勞をかけたな...」

「なにをいふだね...しかし、今までの苦勞も、今日にな
つてみれば、苦勞の仕甲斐があつたといふものさ」

老夫婦は思ひ出深かさうに顔を見合はせるのだつた。

※ ※ ※

彼は明治三十二年十二月、歩兵第三聯隊に入營し、三ヶ
年軍務に精勵、明治三十五年五月に歸休除隊となつて、郷
里なる埼玉縣北埼玉郡星宮村に歸つた。歸ると共に妻あさ
を娶り、家業の農業に従つた。父は既になく、六十に近い
老母に孝養をつくしつゝ、汗みどろになつて働らいた。そ
の中に長男の仙之助が生れる。子としての責任、夫として
の責任、そして新たに親としての責任が、彼の双肩にかゝ
つて来る。汗みどろの活動ではあつた。しかし、希望にみ

ちた生活だつた。

明治三十七年二月!

晴天の霹靂! 日露の國交は破れて、宣戰の大詔が下
された。彼の許にも赤紙が配られた。召集令だ!

彼にとつては辛かつたらう。漸く築き上げかゝつた生活
の塔をすてなければならぬのだ。しかし彼は悲しまな
つた。嘆かなかつた。

「御國があつて初めて國民は安心して行けるのだ。その御
國に古今未曾有の國難が襲ひかゝつてゐる。上は御一人様
より下は萬民に至るまで、全國をあげてこの國難を打開す
るために、劍をとつて起つたのだ。片々たる私人の身邊を
顧みてゐる場合ではない」

行かう! そして、御國のため天子様のために命を捧げ
よう! ひとたび出て立つたが最後生還を期せぬ...しか
し、後に残る老母や妻子は、必ずや銃後の情にまもられる
に相違ない。

彼は勇躍征途に上つた。彼は第三軍に屬して宇品港を出
帆、大洞口に上陸と共に各地に、轉戦日露戰役中の最大難

戰、そして恐らくは東西古今比類なき難戰——旅順攻圍戰
に従つたのである。旅順は露國が莫大なる國帑と科學の粹
を盡して築き上げた金城鐵壁、これを陥れるまでの苦心
と努力と犠牲が、如何に偉大なるものであつたかは、今更
に嘖する必要はない。

幾多の生命を犠牲にしつゝ、我が軍は漸次大小無数の堡
壘を抜き、本防禦線に迫つて行つた。第一回、第二回、第
三回と總攻撃は繰返された。しかし、敵は仲々に屈しない
旅順の谷々は死屍を以て埋められ、地は鮮血を以て眞赤に
染められるかと思はれた。

彼は九月十九日より開始された海鼠山攻撃に参加したが
椅子山附近に於て右大腿後部骨折貫通銃創並びに右下腿軟
部貫通銃創を蒙り、再び戦線に起つことが出来なかつた。
一時は切斷せねばならぬかと危ぶまれたが、各地の野戦病
院や衛戍病院に於て治療を受けた甲斐あつて、辛うじて切
斷を免かれた。しかし、右脚はその機能を喪失したために
兵役免除となつて歸郷したのであつた。

※ ※ ※

死すべき命を完うし、不自由な右脚を曳摺つて、久方ぶ
りに郷里に歸ると、老母は老の眼に涙をうかべて喜び、妻
子は膝にすがつてなつかしがらる。その姿を見た時、彼は今
更ながら自分の責任を感じた。

「國に捧げた命を完うしたのは天恩だ。この天恩に報いね
ばならぬ。やるぞ! 戦場に望んだつもりでやるぞ」

そして、事實、彼の後半生は文字通りに戰場に於けると
同じ奮闘であつた。砲彈の代りに生活の脅威におびやかさ
れつゞけた半生であつた。

全身を打込んでやらうと決心した。そして實行にうつつ
た。しかし、如何せん、彼の體はもとの體ではなかつた。
右脚の自由を失つた不具者だ。しかも全治後日なほ淺く、
疵痕はしくしくと痛んだ。丹精に育て上げた田畑は、彼の
不在中人手が少かつたために荒れてゐる。これを回復する
には相當の努力が必要だ。しかし彼の體は人一倍の勞役を
許さない。しかも、家族はかなりの無理をして来たために
借金も重つてゐる。この難關を突破するためには、どうし
ても非常手段を講ずるより外はない。

彼は涙をふるって住みなれた家、田畑を人手にわたして一時を糊塗した。そして、妻の生家の世話で、北埼玉郡長野村に田畑五反歩を借り受け、更生の意氣を以て小作農に従事した。しかし彼の體はわづか五反歩の田畑を耕す勞働にさへ耐え得られなかつた。その中に次男の鶴吉が生れる。彼の責任のみは徒らに重く、生計は急迫して來た。彼は汗みどろになつて働いた。六ヶ年といふもの、明日の米、いや今日の夕食の米にも追はれるやうな氣持で働いた。しかし彼の努力は酬いられず、お上より頂戴した一時金陸軍賑恤金貳百圓さへ、前借その他の整理に煙と消えてしまつた。『俺はこの體では百姓仕事は出来ない。今の中に何とかせんと、親子諸共餓死を待つばかりだ』

何かよい方法はないかと思案してゐる中、ふと忍町で湯屋を営んでゐる義兄のことを思ひ出した。そこで、これに頼つて行くと、義兄もいたく彼の現狀に同情して雇つてくれることゝなつた。彼の一家はこゝに住込み、湯屋手傳をしつゝ僅かの月給を貰ひ、細々と生活をつゞけ、大正九年まで十ヶ年間餘りも働いた。

しかし、この仕事を何時までつゞけてみても先の望みがない。何とか新しい道を進みたいと思つてゐる矢先、村の牛乳屋で配達夫を欲しがつてゐるといふので、彼はとびつぐやうにして雇はれた。四年間といふもの、不具な體の苦痛をしのんでこれに従つた。収入の點では幾分かはよかつた。しかし、その苦痛たるや、並大抵ではなかつた。子供は更にふえて、今はみんな五人だ。この大勢の子供を飢ゑしめたくないばかりに、あらゆる苦痛を征服して來たが牛乳配達の過勞は、遂に負傷個所の劇痛をよびさましてしまつた。

今までの彼は、背後に迫る生活苦の焔に追はれて、仕事の種類など考へてゐる暇はなかつた。何でもいゝ、今日の生活を支へてくれさへすればよかつた。將來の事など考へてゐる暇はなかつた。しかし、今度といふ今度は、自分が肉體的な勞働に適しないことを痛感した。何か手の職に従ひたいと思つた。

折よく、世話する人があつて、足袋木箱製材工場の職工となつたのは、大正十三年の夏だつた。その前後から、長

男の仙之助も漸く長じ、補職の見習中だつたので、これからは幾分生活も樂になるかと思はれたが、仙之助が丁年に達して、徴兵検査に合格、第十九師團野砲兵第二十五聯隊に入隊することゝなつた。彼の家庭の事情を知つてゐる人の中には、徴兵延期を願つたらとすゝめる人もあつた。しかし、彼は頑としてきかなかつた。

『兵役は日本男子の義務だ。その義務を一日でも延ばすことは、お上に對して畏れ多い。なに、心配せんでもいゝ。俺は石に噛りついても一家を支へて行くよ。世の中にはもつとひきい家もあるのだ。それでも喜んで御奉公に差上げてる』

※ ※ ※
 子供はみな大きくなつた。自分達を今日まで育ててくれた父の勞苦を知つてゐる子供達は、一日も早く働いて父を樂にさせたいとつとめた。親子七人が一丸となつて、生活戦線に奮戦した。そのために、彼の一家もどうやら生氣をふきかへした。



長男の仙之助は除隊後、桶職にいそしみ、漸く獨立する
ことが出来るやうになつた。昭和六年には妻を迎へ、今で
は横濱市にあつて桶職に従事し、既に一子をあげて圓滿に
暮してゐる。

次男の鶴吉は父の許にあつて桶職にいそしんで、一家の
隆昌につとめてゐる。長女とみ、次女たかはいづれも行田
足袋工場の女工として働き、工賃年額參百五十圓内外を得
て一家をたすけてゐる。

思へば、忍苦の三十年だつた。生活と戦ひつゞけた三十
年だつた。幾度か生活苦の怒濤におし流されようとした彼
だつた。しかし彼はよく耐えた。よく乗り切つた。そこに
我々は不撓不屈の尊い軍人精神の閃きを見出すことが出来
るではないか。

上をみるな、下を見よ...彼はいかに困苦のどん底に突
落された時も、上をみて羨しがつたり、そねんだりしな
かつた。下を見た。下を見れば自分より不幸な人はいくらも
居る。そして、自分からを慰め勵ましつゞけた。
どん底から上へ向つて行くところに、人生の苦痛がある

試練を経て

幾度か失敗遂に成功した朝本吉造氏

本籍地 石川縣能美郡根上村字福島二八
番地
負傷 左大腿部貫通銃創

苦境に陥る

「貴方、水が來初めたから、早く來て畔の田をうなつて下
さいよ。」
妻が飛んで來て言つたので、縁側に腰かけてゐた吉造
は、急いで鍬をかついで、四五町離れた田圃へ行つた。
さして水に不自由なところではないが、田の植付け時に
なると、方々で水を田へ引込むので、水が不足勝ちにな
る。だから下流の方の田を作る人は、具合よく水が流れて

しかし又そこに妙味もある。彼、新井雄三氏は正に生活の
どん底から、苦辛慘澹の努力の末、上に浮かび上つた人だ
ある。

子供達がみな成長して、それ／＼職につき、生活も漸く
固定した安心のためか、彼は昨年頃から身體の衰へを感じ
た。子供達はみな心配した。

「お父さん、今度は私達が働きますから、安心して休んで
下さいよ。そして、體を大事にして、なるだけ長生きして
下さいよ」

さうすゝめられるまゝに、昨年の十一月限りで、久しく
勤めた木箱製材工から足を洗ひ、今では靜かに家にあつて
悠々自適の生活を営みつゝある。

來た時をねらつて、大急ぎで仕事をするのである。

「あつ、痛い、うらむ、こりやいかん。」

せつせと田をうなつてゐた吉造は、半分位うなつて來た
時、急に苦しさにさう叫ぶと、よろよろとよろめくやう
にして畦のところまで行つて、倒れるやうに腰をおろして
しまつた。

『また痛むのけ』

向ふで、これも大急ぎで耕してゐた妻が、心配さうに此
方をむいて言つた。

『うむ』

憂鬱に、呻くやうに唯一言さう言ふと、彼は「ふうむ」
と首垂れて大きい吐息を吐いたのだつた。

稼ぎなされやきりりとしやんと

かけた襪の切れるほど

隣の田では、最早植付けを初めたらしく若い娘が美し
い聲をはりあげて田植歌を歌ひ初めた、遠く近くの田では
人間や馬がさかんに動いたり、歌を唄つたり、今が忙しい
真最中なのである。

『こんな右脚が不自由で苦しくては、とても一人前の百姓仕事はできない。どうしたらいいだろう』

彼は忙しさに働いてゐる人達を羨しさに眺めながら、不自由な右脚を撫でて思案に暮れたのだつた。

明治十一年十一月、石川縣能美郡根上村朝本榮吉の次男と生れた吉造は、明治三十七年九月補充召集に應じて日露戦争に出征し、第九師團工兵第九大隊第二中隊に編入され有名な旅順口攻圍戦に參加した。體格もよく、膂力も亦人にすぐれた彼は、各所の戦ひに、衆に先んじてよく働いたが、十月二十四日二龍山攻撃作業に従事中、右大腿部に貫通銃創をうけて無念ながら戦線から退いた。そして内地に後送されたが、傷のために右足は發育下充分となり、感覺も鈍くなり、關節の運動も圓滑を缺くやうになつたので、今まで通りの百姓するのが非常に困難になつてしまつた。戦争に行く前の年三十六年の六月に結婚し分家して、實家から分けて貰つた僅かの田と他人の田を小作して生活してゐたのだが、そんなわけで一家は非常な苦境に陥つたのだつた。

副業として養鶏を思ひ付く

『さうだ。養鶏をやつて見よう』
色々煩悶した末に考へつたのはこれだつた。脚が不自由なために百姓仕事を思ふやうにできないとすれば、何か適當な副業をやるより外はない。副業となると、先づこの邊の農家として手取早く營めるのは養鶏ぐらゐるものである。

『吉造さんが雞を飼ひ出したとよ』
『へーん、雞か、雞ぢや大抵皆が手を焼いてるがな』
村人達は初めは半ば冷笑してゐた。事實に於て、この邊で養鶏をやつて成功したものはなかつた。初めは大變の意氣込みで初めるが、野良犬や鰐の害にあつたり、原因のわからぬ雞の病氣にやられたりして、皆懲り懲りしてゐた。砂地で、土地は高燥で、空氣の流通もよく、申分のない條件を具へた、天惠の養鶏地なのに、成功しないのは熱心が足らないからだ。努力、努力！
彼は妻にも言ひきかせ、自分も朝夕心に言ひきかせながら

ら、熱心に雞小屋を掃除したり、増築したり、飼料を研究したり、害虫の豫防を工夫したり、雞を賣る家があるときけば遠く離れた村にまでも、買ひに行つたりした。
しかし熱心に消毒し掃除して、衛生に注意しても雞は次に病氣にかゝつて斃れた。卵を産み初めるやうになれば先づ大丈夫であるが、それまでにならない内病氣にやられるので、この損害が少くない。

また折角立派な成雞を買ひ入れたと思つて喜んでゐるとそれが餌を喰べるだけで一向卵を産まないで、不思議に思つて調べて見ると、雞冠に紅が塗つてあり、足の蹴爪を鑿つて削つてあつたりして、初めて一杯喰はされたことに氣がついて口惜しがつたことなどもあつた。雞の年齢は雞冠や足の蹴爪で見るので、それに紅をぬつたり、削つたりすると、卵も産まない老雞でも非常に若く見えるのである。その内にだんだん飼養法も會得することが出来、これなら副業でなく、本業としてやつても大丈夫といふ見當もつた。

『どうだらう。百姓をやめて養鶏専門にならうと思ふが』

妻にかう相談すると、

『でも失敗したらその時は二進も三進もゆかんけれ、少しは田の方も残して私がやるけれ』

と妻が言ふので、小作を減らし、田の方は妻が主としてやり、自分は養鶏を専門にやることになつた。

卵を孵化させて、それを卵を産むまでに大きく育てる、これが養鶏家の一番苦心するところで、これがうまくいけば損はないのであるが、雞は非常に病氣にかゝり易く、また鰐や犬や猫などにとられる率が非常に多いのだ。

『今日は、お宅では雞を飼つてるさうですが…』

雞を飼育してゐる家と見ると、かういつて入つて色々飼育法をたづねて見た。然しこの邊では二三羽位を放し飼ひにしてゐる家が多く、十羽以上飼つてゐる家は甚だ稀で参考になることもあまりなかつた。

『これでは駄目だ。思ひ切つて名古屋まで行つて見よう』
愛知縣は養鶏の本場だ。彼は妻と相談した上遙々愛知縣まで行つて、名ある養鶏場を訪れ、實地について色々調査した。

それは非常に有益だった。彼は愛知縣から歸ると今までの自分の養雞法の誤りを悟り、根本的にやり直す決心を固めた。

眞の試練

『おい、此處ではとても駄目だから、あの小松原に移らう。』

愛知縣から歸ると、彼は突然言ひ出した。妻はびつくりした。あんな人里離れた寂しい原っぱへ何故移らねばならないのか、養雞ぐらゐる此處でだつて充分やれるのに、と妻は反對したが彼はきかなかつた。

生産費の低下、養雞に成功する秘訣はこの一語に盡きる、たとへ無病息災に育てたにしても大の男が何ヶ月もかかつて、十羽や二十羽育てたのでは商賣にならない。大規模に經營して大量生産に成功することができてこそ、一羽の雞、一個の卵を安く賣ることができるとだ。妻の反對を押し切つて、人里離れた小松原の中に大きな雞小屋を建築したのは明治四十四年の夏だつた。

『何といふ不覺だ。俺の畢生の事業もこれで終りだ』
一瞬さう思つて、彼はどつかと地上に坐して男泣きに泣いた。全財産を傾けた仕事は、その出發點に於て致命的な痛手を蒙つてしまつたのだ。

『それ見なせえ。言はんこつちやねえ。餘り慾深にやりすぎるからろくなことはねえのさ。身の程知らずちゆうもんよ』
村人達は同情しないで却つて失敗した彼を嘲るのだつた。彼等は百姓は本能的に田畑を作るべきものと考へ慣れてゐるので、何か新しい仕事をもくろむ者は、反逆者のやうな氣がして反感を持つのだつた。

然し、彼はこの痛手からまもなく奮ひ立つた。失望落膽の底に沈んだ時、彼の頭腦にありありと浮んだのは、嘗つての旅順攻撃戦に於ける二龍山攻撃のはげしい場面だつた。雨霰のやうな敵弾を冒しての必死の作業、右脚に劇しい痛みを感じて倒れた自分。さうだあの時に自分は既に無い命だつたのだ。それが不思議に生延びてかうして居られるのだ。あの時の事を思へばこの位の打撃が何だ。俺は日

『ほう、こりやあ大したもんだな、吉造さん。お前さんが大きくやるちうで、見に来ただが、こんなに大仕掛にやつて儲かるかね』

雞小屋が九分通り出来上り、新しく買ひこんだ成雞約五百羽を收容して、外圍ひを半分ばかり造つた時に、隣村のKといふ一寸大きく養雞をやつてゐる人が来て言つた。

『大丈夫成功するつもりだが、まだこれ位でも足りない位だ。どこかに雞の賣りはないかね』

『値によつちやあ、俺のところて賣りてえが、来て見て貰へまいか』

耳よりな話だと思つて彼は後始末もそこそこにして隣村まで行つた。

五十羽ばかり買ひこむことにして、急いで歸つて見ると「アツ」と聲を擧げたまゝ彼は思はず立すくんで終つた。何といふ慘狀であらう。未完成な外圍ひを破つて野犬の群が侵入して、五百羽の雞の大部分を殺傷して終つたではないか。血も羽毛は四方に散亂し、傷けるもの、半死半生のもの、實に此世のものとも思へぬ慘鼻の極である。



本帝國の軍人ではないか！ 何糞これ位のことて参るものか！

奮然として彼はこの打撃から立ち上つた。寢食も忘れて、鶏小舎の完成に努めると共に、新しく方々をかけ廻つて、無理算段をして鶏を買ひ集めた。

『戦争で言へば俺は深入りして終つたのだ。どうしても此道で成功するより外ないのだ』

彼は稍もすれば愚痴を言ふ妻を、かう言つては叱り罵ました。

死地に陥つた者は無二無三に進む一手だ。躊躇すれば自滅より外ない。

『生活が向上し、文化的になるにつれて、鶏肉も鶏卵も益益需要が大となるだから、養鶏業が商賣としてやつて行けない筈はない』

これが彼の根本の信念だつた。しかし彼の決死の苦心にもかゝらず、大正二年頃は非常の経営難に陥つた。野犬群の被害は、厳しい監視にもかゝらず、其後も屢々蒙つたが、何よりの痛手は支那卵の爲に卵の價が下落した上に

病雞が續出して止まないことだつた。時には殆んど収入のないやうな月さへあつた。

然しかゝる苦境に在つても、彼の二龍山攻撃の際の記憶と、帝國軍人であるといふ誇りとが、常に彼を鞭打ち勵ました。困難が加はる毎に益々彼は奮闘努力した。

遂に養鶏組合を設立

この撓まざる努力は遂に無駄とはならなかつた。初めは冷眼視してゐた村人だちも漸く彼の誠實に打たれ始めた。

『吉造さは偉ものぢやぞ。雞だつて飼ひ方さへよけりやあ儲かるもんだ』

彼等はかう言ひ出した。彼はそこにつけこんだ。そして熱心に副業としての養鶏をやることをすゝめた。

『吉造さ、俺等が皆で始めたら、卵や雞ばかり多くなつてお前さんの儲けが薄くなるべえが』

とひやかす者もあつたが、

『馬鹿いへ、俺はそんなけちな量見は持たん。村のため、

廣くは國のためだ』

かういつて熱心にすゝめた。

そして養鶏をやる者が段々多くなると、今度は養鶏組合の設立を熱心に説き廻つた。鶏卵や廢雞（卵を産まなかつた雞）の理想的販賣統制をやるには、共同して組合を作るより外はないのだ。

かくて昭和二年二月、福島養鶏組合が設立された。組合員數六十餘名、彼は推されて組合長となつた。

『佐々木先生に一つ御心配を願つて、共同處理を實行しよう』

佐々木清作といへば、當時、教育界を勇退して閑地にはゐたが、郷黨の信望篤い人格者であつた。

彼の此提言に皆賛成した。

佐々木氏も郷土の副業發展のために欣然として自宅を開放して共同處理場とし、自ら其主任となることを快諾された。

この目ざましい發展は、まもなく當局の認める所となつた。

同年九月石川縣廳及び農林省の獎勵の下に、共同處理場を新築するに至つた。

爾來、飼育法の指導、病蟲害の豫防驅除、及び販賣路の開拓等、寢食を忘れての奔走は益々酬いられ、昨昭和八年の組合共同出荷の價格は、鶏卵のみで三萬六千餘圓に達した。

現在氏の飼養羽數三千羽以上、雞舎五棟、總建坪二百二十坪、倉庫二棟十七坪、物置二棟十六坪、飼料調合場一棟十坪、事務所兼住宅一棟五十二坪、總面積六百五十坪に達してゐる。

餘 生 奉 公

熱と誠を以て働き續けた葦名磐氏

本籍地 石川縣金澤市玉川町三九

程負 左大腿部貫銃創兼骨折(跛行)

こゝは金澤市福助座の舞臺だ。幕が開くと、昭和七年三月二十八日の午後、上海市街の北方、江灣鎮の西北に當る日本軍の塹壕で、既に戦争が止んで、四邊には春が訪れて小鳥が囀り、戦争のために倒れた樹木にも青々と芽が吹いてゐる。そのかたはらに名譽の戦死をした林聯隊長の墓標がある。空閑昇少佐が、出雲軍曹と瀧上等兵とを連れて、軍服姿いかめしく現はれる。そして出雲へ六通の遺書を託し、瀧

には花を摘んで来いと命じる。——
やがて瀧が花を摘んで来ると、空閑少佐は東の空を拜禮して、

「空閑は 陛下の兵士をかくの如く殺しました。お詫びの申し上げやうもございません。死すべき私が後れをとつて生存し、生存さるべき皆の聯隊長殿は、遂に名譽の戦死をとげられたのであります。實に、實に相濟まぬこととございます」といつて慟哭し、二人の部下の悄然と云なだれてゐる隙に、ピストルを擬して自裁する。

立錐の餘地なく満溢した觀衆は、水を打つたやうな静寂さで、たゞ歎歎のみが聞える許りだ。——その時、緞帳が靜かにこの悲壯な情景を包むと、興奮感激に双頬を輝かした觀衆は兩眼を瞬きながらは始めて我に返つて喝采した。北國新聞社主筆鴨居氏作の「空閑少佐」劇は終つたのだ。その日、過ぎにし上海事變に、武士道の精華と稱へられ廣く國民の範ともなるべき、空閑少佐の慰靈祭の餘興として、この「空閑少佐」劇が上演されたのだつた。かうしてこの純收益金百七十四圓五十四錢を同遺族に手

交された。

この慰靈祭を主催したのは、金澤市玉川町に住む、石川縣傷痍軍人會長兼北陸三縣傷痍軍人聯合會總務、元陸軍歩兵軍曹勳七等葦名磐だつた。

彼は昭和二年には、敬神報國の思想普及と共に武士道鼓吹のため、石川縣傷痍軍人會員と計り、伏見桃山の乃木神社へ大額を献納した。

また昭和六年十一月には、北滿に派遣された第九師團に屬する諸將兵を慰問のため、將校以下六百名に對して慰問袋を募り、植田師團長を経て送附した。

彼が皇恩に報ゆるため、自から率先して活動せる社會事業は、實に枚擧にいとまがないのである。その功績によつて、彼は本年二月、紀元節の佳節には、市長から表彰せられ銀盃一個を贈られた。

二
そも、葦名磐氏とはいかなる人であらうか。

葦名家は平氏の直流で、一時は奥羽に百六十萬石を領した大名であつたが、伊達正宗に敗れて後は漸次没落して山

村に寂しく隠れ住む落人となつた。その祖父の代に至り、加賀百萬石前田家に小祿を食む武士となつたが、明治維新後祿を失し多少の蓄財も漸次費消して、父は一小會社の事務員にまで落魄してしまつた。その長男として生れたのが彼磐氏であつた。彼は少年時代、多數の弟妹と共に貧苦のうちで生長し、幼時より辛苦をなめつくしたが、明治三十二年名譽ある軍人として入營することになつた。

入營して後、彼は一意君國のために御奉公せんと覺悟し御勅諭の五ヶ條をつねに忘れず、朝夕これを暗誦して軍務に従事して、成績群を抜き翌年上等兵に進級し、同時に短期下士候補として特別教育を受け翌三十四年には、早くも伍長に任せられた。中隊長はじめ上官から、永く隊に止つて御奉公せよと薦められたが、弟の入營のため、兩親に生活の安定を與へねばならないので、上官の厚意を謝して除隊し、たゞちに小資本で看板業を始めた。しかし素人の無經驗の悲しさにまんまと失敗し、翌年石川縣の巡查を拜命したが、不幸にも撃劍の際、右耳を負傷したので辭職し、小額の貯金を資本として加賀名産九谷焼の小賣行商を營

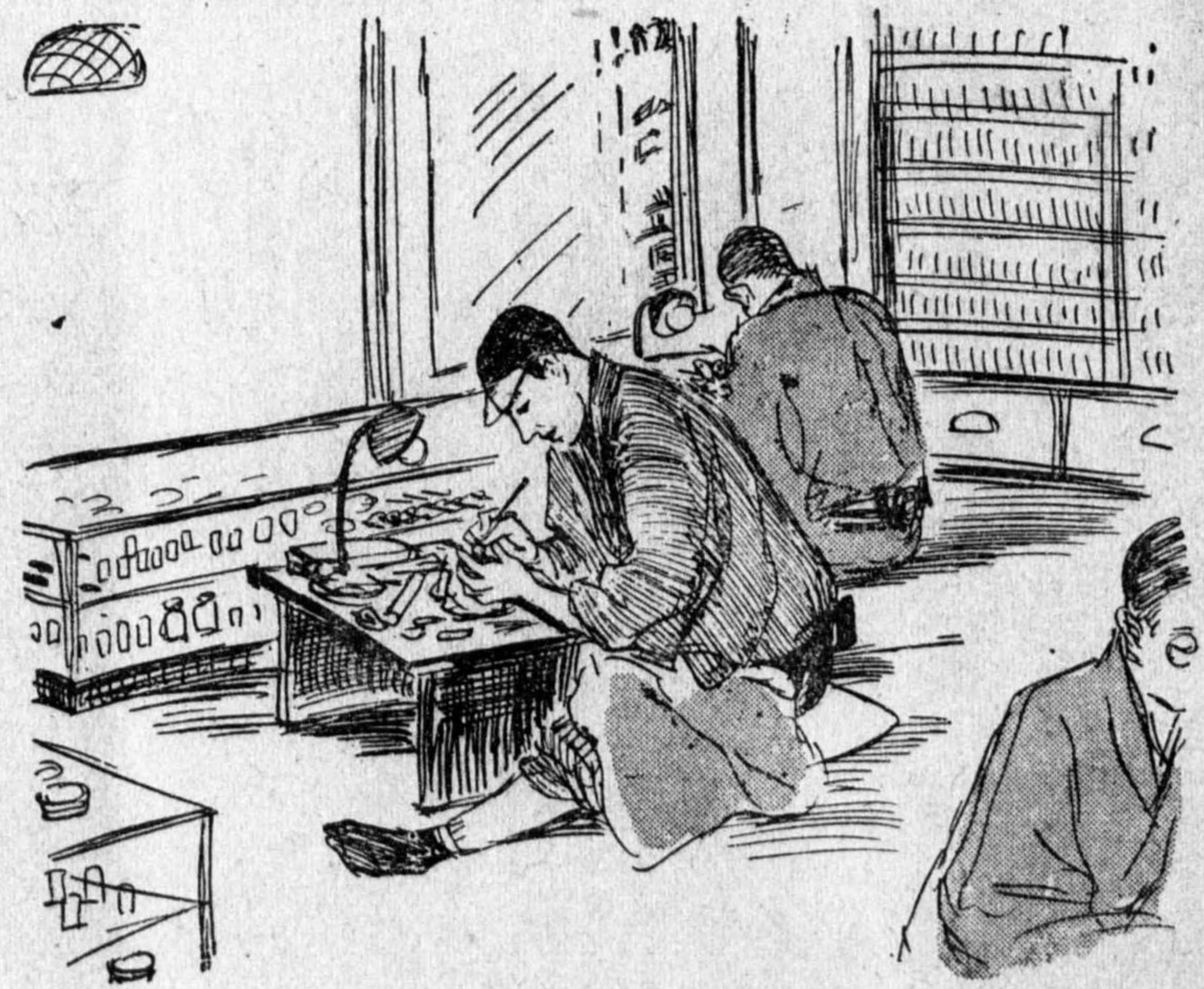
みつゝ、家運の挽回につとめてゐた。そのうちに、日露の風雲次第に急を告げ、明治三十七年二月遂に國交は斷絶した。この時、彼は早晩充員召集あるを期し一度出征すれば生還の期し難きを覺悟して、後に残りし父母弟妹が困らないやうにと、九谷焼の店を開いた。三十七年五月、待ちに待った召集令が下つた。彼は勇躍して入隊したが、残念ながら補充隊に残され、専ら補充兵の教育に任ずることゝなつた。同年八月軍曹に昇進、ひたすら出征の日を待つたが、なか／＼出動の命令が下らないのだ。彼はべん／＼として内地に残り、千載一遇の報國の機會を逸することが残念でたまらず、遂に血書を以て嘆願した。その甲斐あつて、十二月に漸く出征を許され、君國に報ずる時ぞ至ると、鬱勃たる勇心に燃えて征途に上り、乃木第三軍の麾下に投じたのである。旅順開城後、直ちに北上して、奉天會戦に参加、この時彼の從軍した左翼軍は、迅速神の如き攻撃を開始し、群がる敵を掃蕩しつゝ、三月二日には早くも奉天西方五里の地點まで進出したので

ある。その日、彼は飄臺子攻撃に際して、武運拙く敵弾を左脚に受け、涙を吞んで後退、野戦病院に收容せられた。左大腿部貫銃創兼骨折と診斷された。各地の病院を轉々して内地に送還せられ、ひたすら療養につとめた結果、漸く患部は全治したが、遂に跛となるを免れなかつた。同年十二月兵役免除となり、軍人恩給法第五項症による恩給を受けることゝなつて、歸郷したが、最早從前の九谷焼行商の仕事はつゞけて行かれなかつた。歩行不自由であるために、重い九谷焼を擔いで各地を行商して歩くことは出来ない。『困つたなア！』生きて行くべき道の選擇に困つて、思はず嘆聲をあげるのだつた。種々考へた末、印刷業を開業したのである。馴れぬ手先の仕事とて、最初の苦心は並大抵ではなかつた。一本の判を刻るのに一日をつぶしたりして、これでは商賣になるかと危ぶまれたが、不撓不屈、よく難關を突破して仕事に精勵した。その苦心は漸く酬いられ、傷痍軍人として世人の同情も集り、誠實確實の信用も博して、年と

共に發展し、今や、一人では手が廻りきれなくなつて、徒弟を雇入れる程になつた。かくて、營々として業に勵むこと三十年、現在にありては、家業めき／＼と發展し、歩兵第七聯隊や地方專賣局等の御用達として、従業員三名をおいて、益々發展しつゝある。

三

大正六年十一月、傷痍軍人並に遺族に對して、天皇陛下より御菓子料を賜ひ御慰問を辱ふした。彼は鴻恩の廣大なるに感泣した。そして如何にかしてこの皇恩に奉じ奉るべきかを考へた。思へば、日露戰役には、幾多の先輩や戰友が戰死した。それなのに、自分も同じく敵弾に當りながら、不具癩癩の身になつたとはいへ、幸ひにも生還した。この奇蹟を考へた時、彼は嚴肅なる使命を感じないでは居られなかつた。『さうだ！天が自分の命を召さなかつたのは、生殘つてあらん限り、國家社會のために餘生を捧げよとの思召があつたのだ。君恩の萬分の一なりとも報ぜよとの天意だ』



と、彼の心に強く響くものがあつた。願れば、君國は次第に發展への道を辿りつゝある。それに従つて國際關係はいよゝゝ複雑にいよゝゝ微妙になつてくる。この間にあつて、外國より辱しめを受けなないためには、完全なる國防線を築かねばならない。一國の國防を背負ふものは軍人だ。この軍人をして安心して軍務に服さしめるためには、戦時平時に拘らず、後顧の憂ひなからしめなければならぬ。そのためには一般社會に軍事思想の普及を計らなければならぬ。

考へて來ると、彼はちつとして居れなかつた。即ち同志と相謀つて金澤傷痍軍人會を起し、更に縣下の傷痍軍人を鳩合して石川縣傷痍軍人會と改稱し、常務理事となつて、多端なる草創の事務をとり、大正八年より同會の會長として現在に至つてゐる。更に彼は隣縣の福井富山兩縣の同志にもよびかけ、三陸三縣傷痍軍人聯合會を組織した。左に、彼が奉公の志を示す和歌數首をあげてみよう。

(各會員の赤心を勵すため)

戦ひの庭に立つこと出來ぬ身は
心で盡せ君の御ために

(一般の義勇奉公の念を奮起さすため)
忠と義はわが日の本の華なれば
いよゝゝ磨け大和心を

(獻身的覺悟)
降る雪も雨も霰もなにかせむ
君に捧げしこの身なりせば

(會員一同の協力一致を喜びて)
不具となり身の不自由も顧みず
御國を思ふ友ぞ嬉しき

(吾等が行動を疑ふ者に對して)
己が胸己が心にくらべてぞ
他人を疑ふことの愚さ

しまず盡力をついでてゐる。

彼が家庭においても温情濃な慈父である。家庭困窮の中に育てし長男は早くも海軍大學を卒業して少佐として軍籍にあり、長女も高女を経て他家に嫁し、次女も女學校を卒業して目下家事に従事してゐる。そして今年七十七歳になる老母に仕へつゝ一家團樂のうちに家業にいそしんでゐる。

彼は自分の來し方をふりかへつて、沁々とした調子でいふ。

『かうして一家團樂の中に暮せるのも、君恩溢るゝ日本國に生れしお蔭です。これを思ふと、私は更に駄馬に鞭打つて、身を捨て家を忘れても、國家のため誠忠の誠を致し、餘生を御奉公のために捧げたいと思ふのであります。』

彼が社會のため軍人のため自から率先して盡せし業績は餘りに多くして、一々これを列挙するいとまがないが、さきに挙げた外にその一部分を擧ぐれば――
大正十二年關東大震災の時、各被害者に對して慰問袋三千個を募つて、日本赤十字社石川縣支部を経て送附し、大正十三年時の 皇太子殿下御成婚奉祝の際には御慶事奉祝と 皇室尊崇の念を普及するため、兼六公園に五千圓を投じて花崗石三十尺餘の奉祝記念塔を建設した。
大正十四年の但馬地方の震災の時は、罹災者慰問のため金若干を送附し、時の兵庫縣知事平塚廣義閣下より感謝状を受けた。或ひは戦友遺族のうち、生活困難な者に會より慰問金を贈與し、或ひは大正十一年以來、先輩ならびに戦友遺族の生活安定のために、不自由な身をも厭はず運動を續ける等、席温るの暇もない程である。

彼は今年五十五歳だ、目下北陸三縣傷痍軍人聯合會總務帝國傷痍軍人會石川縣支部長、また全國印刷業組合副組合長をつとめ、その他の公共團體社會事業等に、骨身を惜

試練に勝ちあて

|| 強き意志と力て戦つた佐中萬藏氏 ||

本籍地	鳥取縣西伯郡御來屋町一九九
顔面貫銃創	左足脛部擦過傷
右足脛部貫銃創	(左眼視力)
右足運動	不十分)

明治十六年三月、佐中萬藏は鳥取縣西伯郡御來屋町に出生した。この御來屋は、元弘の忠臣名和長年公の史蹟として名があり、公の英靈を祭る別格官幣社名和神社の鎮座まします町である。後は山、中國一の秀峯伯耆大山の巍然たるあり、尾根つゞきは後醍醐帝を奉じて名和公が擧兵して船上山である。海上遙かには、天皇が行在遊ばされた隠岐の島が眺望のうちにある。一片の孤舟により、天皇が隠岐からのがれて着船し賜うた名和の港は、この御來屋の港であつた。

らせられ、畏くも宣戰の詔勅には「朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚頼シ 速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ 以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と仰せられた。佐中二等兵は詔勅を拜した時、胸に描いたのは帆船の紋章であつた。今こそ、光榮ある名和公の紋章を生かす時が到來したと考へ、勇躍して、滿洲へ出征した。

明治三十七年八月、黒木將軍の第一軍は既に、楡樹林子、様子嶺を占領し、奥將軍の第二軍、また海城、牛莊に進み、野津將軍の第四軍は柞木城を屠つた。各軍路を分つて、一舉遼陽を抜かんとするのであつた。時に敵は、鞍山站、安平、太子河、陽河の左岸に固い防禦陣を敷き、皇軍の到るを待ちかまへてゐたが、時あたかも、滿洲の雨期に入り霖雨なかなか上らず、目ざす遼陽を隔る數里の地に達したのは、八月二十四日であつた。滿洲軍總司令官大山大將は自ら軍を統率して、全軍活動をおこし、三方より遼陽に迫つた。我が勇壯な三軍は、二十四日敵の死守した首山堡を抜き、敵をいよく遼陽に追ひつめ、九月二日には、城南の敵を撃破し、四日には完全に遼陽を占領したが、敵の死

天皇御着船の御史蹟として、御腰懸の岩の尊き遺蹟も残つてゐる。

佐中が少年時代學んだ高等小學校は、當時は名和神社の社道に面してゐた。校門の出入りには、必ず生徒は元弘の忠臣の英靈に向つて帽子をとつて敬禮した。これは當小學校創立以來の美風で、朝夕忠臣の英靈に接し、船上を仰ぎ、隠岐島をのぞむことは、自ら皇道の精神に醒め、忠誠に胸を高鳴らしむる鏡のやうな教訓であつた。名和長年公が、後醍醐帝から、誠忠にめて賜つたと云ふ帆船の紋章を、そのまゝ小學校は紋章に頂き、帆船の紋章は誇らかに生徒の帽子にも輝いた。

小學校を卒へた彼は、家業の農に出精したが、彼が徴兵適齡にあたる頃は、時あたかも、日露の風雲は日に日に急を告げ、極東の形勢日に非なるを見て、大學教授七博士の主戰論や、國民同盟、對露同志の絶叫と相まつて國を擧げて戰爭氣分横溢の時であつた。彼は首尾よく検査に合格して、歩兵第四十聯隊に入營した。

明治三十七年二月十日 明治大帝は宣戰の詔勅を煥發あ

傷二萬五千、我にもまた死傷一萬七千五百三十九人と云ふ大激戦であつた。

遼陽へ遼陽へ、遼陽城頭に我一番に日章旗をかゝげんものと、無我夢中、戦ひの疲れさへも覺えなかつた佐中二等兵は、八月三十日未明の戦闘中、あつと思ふ間もなくその場にぶつ倒れた。我に還つた時は、僚軍は遠く嵐のやうに進撃してゐた。全身三ヶ所の銃創——左顔面貫銃創、右顔面貫銃創、左足脛部に擦過銃創、右足脛部に貫銃創——を受けて昏倒したのだ。

遼陽の陥落を目前にひかへて今斃れるとは...彼は齒をくひしばつて悔しがつたが、三ヶ所の手負ひでは、餘儀なくも後退して、野戦病院のベッドに身を横たへる他はなかつた。遼陽の陥落は野戦病院のベッドでできた。捷利の喜びよりも悲憤の涙が先に立つた。かくて、二週間ののち、彼は宇品に送還され、直に姫路の豫備病院に收容されることになつた。

明けて三十八年一月一日の旅順陥落、三月十五日、奉天入城、日本海大海戦大勝利と、號外の度毎にベッドに起き

直つて、陛下の萬歳を叫んだ。こえて七月にはいよいよ平和の曙光が見えて、ポーツマスに於て日露全權の講和談判が開始されんとして、小村全權はアメリカへ向けて出發した。講和會議の開始前、三十八年七月三十日、佐中二等兵は兵役免除となつて退院、本籍地なる鳥取縣西伯郡御來屋町に歸郷した。

左眼の視力と右足の運動不自由のために、彼は家業の農事を事としながらも、思ふ十分の一も働けないのを残念に思つた。これでは明治大帝の御製にある「國田守る」赤子の一人としての責任を果たすことはむづかしい。といつて、今急に鋤鍬を捨て、は、明日の生活にも困るのだ。彼は粉骨碎身、不自由な體に鞭打つて働いた。身に餘る勞役のために血の出るやうな苦しみに堪え、人並に仕事の出來ぬ残念さに悲憤の涙にむせび、彼は數年間血みどろ汗みどろになつて働いた。かくて數年、幸ひに良縁あつて妻を娶つたが一家の生計はいよいよ苦しくなるばかりだ。

『とても百姓では駄目だ！何とか道を拓かねば...』折から日韓併合のことがあつて、多くの野心家がこの新

版圖めざして續々と出かけた。

「狭い内地でござくと膝を突き合はしてゐては駄目だ。朝鮮には何か自分に適した仕事があるかもわからん」よし、行かう！朝鮮へ行つて一旗擧げるべく努力しよう——彼はさう決心した。そこで、明治四十四年三月、即ち日韓併合の翌年、彼は新天地に運命の開拓を描いて、約五十圓を所持して、單身、渡鮮した。當時、京城府古市町に居住した友人を頼り、同人の斡旋により、不自由な身ながら、名譽の負傷兵なる理解のもとに、朝鮮鐵道局保線區に勤務することゝなつた。

彼はこの時、はじめて新しき運命の前途に立ち、再び戰場に立つた男子の意氣と、鍛へられた軍人精神の確乎たる決意とをもつて、業ならずば再び故郷の土は踏むことをすまいと覺悟をした。大正二年、京元線劍佛浪驛に轉勤するや、既に一家の生計に對する自信を得て、直ちに郷里より妻を呼び寄せ、一家を構へ、やゝ生活の安定を見出した。しかし、天はどこまで無情なのか？どこまで彼を試練の焔で苦しめようとするのか？いくばくもなく、火災に



罹り、貯蓄せる約千圓の現金と、家財、道具残らず焼失する悲運に直面した。

而も、彼は明治三十七年滿洲の野に砲煙彈雨と戦つた辛苦を思ひ出しては、これ許りの悲運に意氣沮喪はしなかつ

た。倒れてのちやむ日本男子の意氣と、鍛へられた軍人魂から、彼は決然として、立ち上つた。

『よし天の試練に打負けるか、打負すか、たゞやるどころまでやらう！』

新しい運命の開拓を目ざして、再び京城に歸つた彼は、東亞煙草株式會社に入り、勤勞する傍ら、健氣な妻は生計を助けて美容術を開業して夫を助けた。

文字通りに寢食を忘れて、真正面から運命の開拓につとめた。彼が疲勞困憊の極に溜息をつく時、妻はやさしくいはりながら勵ました。妻が意氣消沈する時には、彼が力づけてやつた。互ひに慰め勵まし合ひつゝ努力した。幾度か天の酷しい試練に打克ちつづけた。かくして二十有一年、遂にあらゆる天の試練を完全に克服してしまつたのである。即ち、京城府本町四丁目家に構へ、貯蓄も相當に積り、いよいよ生活の安定を得、長男廿七歳は昨年三月、最高學府、京城大學醫學部を卒業し、次女二十二歳は、京城女子技藝學校を卒業して、家にあり、目下圓滿幸福なる家庭生活を恵まれてゐる。

純朴なる信念

|| 苦ありてこそ今は樂な志田清吉氏 ||

本籍地	新潟縣南蒲原郡加茂町大字狭口乙五一八地
負傷程度	左大腿壓挫傷ニヨリ膝關節以下切斷

ぐわらぐわらつ！といふ大きなひびきが聞えた。すわ！と二三名の水兵たちが走つて行つて見ると、どうした油断か間違ひか、砲彈の山が崩潰してゐて、そこには一人の下士——海軍二等兵曹志田清吉が、俯伏にぶつ倒れてもがきうめいてゐた。

——時は明治二十二年五月二十一日、武藏艦上の出來事である。

間髪を容れず、水兵たちは、兵曹を抱き起して醫務室へ運び込んだ。軍醫はズボンをまくつて見たが、忽ち、さつと顔を曇らせた。左大腿部に受けた壓挫傷は意外の重傷だつたのだ。

醫務室で應急の手當を受けて、兵曹は軍艦武藏から陸上の病院に移された。そして膝關節から下を切斷し義足を用ひて、どうにか歩行に差支へを生じない迄になつた。

そして、同年十二月十七日免官となり、郷里新潟縣南蒲原郡加茂町に歸つた。

『そんな體では野良仕事もむつかしからうし、何か小商賣でもはじめめるか、今からでも遅くはあるまい』

父は、息子の不自由な義足を痛ましげに見つめながら、さう言つたが、

『いや、私は矢張り百姓をやります。人並に働らけなかつたら、他人が十時間働くところを十五時間働きます。これしきの事で、先祖代々の家業を捨てたかありませんよ』

と、彼は決然としてさう答へたのだつた。免官後は、恩給二百五十圓（増加恩給五百二十八圓）を受けたから、それを資本に、小商賣でも始めようと思へば始められるのだつたが、そして、それは、彼にとつては樂なことにちがひなかつたが、彼はどうしても、家業を捨て、安易に赴く氣にはならなかつた。

その質朴な信念には、我子のことながら、父も打たれずにはゐなかつた。そして、

三

『さういふことなら...』

と、息子の決心に賛成したのだつた。

『清吉さんがな、××山の天頂で山仕事をしてゐたぞ』

毎夜の、若い衆の集り場所てさう言つたものがあつた。

『清吉さんて、志田の清吉さんか？』

と、一人が訊いた。

『うん』

『ばかなことを云ふな。あんな足で××山の天頂なんぞ』

に、どうして登れるもんか。俺たちだつて、彼處で山仕事をするなんて樂なことぢやないぢやないか』

『だつて、俺は現にこの眼で見えて來るんだから、仕方がなからう。タバコまで一緒に喫んで話をしたりなぞして來たんだから...』

『狐にでも化されたんぢやないか？』

『うむ。俺もはじめはぎよつとして、狐に化されてるのかも知れない、と、股のところをつねつてみたがね。やつぱり化されてゐるのではなかつた』

『へえ。ほんたうだとすれば、剛氣なもんだね』

と、狐説を主張したりした若い衆も、さう言つてかぶとを脱ぐのだつた。

『この間は、田の草取をしてゐるのを見てたまげてしまふたんだが、××山の頂上で山仕事とは又、慥々たまげたオヤヂだね』

別の一人が又口を出した。

『他人が十時間働くところは十五時間でも働く。他人に負けるのは嫌だ、人並の仕事だけはしなれば、百姓の本分』



が務まらんと言ふとつたよ』
『それで又、音齋かといふとさうでもないし、勤儉は勤儉だけれども、寄附金なぞといふと、真先に出してゐるからな』
『やつぱり、軍人精神で叩きこまれた人間はちがつたところがあるよ』
若い衆たちは、話しながら段々敬虔な氣持になつて行くのだつた。いつもは無格好に見える彼の義足も、何かしら、神聖なものやうに思はれるのだつた。

四

『五町歩の自作農！』
それが負傷後農業に従つて以來の目標だつた。一生の中に必ず土地五町歩を所有して自作農になつてみせるぞ！この目標に向つて彼は邁進した。その間の勞苦は我々の想像以上であらう。
現在彼は田地三段餘、畑一段八畝歩を有して、普通の自作農の生活をしてゐる。若い時の目標五町歩の自作農には

まだ遠いやうには見える。しかし彼は現金の貯蓄も相當の額に上り何時でも土地を買収できる用意がしてある。それ以上に彼には四男一女があるが、これがみなそれ／＼獨立して立派に自活してゐる。これこそ、土地の五町歩や十町歩にも勝る寶ではあるまいか？
彼は本年八十一歳であるが、矍鑠として壯者を凌ぐ壯健さで、今なほ作業に従事し、生業を勵むことを唯一の樂しみとし、未だに樂隠居をも望まず、營々として働いてゐる。
翁の生涯の如きは、一見平凡にも見えるけれども、さにあらず、負傷に屈せずして、幾多の不自由を忍びながら、自己の天職と信ずる農を捨てなかつたところに、翁の今日の眞面目がある。なまじ他の仕事に惑はされたとすれば、果して今日をなしたであらうか？
考へねばならない點である。

輝く半生

|| 新植民地で成功した毛利勝好氏 ||

本籍地	石川県石川郡山島村高寄新保一四五
程負傷	兩足拇指二本凍傷切斷

『有難い有難い。この分だともう一度戦地へ行つて名譽恢復が出来ろぞ』
 名古屋衛戍病院の廊下を、素足で、よたよたと歩き始めの子供のやうな足どりで、嬉しうに歩き廻つてゐるのは、毛利勝好一等兵であつた。
 時は明治二十八年日清戦役も終りに近く、日々新聞は、至る處日本軍の大勝を報じてゐる頃であつた。

威張つて故郷へ歸れるが、俺は残念乍ら凍傷だ。戦争へ行つて來ましたと大きな口が利かれないのが口惜しい』
 隣りのベツトに寝てゐる、戦友森山一等兵を羨しげに眺めながら、毛利一等兵は諦めかねて話かけるのであつた。
 『そんな事があるものか、砲彈の爲の負傷だらうと、凍傷だらうと、戦地で國家の爲に働いて來た事に二つはない。そんな事を苦に病むな。それよりも一日も早く快くなつて、お互ひに再び戦地へ出かけよう。至る處日本軍の大勝利だぞ』
 さう云つて、戦友森山一等兵は、毛利一等兵を慰めてくれた。
 さしもに重かつた毛利一等兵の凍傷も、兩足とも拇指外二本づゝ切斷したとけで、もう一ヶ月も治療すれば、退院出来るだらうと軍醫に云はれてゐた。
 今日久し振りに、看護兵の手を離れて歩いて見ると、幾分痛みはあるが、歩けぬ事はなかつた。
 『この分だともう一度戦地へ行ける』
 毛利一等兵は、子供のやうに喋いでゐた。

毛利一等兵は前年出征して、各所に轉戦、奮闘中、不幸にして、零下三十幾度と云ふ滿洲の寒氣の爲、凍傷に罹り、恨みをのんで後送され、名古屋衛戍病院に於て、兩足とも、拇指外二本の指を切斷し、治療中であつた。
 『榮ある軍人として出征しながら、これと云ふ手柄も立てず、せめて敵彈に當つて名譽の負傷でもする事か、凍傷で後送されたとあつては、親兄弟にも面目ない。故郷の人々へも顔向けが出来ぬ。まして、このまゝ除隊にでもなるやうな事になつたら不名譽の上もない。何とかしてもう一度戦地へ行き度い。思ふ存分に働いて、名譽の戦死か、名譽の負傷か、何方かなくては、自分として諦めがつかぬ。怨めしいのはこの凍傷だ』
 入院以來約一年の間、毛利一等兵は、明けても暮れても、その事許りを考へつづけてゐたのであつた。
 同じ病院で治療中の、小銃彈や、砲彈の破片に當つて負傷した戦友を見ると、毛利一等兵は自分のみが不甲斐なく思はれて、情なかつた。
 『おい森山君、君はいゝな名譽の負傷で、除隊になつても』

『毛利一等兵ではないか。まだ亂暴に歩き廻つてはいかんぞ』
 嬉しうに歩き廻つてゐる毛利一等兵の肩を叩いて、親み深く話かけたのは、軍醫であつた。
 『軍醫殿でありますか。見て下さい、おかげをもちまして、もう立派に歩けるやうになりました。この通りであります』
 毛利一等兵は元氣よく又歩き廻つて見せた。しかし、たどたどしい歩き振りであつた。
 『なる程歩けるね。しかし、まだ傷口が完全に癒つてゐないから無理をしてはいかん』
 『でも些つとも痛みはしません』
 その實、毛利一等兵は、痛みを耐へてゐるのであつた。
 『さうか、ではあと一ヶ月もしたら退院出来るだらう』
 さう云つて、軍醫が行きかけると、
 『待つて下さい軍醫殿、お願いがあります』

毛利一等兵は、軍醫の前に廻つて、不動の姿勢をとつた。

『お願いとは何だ』

『自分はもう完全に癒つてゐると思ふのであります。もう一度戦地へ行くやうな手続きを執つて貰ひ度ひのであります』

軍醫は、毛利一等兵の顔をしげ／＼と眺めた。毛利一等兵の顔には眞剣味が溢れてゐる。

『お願いと云ふのは再び戦地へやつて貰ひたいと云ふのか』

『左様であります』

『しかし、その傷では、再び戦地へ行く事は望めないよ』

『どうしてでありますか』

『不具者となつて、戦争は出来ないぢやないか』

『そ、そんな事はないと思ひます。自分は勿論片輪には違ひありませんが、足の指の三本や四本無くても戦争に差支へはないと思ひます。凍傷の爲に除隊にでもなるやうな事があつたら、自分は面目なくて生きて故郷へは歸れませんが、是非戦地へもう一度行けるやう、軍醫殿から手続きを

執つて下さい。名譽の戦死か負傷か、それでなくては、自分の出征を喜び勵まして見送つてくれた、親兄弟や、友人知己に對しても相済まんと思ふのであります』

誠實表に溢れて毛利一等兵の眼には、玉のやうな涙が光つてゐた。

癡ツと聞いてゐた軍醫も、思はず眼頭が熱くなるのを覺えて、ほろりとさせられた。

軍醫はおもむろに口を開いた。

『毛利一等兵、お前は偉い男だ。感心だ。その心掛けは天晴れだ。流石に日本帝國の軍人だ。しかし、凍傷の爲に除隊になるやうな事があつては、不名譽だと思ふてゐるのは間違ひだぞ。敵弾にあたつて倒れるも、凍傷の爲に不具者となつて除隊になるも、それは運命だ。決して不名譽ではない。恥でもない。國家の爲に働いた精神に於ては何等變るところはないのだ。凍傷だとして名譽の負傷だぞ』

『でもありませんが軍醫殿、是非とも、もう一度戦地へ行くけるやうお願い致します。戦友に劣らぬ働きがしたいのであります』

『よしよし。お前がさう云ふ立派な精神であると云ふ事は、小官から報告しておく。或ひはお前の希望が叶ふかも知れぬ。先づ何よりも先に、傷を完全に治す事だ』

毛利一等兵の、熱烈な心事を察して、軍醫は、その場の氣休めを云つて別れたのであつた。

『では何分よろしくお願い申します』

去り行く軍醫の後ろ姿に擧手の禮をして、毛利一等兵は幾分氣持ちを明るくした。

『軍醫殿もあゝ云つて下されたから、自分の望みは叶ふかも知れぬ。今度行つたら必ず人に劣らぬ戦功を立てずに置くものか』

毛利一等兵は、心の中で叫んだ。さうして傷が、完全に治癒する日を待つたのであつた。

三

その後一ヶ月餘りして、毛利一等兵の凍傷は完全に治つた。痛みも去つたので、唯一の願ひである再び戦地へ行く事を、再三再四懇願したが、これは勿論、軍規として許さ



る可き等のものでないの、毛利一等兵も、諦める外はなかつた。

残り惜しくも、退院と同時に除隊となり、下駄も草履も穿けない不具者となつて、郷里石川縣石川郡山島村へ歸つたのであつた。

間もなく周囲の人々の勧めに依り、妻を迎へ、家産を分けて貰つて分家し、一家の主人となつて獨立する事になつた。

しかし、不具の體では、入隊前の職業を續ける事は出来なかつた。毛利氏の家は、醤油醸造業を営むてゐたのである。

不具者にやれる職業を選ばねばならぬ。何が自分に適してゐるか？ 自分に出来る仕事は――

考へた結果、親兄弟、妻女とも相談して、金澤市に出て、金貨業を始め、これは不幸、大失敗に終つた。

世間一般、金貨業と云ふと、鬼のやうな高利貸を、想像するが、彼の金貨業は決して、そんな苛酷なものではなかつた。

ではあるが、今日に至るも夫婦の中になつた一ツの不足は子供の無い事である。

その爲にと云ふ譯でもあるまいが、各種の社會事業や、慈善事業には自から進んで、惜氣もなく多額の金を寄附し、社會的に多大の貢獻を續けてゐる。

斯かる毛利氏であるから、世間の風評が悪からう筈はない。町内の評判も良く、信用も厚く、現在では町總代、京城神社子總代、朝鮮神宮奉賛會委員、日本赤十字社有功章會員、大谷派本願寺准講頭、龍山東本願寺門徒總代等の肩書を有し、公共事業や宗教的事業に貢獻しつゝある。

なほ彼の妻女も夫に劣らず公共心に富み、愛國婦人會有功會員として愛國報恩の念を忘れず、努力をつゞけてゐる。

こゝに昨年末友人より贈られし詩二篇がある。
よく彼等夫妻の一生をいひ表はしてゐると思はれるので

つた。佛金貸しと云はれる程、利子は最低律、無抵當で貸すなどした爲、回収困難となつて、遂に失敗に終つた譯である。

「悪い事をして失敗した譯ではなし、悲觀する事はない。俺は屹度、今迄の損を取返して見せる。人間は七轉び八起だ。奮闘だ奮闘だ」

孜々奮闘の言葉を座右銘とした。
明治四十年、約一ヶ年分の生活費を携へ、大なる覺悟の下に朝鮮へ渡り、京城府龍山に居を構へ、質屋を開業したのであつた。

最初の間は餘り良い成績ではなかつたが、家業に對する熱心と、客に對して取扱ひの親切さは、果然、毛利質店をして隆盛に導いた。

働いたのは彼ばかりではなかつた。
彼の妻女、またよく不具の夫を扶けた。
渡鮮以來今日迄廿七年の間の營々奮闘の甲斐はやうやく實つた。今や、田、畑、山林等、約三百町歩の産を成し、外に多額の貯蓄もある。圓満なる家庭、何不自由なき生活

引用してみよう。

題贈好翁

亨神明惠六十年 常導後進施陰德
富積巨萬益豐饒 毛利邸上瑞雲漲

禮贊琴子夫人
定居漢陽三十年 枚舉無邊內助功
一門繁榮負夫人 毛利史上特筆人

如何に毛利夫妻が世人の人望を集め、尊敬の眼を以て仰がれてゐるかを窺ふことが出来るであらう。

人生行路の勇者

村治に精勵せる鈴木熊次郎氏

本籍地	埼玉縣南埼玉郡大相模村大字西
方	
負傷	右大腿貫通銃創(切斷)

鈴木熊次郎は埼玉縣南埼玉郡大相模村大字西方の出生である。明治二十二年十二月歩兵第三聯隊に入營、二十三年十一月三十日には上等兵を命ぜられ、二十五年十月三十日滿期除隊となつて歸郷した。

生家鈴木氏は、該地方の素封家として、古くから名望あり、父は村長として多年村治のために盡し、家兄は農に似し、三男の熊次郎も除隊後は兄を助けて、家業に出精してゐた。時に日露間の雲行は怪しくなつて来た。

即ち明治二十六年二月十日、明治大帝は第四議會の上

に編入された。時に師團長は山路元治中將、第一旅團長は乃木希典少將であつた。大山大將の第二軍にぞくし、宇品港を發し、聯合艦隊の周到な援護のもとに、遼東半島南方の花園河口に上陸、既にして、十月六日には各道の部隊並び進んで金州城の攻撃を開始してゐた。つゞいて土城子、水師營、旅順に向つて轉戦し、十一月二十日、旅順の背面椅子山砲臺攻撃の際、旅順陥落を明日にひかへて、右大腿部貫通銃創の名譽の負傷をうけ、即時、野戦病院に收容された。銃創は餘儀なく大腿上三分の一切斷されることゝなり、四十日野戦病院で看護をうけた上、三十八年一月一日、廣島衛戍病院に還送され、次で東京衛戍病院に移され程なく兵役免除を以て退院したのだつたが、一脚を切斷されたので、全治後は義足松葉杖に依つて歩行することになつた爾來四十年隻脚をもつて立ち、旅順に一足を置去つた由縁で、俳名を旅脚と號してゐる。

東洋平和の爲、祖國のため、足一本を滿洲にのこして歸つた彼は、懐しき故郷にもまた砲煙彈雨の中やうな、生活の戰場が彼の凱旋を待ちかまへてゐた。家業の農業が、

奏文に對し、和衷協同の詔勅を下し給ひ、

『國家國防ノ事ニ至テハ苟モ一日ヲ緩クスルトキハ或ハ百年ノ悔ヲ遺サム』

朕茲ニ内廷ノ費ヲ省キ六年ノ間毎歲三十萬圓ヲ下附シ又文武ノ官僚ニ命シ特別ノ情狀アルモノヲ除クノ外同年月其俸給十分ノ一ヲ納レ以テ戰艦費ノ補足ニ充テシム

朕ハ閣臣ト議會ニ倚リ立憲ノ機關トシ其各々權域ヲ慎ミ和協ノ道ニ由リ以テ

朕カ大事ヲ輔翼シ有終ノ美ヲ成サムコトヲ望ム』

東洋の風雲は、英明なる 明治大帝の、この詔勅にも窺へる通り、いよゝ急を上げて来る。明治二十七年五月、韓國における東學黨の蜂起に端を發し、清國の出兵より、遂に六月五日には、大島圭介が、軍艦八重山艦に乗じて海軍陸戰隊を率ゐて京城に向つたのを先發に、いよゝ、皇軍の韓國出兵となつた。かくて七月二十三日、豊島沖の海戰に日清戰鬪の幕は切つて落され、越えて八月一日宣戰の詔勅下り、九月十五日、既に第一軍の神速により平壤總攻撃が開始された。召集令下り、鈴木は即時原隊歩兵第三聯隊

大事に保たれてゐたなら何不自由ない素封家の筈の鈴木家は、家兄の代に至り、製絲工場を建設して盛に製絲業に従事したこと因を發して、不幸大損害を蒙り、家産は蕩盡田畑宅地家屋に至る迄、凡て人手に渡り果ては父祖重代の家を退轉するの止むなきに至つてゐた。東奔西走、彼は之を憂ひて、百方前後策を講じたのだつたが、大勢の趨く處ほどこそ術もなく、漸く債權者に懇請敷願して、僅に宅地の一部をあたへられ、先祖の位牌を安置するに足る丈の地域を残したのみだつた。彼は鈴木家には三男で、固より當面の義務を負ふべき立場ではなかつたが、生家の没落を見て、その再興に盡してこそ、男子の本分だと考へない譯には行かなかつた。此の再興の爲には、一度君國に捧げて、神佛の加護で滿洲から拾つて歸つた命と考へられる隻脚の一身は、更に犠牲となるとも意とするに足らずとして、此處に奮起再生の意氣に奮然と揮ひ立つた。

君のため國のため片足を失つた護國の勇士の、今のこの悲壯な決意は、勿論郷黨の胸に感激をもつて響かぬ譯はなかつた。彼を遇するに、村役場は書記の席をもつてした。



村役場

當時物價の低廉だった時代にもしろ月俸は六圓だった。勤務を熱心に精勵する傍ら、養鶏・養豚を副業とし、殆んど寢食を忘れて努力経営に當つたが、恩給年額五十九圓に、村役場の月俸を加算しても、月額拾圓餘りにすぎず、妻、

店長の信頼厚く、この間に於て、彼は勤儉力行大いに蓄財に務めた。加るに、恩給令の改正に因り二回の増額があつたりして、家計も甚だ有福となり、はじめて多年の勤勞が報ひられた。これに加へて、多年の宿願により、家屋を

弟、姪の四人暮しでは、困窮缺乏は言語に絶してゐた。家は暮はれ、食ふに食なく、着るに衣服なく、如何なる星の下に生れてこの悲境かと慨歎悲憤することがあつたが、當時、弟、四郎は早稻田専門學校に勉學中で、この學資さへも負擔し、貧困中に、此の負擔は難事の中の難事だつたが、妻と相談の上、これも決然と負擔の上、勉學を續けさせることにし、遂に同校を卒業せしめたのも、血の出るやうな、温い彼の犠牲だつた。

明治四十二年四月、親友秋山氏の斡旋により越ヶ谷日進銀行に月俸二十圓をもつて勤めることになつたが、爾來大正十一年六月に至る迄、十有四年間、着實恪勤、よくその成績を擧げ支

新築し、田畑を買戻し、家兄の蕩盡した家産はいよく挽回の喜びを見ることになつた。艱難誠に汝を玉にして、成功者の一人として近郷稱讚渴仰の的となつた。

各種公共事業に參與しては、獻身的に地方自治の指導者であり、現に村會議員、収入役、農會總代人、字委員、神社總代人、檀家總代、教育會議員、青年團顧問等、凡て彼の徳望の然らしむるところである。

不幸と云へば、窮乏の中から早稻田専門學校を卒へさせた弟、四郎氏の、早世であつたが、浦和師範學校に入學せしめた姪は現に郷里大相模村小學校に訓導勤務中である。

人生の幸薄かつた家兄は歿後後東京市にあつて、弟の自力更生による家運挽回を喜んでゐるが、弟熊次郎はなほこの不幸な兄に生活の資を供しつゝある。旅順背面攻撃の隻脚の勇士は、日常の生活に於ても隻脚よく苦闘に耐えて今日あるのは、正に人生行路の勇者とも云ふべきであらう。

頭部負傷者の部

新天地目指して

挫折數度更に屈せぬ飯塚馬五郎氏

本籍地	群馬縣多野郡三波川村甲一八四
三番地	
程負度傷	頭部臙頂部擦過銃創

群馬縣多野郡三波川村出身の飯塚馬五郎は、明治三十七年八月二十一日、歩兵第三聯隊附として旅順總攻撃に参加し、水師營附近の九十三高地で、頭部臙頂部に擦過銃創を受けた。そして定立病院より大連野戰病院を経て内地に送還され、廣島衛戍病院にしばらく入院したが、後、東京澁谷の陸軍豫備病院に收容され、更に熱海温泉に移された。この間約八十餘日。

傷癒えて退院すると同時に補充大隊勤務を命ぜられた。そして明治三十八年八月再び、出征して奉天より三十里ばかり奥地に守備隊として赴いた。休戦後、第十五師團は朝鮮守備を命ぜられて、同年十月二十五日朝鮮鎮南浦に上陸した。そして、其處で勤務についてゐるうち、翌三十九年三月、原隊歩兵第三聯隊に歸還し、四月一日除隊となつて、郷里、群馬縣多野郡三波川村に歸つた。臙頂部の擦過銃創はもう全く癒えたのか、痛まなかつた。

彼は出征前は郷里で農業に従事するかたはら藪の賣買業などをやつてゐたが思はしいこともなかつた。貧しい小作人兼小商人として一生をみじめに暮すのも情ないし、どこかへ一奮發してみたいとも考へたのであつたが、實行までにはいたらなかつた。朝鮮に守備隊として駐つてゐるうちに、この決心はすっかり固つた。

(朝鮮で一旗擧げてやらう)
 彼はさう思つたのだつた。
 朝鮮守備から歸つて除隊になると、間もなく彼は、
 今度は單身鎮南浦に渡つた。鎮南浦は守備隊時代の思出の
 土地だ、しかし志を立てて、單身乗り込んで来た鎮南浦
 は又守備隊の一員として見た時とはちがつて、一層強く彼
 の心を奮ひ立たせるのだつた。
 其處には、彼が守備隊時代に見知つてゐた内地人もあつ
 て彼の再度の渡鮮を喜び、何くれと世話を焼いた。
 しかし、年は若いし、土地の事情には何といつても暗い
 し、種々商賣をやつて見たが、どうも思はずしくなかつた。
 『事情に疎い土地で商賣をはじめるといふことは思つたよ
 りもむづかしいですな。どうも要領が分らなくて』
 土地馴れをしてゐる親しい間柄の内地人に、彼はさう言
 つたが、しかし、少しもへこたれてゐる様子は見えなかつ
 た。
 『今にもつと土地の事情に馴れて来ると、何をやつたらいい
 いか、自然と分つて来るものですよ』

『私もさう思つてやつてゐるのです』
 と、彼は答へた。
 かうして最後に——明治四十三年十月——生魚商をはじ
 めたが、これでどうやら生活の安定が出来た。そして、日
 毎に地盤を固めて行つたが、不運はどこまでも彼に付き纏
 った。
 それは、大正八年四月二十二日のことであつた。彼は頼
 母子講總代として、三百八十圓餘をあづかつておいたとこ
 ろ、その夜、盗難にあつてすつかり失つてしまつたのであ
 つた。
 別に貯金があるといふ程の裕福な身ではないし、彼は空
 になつた財布や、破られた窓を眺めながら、途方に暮れて
 しまつた。警察にも届けたが、盗られた金は歸つて来なか
 つた。
 しかし、悄氣てゐても仕様がなないので、彼は人々の諒解
 を得て、月賦償還の方法で、その金を辨償することにし
 て、やがて綺麗に返済して終つた。
 次は、大正十四年七月九日、魚市場で左眼を負傷した。



丁度、彼の傍に立つてゐた人が、魚の箱にかかつてゐる
 繩を腕で切るのと、それまでしやがんでゐた彼が立上るの
 とが一緒だつたので、その拍子に、その人の肘が、したた
 か彼の左眼を突いたのである。
 彼は直ちに平壤病院に入院して治療を受けたが、なか
 なか重態とのかつたので、わざわざ内地に歸つて、信
 用のある某病院に入院した。
 この治療期間は七ヶ月もかかつたが、その頃には、多年
 奮闘の結果、彼も可なり裕福になつたので、この七ヶ月も
 の入院に際しては、どうにか他人に厄介をかけるやうなこ
 とはなかつた。
 殆んど全快をして鎮南浦に歸つたのは大正十五年一月の
 ことであつた。
 『とんだ御災難で』
 とか、
 『それでもよくなつて結構でした』
 とか、人々は氣の毒さうに見舞を述べたが、
 『何アに、時々ひどい日に遇はんと勵みか出なくつていか』

◇ ◇ ◇
毎年十一月二十六日は、感謝日の集ひに劣らぬ、記念の
會が、一家揃つて催される。

十一月二十六日は、甚三郎君が旅順攻撃中、砲彈の破片
にあつて、名譽の負傷をなしたる記念日である。

當日も三陛下の御尊影が掲げられ、その下に、一通の手
紙を表装したる掛軸が掛けられるのであつた。

その手紙の掛軸は、彼の中隊長、故太田長俊氏が、當日
の激戦の模様を書き認めて、彼に與へた唯一の記念品なの
であつた。

當日は赤飯、御神酒、勳章、 皇后陛下より御下賜にな
つたシャツが飾られる。

家族一同が集つたところで、甚三郎君は戦争の話をして
聞かせるのであつた。

部下を愛する事、我が子の如くなりし、故太田中隊長の
思出話を語る時、彼の眼には懐舊の涙が溢れ流れるのだつ
た。

鳥島甚三郎君は石川縣石川郡二塚村字神合(元赤土村)

に生れた。職業は船乗りだつた。

明治三十年十二月一日、歩兵第七聯隊に入營、三十七年

五月七日充員召集、歩兵第七聯隊第六中隊編入。直ちに滿

洲へ出征、旅順攻撃に参加し、同年十一月二十六日、午前

一時、頭部に砲創を受けた。同三十九年一月十三日兵役免

除々隊となり歸郷した、元陸軍歩兵伍長である。

留守を守つてゐた両親は、彼の負傷して歸つた姿を見て

『よくぞ御國の爲に働いて來た。これで俺達も世間様へ肩

身が廣い』

と、泣いて喜んだ。そして、

『早く天子様へ御禮を申上てくれ』

彼の手を取るやうにして、奥の座敷へ連れて行つた。

床の前には 天皇 皇后 兩陛下の御尊影が掲げられ御

神酒が供へてあつた。

その御尊影こそ、鳥島一家で今日朝夕拜してゐるもので

去る明治三十年、彼が入隊當時特別大演習(大阪近傍)に

参加し、歸途大阪で買求めて來たものであつた。

「甚三郎、私達夫婦はナ、お前が出征すると同時に天子様
の御前に御神酒をお供へして、毎日、日本が今度の戦争に
勝つやうにと祈つてゐたんだよ」と語つて聞かせた。

彼の感激は一入であつた。

その後、天皇陛下より御菓子料下賜の恩命に浴した彼
はその金を無駄に使用せず 兩陛下及び 大正天皇(當時
皇太子殿下)の御尊影の表装を取替へる費用に使用したの
であつた。

病院に入院中 皇后陛下より下賜されたシャツは、その
後も三大節には着用してゐたが、この後再び斯くの如き光
榮に浴する事は思ひも及ばぬと気がつき、充分なる洗濯を
施し桐の箱に納め、家寶として、子々孫々に傳へる事にし
たものであつた。

◇ ◇ ◇
話は除隊當時に返る。
負傷に依る頭部の痛みは完全に治つてゐなかつたが、資
産がある譯でもなく、何時迄も遊んでゐられる身分でもな
いから、除隊後間もなく、以前の職業、船乗り稼業を始め

たが、負傷の故であらう、直ぐ酔ふやうになつて満足な仕
事は到底續けられなかつた。止むなく彼は小さい時から馴
れた稼業を止めなければならなかつた。俗に「河童の陸上
り」といふ。水の中では元氣な河童も、陸に上れば何も出
來ないことをいふのだ。彼はこの河童の陸上りだつた。

『どうしてこれから後を暮して行くか?』

職場を失つた彼にとつては大問題だつた。労働者の生活
は彼の體にはもう適しなかつた。種々考へた揚句、父母と
も相談して、僅かな資本で、薪炭業を開業した。しかし、

無經驗の爲と、資本金不足の故とでまんまと失敗に終つ
て、元も子も無くして了つた。

一時はがつかりした。けれども彼は思ひなほした。

『一度や二度失敗したからといつて氣を落してなるもの
か、旅順攻撃のことを思へ。難攻不落を誇つた旅順は決し
て一日では落ちなかつたのだ。失敗に失敗を重ねた揚句、

たゞ不撓不屈の精神によつて陥れたのではないか。あれだ、
あの意氣さへあれば何一つ成功せぬことがあるものか!』

しかし、この失敗によつて、彼の家の生活は極端に窮迫



してしまつた。両親の外に子供九人の大家族を抱へて、糊口にすら窮する状態にあつた。彼は妻や両親を慰め勵まし、一意家運の挽回につとめ、再び百万資金の調達に奔走

して、やうやく資金を得たのである。その甲斐ありて、捲土重来の意氣で始めた新炭業、並びに魚商は、次第に繁盛を來し、世間の信用は増し、恩給額は増加し、子供達も社會に出て働くやうになり、彼の生活は、漸く裕かになつて來た。それと共に町民の信望も得て町になつてはならぬ人となつた。しかし、往來の貧困時代を片時も忘れず、常に感謝の念を忘れず、報恩の意味をこめて、社會事業に盡瘁するところ甚大である。大正十四年には、皇太子殿下(今上陛下)御結婚奉祝記念塔建設に當り感謝状並に銀盃を附與せられ、魚商組合獎勵規定に依り賞状を受ける事三度。三男甚喜君現役除隊に際し、祝品を廢し當區内の貧民に白米を分配し、昭和六年九月石川縣知事より感謝状を受け、同、右の際小野慈善院へ生菓子を寄贈し謝状を受く。同町内の世話係り四ヶ年、その功によつて、感謝状二通、銀盃二個を贈られた。又、石川縣傷痍軍人會幹事八ヶ年、幹事長八ヶ年、現在副會長である。

蟻の如くに

十年一日の如く働ける河島彌氏

本籍地 千葉縣山武郡松尾町八田二千三十八番地
程負傷 頭部骨傷貫通銃創

明治三十七年九月初旬、征露の勇士を滿載した運送船丹波丸は、玄海灘の荒浪を蹴立て、一路ダルニー港(大連)めざして急いでゐた。

『あつ、あそこに帆柱みたいなのが見えるのは何だ!』
戦友の一人が叫んだ。あたりにある者がみな窓に集つた。なる程、海の真中に二本の帆柱がぬつと突き出して、雪のやうに碎ける飛沫をあびてゐる。
『あれは、御存知でせうが、去る六月十五日敵艦のために撃沈された常陸丸の帆柱ですよ!』

ボーイの説明をきいた時、一同は思はず肅然とし、襟を正さざるを得なかつた。空しく海底の藻屑を消えた六百餘名の無念の程を察すれば、涙なき能はざるではないか。

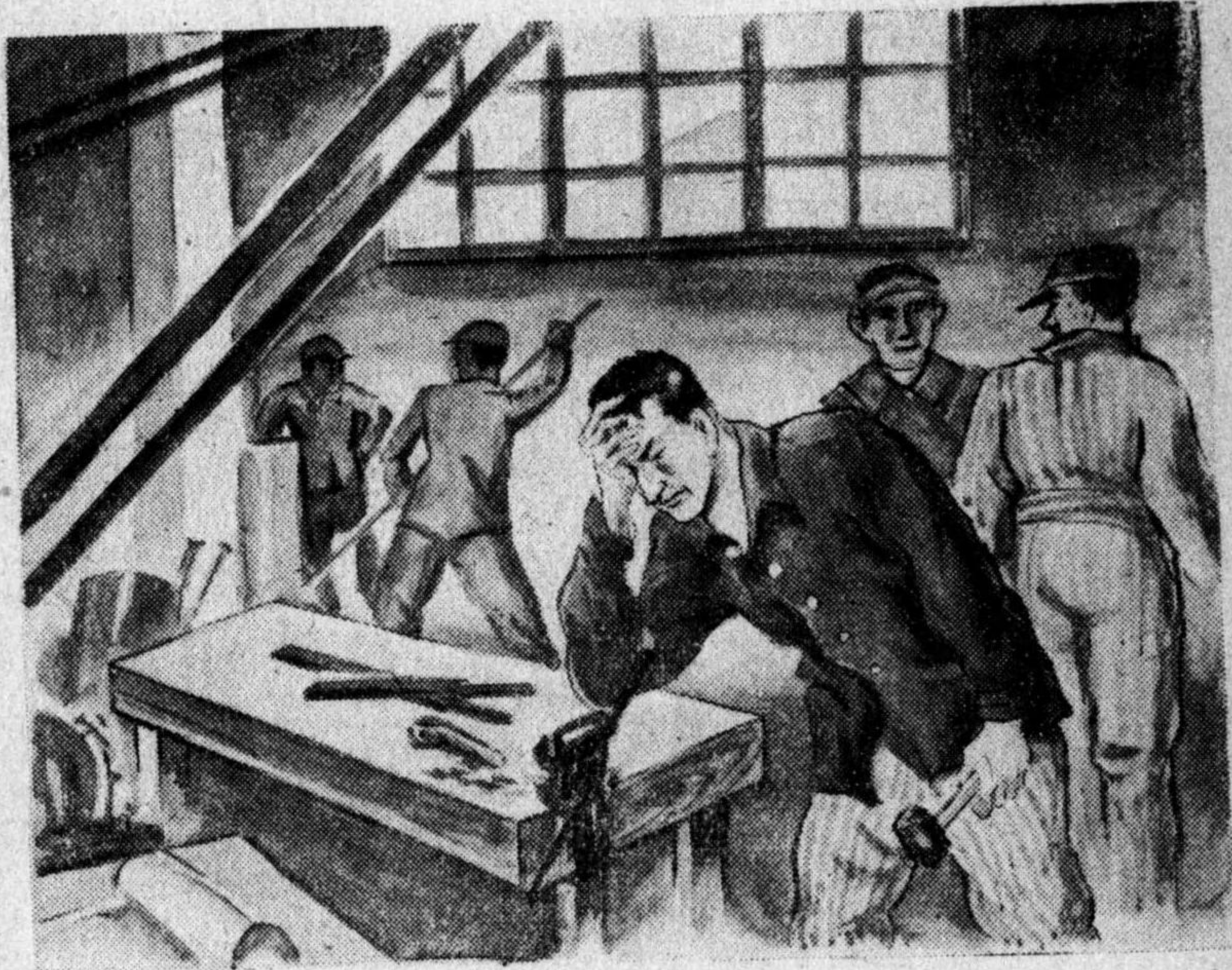
『畜生、この仇はきつと報じてやるぞ!』
誰か涙聲で叫んだ。

『さうだ、この恨みは晴してみせる』

『安心して海底に眠つてくれ』

期せずして異口同音悲憤の聲が揚つた。この中に、わが河島彌一等兵もゐるのである。

彼は千葉縣山武郡松尾村出身で、明治三十六年十二月一日歩兵第二聯隊に入營した。明れば三十七年二月十日、果然日露戦役の幕は切つて落された。即ち、三月六日動員下命、同九日補充大隊に轉入、空しく鳴る腕を抑へて時機を待つこと五ヶ月、遂に時を得て同年八月三十日衛戍地出發九月一日丹波丸に乗じて宇品港を出帆して征地向つた。ダルニー港(大連)に着いたのが九月五日、船路の疲れを慰める暇もなく、夜闇に乗じて泥汽車にて戦線近くに到着、照魔鏡のごとく照らす敵の探海燈の隙をみて、野戦歩



た。氣味の悪い感觸と共に血糊が、べつとり掌を染めた。
 『残念だ！』
 彼は勇氣を奮ひおこして、前進をしつづけようとした。しかし出血のために、その氣力もない。このまゝ放つておけば、出血のために死ぬばかりだ。彼は勇氣を鼓して銃を杖に後退しはじめた。ともすれば、目の先がぐらくぐらくらんだ。漸くの思ひで第一野戦病院にたどりついた。
 『お前も餘程の運強い奴だ。うまく急所をはづして射られたもんだな』
 軍醫が冗談まじりに言った。頭部骨傷貫通銃創と診断され、應急の手當をうけて第二病院に送られた。滾々として沸く出血のために人事不省に陥つた。そして再び意識をとり戻すまでの八日間は、生死の間を彷徨してゐたのである。その時、看護人がこさへてくれた卵のお粥をすつた時の旨さは、未だに忘れることが出来ない。同病院に十三日程ある中に漸く幾分氣力も恢復したので、ダルニー病院に送られ、こゝで二十日程治療を受けて廣島病院に送られた。更に二十日を経て東京氷川分院に送られ、手篤き治

兵第二聯隊に馳せ参じた。時に第一回の總攻撃は既に終つて、着々第二回の總攻撃の準備をすゝめてゐた時だ。
 九月十九日午後一時を期し、第二回の總攻撃が開始された。河島彌一等兵はクロバトキン砲臺の攻撃に従ひ、二十日これを占領して初陣の功名をあげた。十月二十六日、第三回の總攻撃の命が下された。彼の屬する隊は松樹山攻撃に向つた。忠勇無双の我が軍は萬死をも恐れず、肉弾となつて突撃した。しかし、さすがは名にし負ふ堅壘、敵は銃砲をつるべ落しに射ちかけて一步も近づけまいとする。我が軍は多大の犠牲を拂つて、辛うじて松樹山の外岸に達することが出来た。その後、幾度か手を變へ品を變へての決死的攻撃がくりかへされたが、徒らに味方の損傷を招くのみだつた。
 こゝに一策はめぐらされ、敵砲臺前より、トンネル同様の坑道を掘りすゝめ、突撃路の開鑿にとりかかつた。
 河島彌一等兵は工兵不足を補ふため選ばれてこの難事に従つた。夜の目も眠らぬ工事がつゞけられ、略豫定の成果を得たので、十一月十四日、決死隊を以て突撃を開始され

ることゝなつた。彼は率先してこの決死隊に馳せ参じた。決死の勇士は各自白襪を十字に絞なし、突撃に移つたが、失敗に終つた。
 かくて、十一月二十六日、第四回の總攻撃の命令が下つた。主として松樹山以東の砲臺に向つて猛撃が加へられた。しかし、敵壘はゆるぎだにしない。こゝに又しても決死隊が募られ、肉弾を以て砲臺を奪取せんと悲壯な計畫がたてられた。河島彌一等兵は又してもこの決死隊に加はつた。十一月二十八日、突撃の命令が下つた。一隊は縦隊となつて坑道より砲臺外濠の底に出て、砲臺めざして登攀をこゝろみる。このあたりの土は、ばら／＼とした脆い土で、何等手懸りが無い。戦友の肩から肩へと足をかけて登るより外ない。
 『さあ、もう一息だぞ！』
 河島彌一等兵は戦友の肩からグツと手をのばして砲臺に這ひ上らうとした。その瞬間である。彼の體は翻筋斗打つて、大地に投げ出された。敵の繰り出す機關砲のために、頭部をやられたのだ。ふと氣がついて、彼は手を頭にやつ

療を受けることゝなつた。
その間、畏くも 天皇陛下より御菓子料を御下賜され、
後 皇后陛下には、親しく御見舞に行啓遊され御菓子を賜
つた。この廣大無邊なる 聖恩に對して、彼はたゞ感涙に
むせんだのであつた。

※ ※ ※

一月ほど経つ中に、経過もよくなり、一ヶ月間の歸郷療
養を許され、久方ぶりに父母の顔をみた時の喜びは、また
格別であつた。父母の膝下にあつて、愛に充ちた看護の甲
斐あつてか、一ヶ月後補充大隊第四中隊に歸つた時には、
大分元氣になつてゐた。中隊長の從卒として軍務に精勵し
てゐたが、又しても具合がよくない。頭痛と痲痺とに苦し
められたので、再び衛戍病院に入院し、やがて歸郷療
養を命ぜられた。

『何とか元通りの體になつて、拾つた命を御國のために捧
げたい』

一ヶ月の間専念に療養したがはかばかしくなく、歸隊と
共に又しても入院せねばならなかつた。遂に負傷のため軍

務に堪えずとて、豫後備免除を命ぜられた時の無念は、筆
舌に表はすことは出来ない。
郷里に歸つてみれば、父母が汗みどろになつて百姓仕事
に精出してゐるのを見て、安閑としては居れなかつた。彼
は止められるのもきかず、畑に出て農事にいそしんだ。し
かし彼の今の體にとつて、百姓は樂な労働ではなかつた。
夏の炎天下にあつては割れるやうな頭痛に苦しませられ、冬
にありては痲痺を伴つた頭痛に悩まされる。それでも三年
間は堪え忍んでみたが、どうしても百姓には不向であるこ
とが痛感されて來た。

『これではとても將來百姓で身を立てることは六ヶ敷い。
今の中に何とか身の振り方を考へなければ...』

といつても、田舎では仲々職もない。東京に出よう、東
京なら職もあるだらう...さう決心して、結婚して間も
ない妻と共に上京した。幸ひに知人の好意ある推輓によ
つて、砲兵工廠の職工の口にあつたのは、明治四十一年
だつた。

慣れない仕事とて、初めの中はかなり苦勞した。それに

時々は頭部の負傷個所の疼痛のために、呆然自失、半ば意
識を失ひかけたりした。その度に自から鞭打つては、心
を上げました。

その中に長女が生れる。彼は父としての責任の重さを感じ
た。

『俺がもし今倒れたら、妻や娘はどうなる』

さう考へると、今日未だに消えぬ頭痛と痲痺の苦痛と闘
ひつゝ、二十餘年労働に従事した。

不幸にして兵役免除となり、銃を取つて御國につくす機
會は失つた。しかし、かうして軍需工場にあつて働くこと
が、彼の残念さを幾分でも柔らげてくれた。この仕事こそ
自分が果せなかつた義務を完うすべき仕事だ。さういつた
勵みから、十年一日、まるで蟻の働くがごとく、彼は徹頭
徹尾軍人精神の下に職務に精勵してゐる。

身にあまる大きな野心や希望もおこさない。飢ゑること
なく一日々々を送ることの出来るのを心から感謝しつゝ、
質素を旨とし、彼は傷痍軍人の名に辱しからぬ餘生奉公に
つとめてゐる。

子供は三人でみな娘であるが、長女は既に他家に嫁ぎ、
近く二人目の孫が生れようとしてゐる。次女三女共に健や
かに成育しつゝある。これから、彼、河島彌の半生の苦闘
が、樂の實を結ぶのであらう。

因に彼は、日露戦役に於ける勳功により、明治三十九年
四月一日附を以て、勳八等白色桐葉章を下賜されてゐ
る。

片眼のお巡りさん——それは熊谷警察署の會計係、鍛冶田市長といふ巡查部長である。

鍛冶田部長の圓滿な人格と、眞心から發する徳行の感化は、斯うしてひとりあどけない兒童達に深く滲みこんでゐるのみならず、一般市民の上にも及び、兎角必要以上に感めしい感じを興へる警官の中では、珍らしく暖い人情家として、熊谷市の多くの人の尊敬をかち得てゐるのであつた。いや、そればかりではない。鍛冶田部長は、署内きつての信望家である。殊に下僚の人々から受けがよかつた。

「實に思ひやりの深い人だ」

「義理人情に厚く、謙遜で、それでゐて、ちやんと犯す可からざる威厳を何處かに備へてゐるのだから、矢張り日露戦争の勇士は違つたものだ」

彼等はそんな風に噂し合つた。

彼等の噂の通り、鍛冶田部長は日露戦役の勇士であつた。慘ましく潰れてゐる右眼こそは、鍛冶田部長の往年の輝しい武勳を物語るものである。併し、この負傷の爲に、彼は可成り苦しんで來た。さうした過去の苦勞が身に滲みて居

ればこそ、今の様な渾然たる如き人格も出來、又下僚や、民衆や、兒童等に對する、暖い思ひやりも生れて來たのであらう。

二

鍛冶田市長は、埼玉縣入間郡大家村大字厚川の生れて、家が餘り豊かになつたから、農家の日備になつたり、機道具職をやつたり、又銃獵で生計を立てたこともあつた。彼は明治二十八年十二月高崎歩兵第十五聯隊へ入隊し、現役三年中二ケ年は臺灣守備に勤務し、除隊となつて歸郷した。彼は將來のことを考へた時、身は軍籍にある故、一朝事有る場合は必ず召集せられる。その場合、何時でもこれに應じられるためには、警察官となつてゐた方がよいと考へた。そこで三十五年募集に應じて警察官となり、精勵格勤中偶々三十七年日露戦争勃發と共に後備として充員召集せられ、旅順攻圍戦に参加したのであつた。

二〇三高地——日露戦史をひもどく時、日本人の誰しもがその名のひびきに血腥い戦慄と憤怒と悲涙を感ずるであ

らう。突撃につぐ突撃、屍は累々山をなし、鮮血は流れて河となつたあの壯烈比類なき激戦。

その二〇三高地奪取戦に於て、我が鍛冶田市長は名譽の負傷を受けたのであつた。右眼爆傷、背部貫通銃創、上膊擦過銃創、の三箇所の傷である。

無念の涙を呑み乍ら、野戦病院に運び込まれ、次で内地に後送される運命となつた。そして三十八年の一月、東京豫備病院に於て治療中、遂に右眼は失明してしまつた。

だが彼は、己れの失明を嘆くよりも、永久に歸らぬ幾多の戦友達の儂なかりし武運に泣きつつ、今はひたすらに、日本の勝利の一日も速かならむことを祈るばかりであつた。

そして遂に、日本は三月十日、奉天戦に大捷を博し、彼の一眼を奪ひ、彼の戦友を殺した露軍は、到頭日章旗の前にひれ伏したのだ。

同時に彼は兵役を免除されて歸郷し、片眼の不自由をも顧みず、出征前の巡查に復職した。軍隊精神を骨の髄まで叩きこまれ、彈雨の下をくぐつて



来たゞけに、彼は、志操堅固、膽力又人に勝れ、その勤務ぶり一頭地をぬいてゐた。恪勤精勵、身を持する事頗る嚴で、遺憾なく軍人魂を發揮し、同僚からも、上司からも忽ち重んぜられる様になつたのだ。

唯何事も忍耐、勤勉——彼の信條はその四字であり、而してそれをよく實生活の上に守り續けた。平凡な心構へではあるが、實踐の上に於ては、最も難しい態度として、彼に學ばねばならない點はそこにあるのだ。

これの後から歩いて来る若い人達に、しかと植ゑつけてやることを忘れなかつた。

三

斯くの如くして、右眼失明の打撃に屈せず、よく己れを知つて世に處するの術を定め、一路邁進の軍隊精神を實社會に生かした鍛冶田市松氏は、勤続滿三十年といふ長日月の記録を残して、昭和七年警察官を退職したが、その恩給は、免除恩給(軍人)と併せて、年額千二百圓に上つてゐる。

だから退職すると同時に、熊谷市に立派な自宅を新築することが出来たし、家族は片手間に小賣商賣を始めたので、その方からも多少の収入があり、生計は極めて豊かである。

遠大の計畫

植林に成功せし中尾卯三郎氏

本籍地	福岡縣八女郡邊春村大字下邊春
二四五五	
負傷程度	右眼失明

現役を終へて後、中尾卯三郎氏は福岡縣八女郡邊春村なる家にあつて、ひたすら家業に従ひ、朝早くから鋤を擔いで田畑に出て農耕にいそしんでゐた。

その頃から、既に日露國交の上には暗雲が覆ひ、大雷雨の近きを豫想させたが、明治三十七年に至つて、果然紫電一閃沛然として大雨驟る。日露の開戦だ！彼の許にも赤紙の召集令が配られ、直ちに歩兵第二十四聯隊第十二中隊に編入されて、黒木大將の率ゆる第一軍に

従つて出征した。

鎮南浦に上陸してより、轉戦また轉戦、第一軍は次第に敵を北方に追ひつめて行つた。九連城も陥ちた、鳳凰城も抜いた、遼陽の戦にも勝つた、沙河會戦にも敵を撃退した。追ひつめられた敵軍は「奉天以北に退却すべからず」との嚴命を受け、何とあつても奉天を死守せねばならぬと、東は清河城から西は遼河に至る蜿蜒四十里の間、大體沙河北岸に陣地を構へて對陣する。

これに對する我が軍は、全軍こぞつて、この一舉に敵の息の根を止めてくれんと準備をさく／＼怠りなく、決死の意氣もの凄く進撃を開始した。

果然、そこには壯烈なる血戦が展開した。しかし、雲霞の如き大軍も、鐵の如き城壁も、そして雨のごとき彈丸も、我が忠勇無双の將兵の前には、何等の效を奏しなかつた。二旬にも足りぬ攻撃に、敵は早くも沙河北岸の戦線を支へかね、三月十日の我軍の猛撃に、奉天はひとたまりもなく潰え、堰の切れたるが如くに、どツとばかりに敗走し去つた。

今まで幾度かの戦ひに、幸運にもかすり傷一つ蒙らなかつた彼も、この日の戦闘に敵弾を右眼と中指に受けた。直に野戦病院に收容されて治療を受けたが、遂に右眼は失明してしまつたのであつた。

『せめて、入城式をみてから斃れたかつた』
そんな怒も出たが、その日まで無事に彈雨の間をくぐりぬけ、かすり傷一つ受けなかつた天祐を思ふと、何かしら偉大なる者に向つて感謝したい氣持で一杯だつた。ことに病院に横たはつてゐる戦友をみると、みな自分よりもひどい負傷を蒙つてゐる。その苦しい姿をみると、彼は戦友達に申譯ないやうな氣さへするのだつた。

除隊後故郷に歸つたが、俄片目の生活は、なにかにつけて不便だつた。久しぶりに仰ぐ故山も、今までとは異なり、妙に平べつたくに見えた。なごやかな起伏が平面的に見えて、何かかう、衝立の繪を見てるやうにさへ思はれた。眼界がひどく狭められて、道を歩いてゐても右の方から來る人には氣着かなかつたりした。

『卯三郎さん、俄片目ぢや不自由でせうなア』



慰め顔にいつてくれる人もあつたが、彼はこれ位のこと
で不自由がつたんでは、すまないやうな氣がした。

『いえ、これ位で歸れて有難いごとでございます』
さう答へるのだつた。考へてみると、『よくあの時死ななかつたなア』と思議に思へる場合が幾度もあつた。彼の右眼の負傷にしてからがさうだ。もし彈丸が貫通したとしたら、彼の命はない譯だ。それを考へると片目を失つた位はなんでもない。戦友の中戦死を遂げた者も少くない、負傷した者も少くない。しかも負傷者の中では、片手を失つた者もあるし、片足を失つた者もある。それを考へると、彼は天祐といふことを考へないでは居れなかつた。更に考へて行くと、僅かに片目だけを犠牲にした自分の責任を考へさせられた。戦場で仕殘した仕事を、今後仕遂げねばならないといふ義務を感じた。

彼は不自由を顧みず、従來の農業をつゞけて行くことにした。生れ落ちると直ぐから、土の香を嗅いで育つた彼だ。今更土を離れたのでは、河童が陸に上つたも同然だ。地道に農業に精出すことが、彼にとつては唯一の奉公とし

か思へなかつた。

朝早くから晩くまで、倦まず撻まず鋤鍬と共に働いた。そして、彼の熱心な研究心は、普通農事だけでは事足りなかつた。山地を利用して何か収入の道を講ずることに専念しはじめた。その結果思ひついたのは孟宗竹林と栗の植林である。

彼は農事の餘暇をみては、竹林と栗の植林作業に熱中した。

『卯三郎さんも物好きな、竹を植ゑてどうする積りだらう』

『あんな小さな栗の木を植ゑてみたところで、實がなるのは何時のことやら...』

彼の遠大な計畫を知らない者は、彼を物好きの一語で片付けてしまつた。一年二年——なるほど結果は物好きの仕事としか思へなかつた。四年五年と経つ——『おや、随分立派な竹林が出来たなア』とか『お、これは見事な栗の木だわい』とかいふ感嘆の聲が洩れるやうになつた。

二十年——それは非常に長いやうに聞える。しかし、二

十年といふ年月は、暮してみれば夢の如きものである。あれから既に二十餘年が過ぎた。初めは貧弱だった竹林も、いまや見上げるやう立派なものになった。日本人にとつては、竹は缺くべからざるものだ。

一本の箸を作るにも、箒を拵へるにも、竹がなくては困る。それに使ふ竹は孟宗竹である。

彼が長年月かゝつて丹青した竹林も、どうやら竹材として賣れるやうになつた。

二十年前では、何時になつたら實がなるかと思はれた栗林も、今では亭々として延び、枝をひろげて、秋毎に大きな栗の實が、枝もたはゝに生つた。

『中尾さんは偉いな』

『物事に成功する人の目のつけどころは違ふわい』

二十餘年前、彼が營々として、不毛の山地に孟宗竹や栗を植林してゐる様をみて笑つた人が、今では羨しさに青々と繁り、亭々として延びた竹林や栗林を仰ぐのである。『人の氣づかぬところに幸運は轉がつてゐる』——見事な

成果をあげた彼の事業をふりかへる時、さういつた感じを強うするではないか。

その間、彼は村民の推挙拒み難く、大正十四年より昭和七年までの八ヶ年(二期)村會議員として村治に參與し、村の繁榮のために盡瘁した。その功績によつて、昭和八年四月には、邊春村より感謝状と木盃一組を授與せられたのである。

しかも、謙遜な彼はいふ。

『自分は平凡に農業に従事して來たゞけて、何も他人の鑑となるやうな苦心も成功も致さず恥しく思ひます。自分の一生は平凡々たるもので、たゞ地道に働いたといふだけです』

平凡な生活——そこに我々は、深い意義を見出すのである。

地に生くる人

|| 優良小作農と仰がれる中澤傳之助氏 ||

本籍地	宮城縣伊具郡丸森町宇田町北六十八番地
程負度傷	右眼盲

雲雀が高く空に轉つてゐる。

桃の花が、白壁の土藏の蔭に咲いてゐる。

畔では子供たちが土筆を摘み、目高をすくひ、蝶を追つてゐる。空は水繪具を塗つたやう、一點の雲もない。

中澤老人は縁に腰を下ろして、日向ぼっこをしてゐた。

ぼか／＼と背中が暖かい。老人は如何にも幸福さうである。と、垣根の外に人の足音がした。

『おぢいさんゐるなさるかいかい?』

『おう、仁さんかい、珍らしいな、まあこつちへお出てよ、随分いゝお天氣ぢやな』

仁さんと呼ばれた人は、にこ／＼して這入つて來た。

『傳さんは何うなかつたかい?』

と、老人のそばに腰をかけた仁さんはいつた。

『今日はな、とめよも一緒に子供たちを連れて畑に出てるがな』

『ほう、よく稼がつしやるのう』

『なあに、子供たちがゐるんぢや仕事にもなるまいが、日曜日だからのう』

『おぢいさんはいゝ子供を持つて仕合せぢやなあ』

仁さんは煙草を出して、すば／＼とすひ始めた。煙が鼻から口から流れ、甘さうで、ゆらく／＼と陽の光りの中にとけ込んで行つた。老人は仁さんの煙草の煙を追つて、仁さんの横顔を見ながら話し出した。

『ほんとに、わしは仕合せものぢやよ。もう七十になるがのう、傳はよく働いてくれるし、それに何より稼のとめよ

がよくしてくれるからのう。傳より嫁がいゝからかもわからんよ。とめよはわしに、何時も、お父つあん、永生きして下さいよねつて、そればかりいつてくれるんでね。わしは涙がこぼれるほど嬉しいよ』

『ゆんべも——おちいさんも知つてゐるだらうあの太助さんと福市さんと話し合つたんだがね、そりやとめよさんがしつかりものには違ひないが、傳さんが旅順でさ、負傷して歸つて來てからの働きぶりといやあ、畑の中で戦争してゐるみたいだつて、朝は人一倍に早いし、夜はみんなが歸つた後まで居残つて働いてゐるんだもの、それでけち／＼するぢやなし、頭は低いし、人の世話といや一番に馳けて來るし、日本中の若いものが傳さんを見習つたら、小作爭議なんかも起る道理がなくなるし、地主だつて反對に割引いてくれることになるつて、わしもそりやほんただと思つたよ。不平も不満もなく、傳さんのやうに一生懸命にたゞだど有難い／＼で働いてゐるのをみると、誰だつて感心しないわけにやいかなからね』

涙がこぼれるからのう、旅順から歸つて來た時の傳の姿を見た外にやあ、これから一體何うなるかと思つたよ。仁さんもよう御存じぢやらうがな、この右の眼玉が全くなかつたからのう。そりやお國のために一身を捧げたんぢやし、戦死なされた人も澤山あるこつたし、少しも恨みがましい氣にはなれなかつたもんだがのう、いや／＼かういふことをいふのさへ罰當りになるよ。あの時の町の人々の心盡しに、傳は生きて歸つたのが恥かしいつて始終いつてゐたがわしは傳の心持がよわかつてゐたよ。自分たちのことを考へるよりも、戦死なされた方々の遺族のことを思はなくちや勿體ないとな。さう思ふと、傳もわしも生きて再び會へたのだから、この世の中で一等幸福者ぢやといふ氣がしたよ。傳は生きて歸つたのだから、一生懸命に働いて、さうしてお國のため御奉公しなくちやあ、死んだ戦友に申譯がないつて……』

何時となく老人の聲はしめり、眼はうるみを帯びてゐた。『おちいさん、さういふ決心はなかく出來ないものだよ、普通のものはとかく自分の體が少しでも悪いと人を恨むし

世を果敢なむからのう。傳さんの心掛がいゝからけふ日は安樂になつたといふもので、太助さんも福市さんもいつてゐるが、傳さんは人の模範だよ、太助さんたちばかりぢやない。町の人たちみんながいつてゐるんだよ。そして、あの地主さんがのう、傳さんは優良小作人だつて、何とかして表彰しなくちや自分の恥だつて、そりやほんただよ、わしだつたらもうとうにしてゐるんだがのう』

『そ、そんなことはせんがえ、傳も受けまいが、それよりの町の人々のためになることをした方がえ』

二

パチ、パチ、パチ……機關砲の音が、絶えまなく響いてゐた。
重苦しく大砲が吠え、小銃が永遠に連なつた線のやうに夕立のやうな音を立てゝゐた。
斜面を這つて前進してゐる我が軍は、二〇三高地の露軍に狙ひ撃ちにされて、バタ／＼斃れて行つた。



露軍の堡壘は堅固であり、照準は適確で、きのふも今日も我が軍は前進をはばまれてゐた。

「露助が何んだ」

と思つてゐたのに、何うして／＼露助は強かつた。

「退却の名人」といふ渾名をつけてゐたが、露兵は一步も退く風がなく、撃つて撃つて撃ちまくつて来た。

我が軍の攻撃は失敗に失敗を重ねた。この要地——二〇三高地を抜かなければ、旅順は何時まで経つても陥ちないのだ。

露軍も必死だつたが、我が軍も必死であつた。

「一步も退くな、退いたら日本男子の恥だ」

さういふ決心が、命令されたのでなく、自然に我が軍全體のものゝ頭に充ち満ちてゐた。

濛々たる煙が針のやうにちか／＼と眼を突き刺し、鼻から咽喉にしみて息苦しかつた。その煙と闘ふのが、一種の戦争でもあつた。

あるものは地に這ひつくばり、あるものは木のやうに倒れ、あるものは坐つたまゝ動かさず、あるものは呻き唸り、

あるものは怒聲を張つて「萬歳！」を唱へ、仰向けにそつくりかへるもの、横に倒れるもの——

中澤傳之助は歩兵第二十七聯隊第十中隊に屬し現役服務中、明治三十七年八月四日勅令を受け、同年十月二十六日勇ましく征露の途に上つたのであつた。十一月二十日青泥窪に上陸と共に直ちに戦線へ乗り込み、同月二十六日には旅順要塞龍山西砲臺の攻撃に参加、今や、同月三十日の二〇三高地攻撃の最中である。

戦友と話をする暇もなかつた。みんながみな黙々として、前へ／＼進んでゐた。

「あツ！」

流れ弾が彼の右の眼を貫いた。

「何糞！このまゝ退がれるかい」

血が噴水のやうに頬を流れ、潤いた口をしめした。

彼は齒を食ひしぼり、息を凝らして進んで行つた。それから、何うなつたか——

「中澤！やられたか、大丈夫か？」

といふ聲を微かに耳にしたばかりであつた。

「よく歸つて来て下さつたのう」

「名譽の負傷だ。町の名譽だ。俺たちの名譽ぢや」

彼はさういはれるのが恥かしかつた。よし、働いて御恩返しをしよう、——と思ひ、土まみれになつて牛のやうに働いた。妻のとめよは彼のよき伴侶者であつた。

「働く、働く、働く」

一にも二にも働くことが、彼の人生の標語であつた。その結果彼は遂に家屋宅地を自分のものにするやうになつた。

そして、優良小作人として表彰され、ます／＼農事にいそしむのであつた。彼が町の人々の信望を一身に集めてゐることは、いふまでもない。

「働くといふことは、何といふ喜びだらう、お父さんがあんなに、喜んで下さるのが、陛下に忠義になるといふ日本は、何といふいゝ國だらう」

と、彼は眼をうるまして今もいひつゞけてゐる。

彼の老父が死んでからもう五年たつ。しかも今なほ彼の孝養ぶりは、町の人々の間に偲ばれ、今では彼自身が父であるかのやうに町の人々から敬愛せられてゐるのである。

三

彼の右の眼は全然用をなさなくなつてしまつた。だが、彼は、まだ戦へると思つた。

「何うしてもかうしても戦はなければ……」

しかし、彼は許されなかつた。

「まだ左の眼があります、手足は丈夫です。戦へます。何か戦はして下さい」

彼は涙を流して幾度上申したことであらう。だが、彼は許されなかつた。

彼は一人息子であつた。家は（宮城縣伊具郡丸森町にあつて）貧しい小作農であつた。その日／＼を何うやらかうやら過ごしてゐるので、彼がゐらなくなれば、一家の者は忽ち路頭に迷はなければならなかつた。

「戦争に行くばかりが忠義ぢやない、お父さんお母さんに孝行するのも忠義ぢや」

上官は彼にこん／＼と諭した。彼はもう頑張れなかつた。町の人々は、彼を凱旋將軍のやうに迎へた。

怒濤を越えて

裁縫業にて更生せし村上榮治郎氏

本籍地	東京市小石川區關口町百七十五番地
負傷程度	頭部、兩足銃創、神經機能ヲ妨 ゲ左眼失明

郵便局員に

『おい第三便、區分頼む』
『よし来た』
『傳票』
『おいしよ』
中央郵便局は戦場の様だ。汽車が着く度に全國から洪水のやうに郵便物が集つて来る。それを東京市内の各區に區分し、各區の二等郵便局に發送する。市内の各郵便局から

も、全國へ向つての郵便物が山のやうに集つてくる。それをまた全國各府縣に區分して東京驛へ送る。

朝九時から翌朝の九時まで、廿四時間つとめて歸宅し、また翌日朝の九時には出勤する。隔日勤務である。

『今朝はいやにブツ（郵便物のこと）が少いぞ』

『有難えな』

ブツが少ければ仕事は楽だから皆喜ぶのだ。然しそんな後では、きつと前に倍して夥しいブツの山が来るのが常だ。一つ片付けてホツとすると、もう次の山だ。時には前のが片附かないうちに、後から後からとたまつて終ふこともある。大抵朝の十時頃、午後の二時頃、九時十時頃が、一番忙しい時で、目が廻る程轉手古舞ひをする。

『おい村上、疲れたらう。少し休めよ』

隣の田村といふ男に聲をかけられて、榮治郎は崩れる様に板の間に腰をおろした。

『すまねえなあ、お前にはいつも厄介をかけて』

『厄介も糞もねえや、お前は最早充分に國のために働いた人間だ。僕等が今日かうしてゐられるのも、お前等が命を

『うむ』

一時頃になるとブツも途絶えるので、それから別棟の三階の寢室に上つて朝の七時頃まで一眠りする。誰のものともきまつてゐない汚れた寢床にてんでにもぐりこんで、豚のやうに眠るのだ。

『これだけ働いて日給一圓足らずなんだ。手當をいれて月三十二三圓。これでは仕方がない。商賣をやつて見よう。』

商賣となればどんな事でも末の樂しみがある』

南京蟲や蚤などが横行して、眠られない寢床の中で、轉軛反側しながら彼は覺悟をきめたのだつた。

露店商人

『ついでにこいつも負けて置け。どうです。これがたつた二十錢。二十錢ですぜ。二十圓ぢやありませんぜ。えゝありませんか、驚いたな。ぢやあこの黒い奴も負けぢやえ。この黒いのは腐つてるんぢやあない。唯皮が黒色に變化してゐるに過ぎない。所謂ブラック・バナナといふ奴、喰べるとかういふのが本當においしいのです。ええ笑つちやあ

なげ出して、滿洲の野で働いてくれたからだ。俺アそれと思へば、お前のためにこの位のことを助けてやるのは當り前のことだと思ふんだ』

『なに、俺は君恩の萬分の一を報じたまでさ』

彼は嘗つて第九師團の歩兵第七聯隊の一員として、日露戰爭に従軍し、旅順攻圍戦や奉天の大戦に参加し、華々しい功名をあげたが、奉天附近の戦ひで無念にも兩足と前頭に貫通銃創を受け、左眼の明を失つて終つた。郷里の親戚の同情によつて結婚したが、次から次へと三人も子供が生れて見ると、不自由な身體で百姓仕事をやつてもとても喰つてはゆけないので、思ひ切つて上京した。幸ひ中央郵便局に勤め口があつたので、自分は隔日に通ひ、妻は内職などをやつて、細々と暮らしてゐるのだつた。

『おい十二時だ。汁粉を喰べようか』

榮治郎は助けて貰つたお禮に田村に汁粉をおごつた。仕事の合間に、下の食堂で喰べる一杯五錢の汁粉は、彼等にとつては無上の美味なのだ。

『もう一仕事だ。簡単にすまして一寝入しようぜ』

いけない。嘘だと思つたら喰べて見て下さい。決して嘘は申上げない。このおいしいブラック・バナナまでつけて、これで二十銭、えゝありませんか。驚いたねえ。一體君等何の爲に立つてるんだ。さてはかう見えても懐中は空つ風と見えるな。よしてくれ、此方は伊達や酔興にかうして水漬をたらして饒舌つてるんぢやねえ。ねえ一人位は錢のある奴だつてもいいぢやないか。カフエーへ行きやあチップにも出せねえ唯の二十銭なんだ。ええツ糞ツ、十五銭、道剝にあつたと思やあすむんだ。十五銭に負けてやれ』行き來の人を立止らせて、舌一枚で財布の紐を解かせようとするのだから、呑氣な商賣ぢやあない。車をひいて、方々の縁日や祭を目あてに、歩き廻る。ネ夕の仕入れから、仲間の交際、不自由な身體には何もかもが人一倍の負擔である。その上に折角商賣にかゝると雨が降つて來たり、途中で車に衝突して折角の準備を臺なしにされて終つたり、泣きたいやうなことも數知れずあつた。

『あ、村上さん』

澁谷の水川様の祭に行く途中、ふと聲をかけられて振



り返つて見ると、粗末な着物を着て腰に秤をさした一見して屑屋と解る男が立つてゐた。

『暫くでした。田村ですよ。そら郵便局で御一緒だつた』

『お、田村君』

郵便局で彼の隣りにゐて、よく助けてくれた男だつた。それにしても何といふ變り様だ。いや變つたといへば、自分もひどい變り様ではないか。

『縁日商人をやつてるんですがね。其日を過ぎすのがやつとですよ』

と彼が言ふと、田村は、

『屑屋をやつて見ませんか、物價の變動が劇しいのでかなり儲かるし、時には掘出し物もありますよ。』

と頻りにすゝめるのだつた。

資本がいらなないで、縁日商人と違つて確實な収入があるといふ點に惚れこんで、早速屑屋を初めて見た。

屑屋は足が資本である。貫通銃創のため兩足とも少し不自由ではあるが、戰場にゐた時のことを思へば何でもない。

『屑い、屑い、新聞紙や空嚢、古雑誌のお拂ひ物はありませ

んか』

呼聲も慣れると調子よく出るやうになる。

『おい屑屋ツ』と大きな聲で呼ぶやうな家ではたいした拂ひ物はない。新聞紙か古雑誌が關の山である。

『屑屋さん』と小さい女の聲で、しもた家などから呼びこまれた時には、往々にして金指環とか時計とか、意外の仕事になる事がある。

空嚢ねらひと間違へられたり、猛犬に吠えつかれたりしながらも、彼はせつせと歩きまはつた。幸ひ毎日二圓位にはなつたので、妻の内職と併せて、其日其日を過すには事缺かなかつた。

遂に裁縫業で成功

或日一臺の古ミシンを手に入れた。

妻はそれを頻りに欲しがつた。右から左に賣れば相當の儲けにはなるが、妻が熱心に希望するので、それを家に置くことにした。

妻はそのミシンを使つて裁縫の内職を始めた。それが當

つた。
「貴方が一日外で駈けまはつて働くのより、私が家で働く方がずつと多いわね」

遂には妻から、そんなひやかしを言はれるやうになつた。「ねえ、貴方もミシンをやつたらどう？ 屑屋では先きの楽しみがないけれど、裁縫ならやり方によつては大きくなれるわよ」

妻に言はれて彼も考へた。さうだ、屑屋では一日いくらかけまはつても五圓の儲けは滅多にない。裁縫ならいい顧客さへ掴めばいくらでも擴張できるのだ。

「よし、やらう」
決心すると、其の日からミシンを熱心に習ひ始めた。その熱心さは妻さへ驚く位だつた。

「本當にいい職人になるには、若い時から仕込まねばダメだ。それなのに俺は年とつてから習ふのだから、人の二倍努力するのだ」

餘り根をつめて、身體をこはしては困る、と心配する妻に向つて、彼はいつもかう言つた。

「東京には裁縫する人は澤山ある、その澤山の人と競争していくらかでも上に出ようといふのだから、當り前のことをしてゐては駄目だ。人が一度やれば俺は二度やる、人が一度お顧客へ顔を出せば、俺は二度顔を出す。人が五割勉強すれば、俺は六割勉強する。とに角何でもいいから人並以上の努力をするのだ」

彼は口癖のやうに妻に言つた。妻も彼の氣持を理解して熱心に努力した。

思ひがけない事情のために、大きい顧客が倒れて途方に暮れたこともあつた。陰險な中傷や迫害のために大打撃を蒙つたこともあつた。

時には餘りに直情徑行だつたために重要な顧客を失つたこともあつた。

しかし、誠實こそはあらゆる迫害に打ち勝つ最上の武器である。彼の熱誠は一切の困難に打克つて、仕事は次第に繁昌するやうになつた。遂には夫婦だけでは手が廻り切らない程になつたので、一人、二人と職人をも使ふやうになつた。

職人達にも彼は前述の心得をくり返し言ひきかせ、一心同體となつて奮闘したので、現在では十數人の職人を使用する程、目ざましい發展をしてゐる。

兩足に貫通銃創を受け、前頭部の負傷のために一眼の明を失つた、不具の身でありながら、常人以上の奮闘をして遂に今日を築いた氏に對して、健全な四肢を持ちながら、碌々たる者は愧かしい次第ではないか。

小石川立春會の設立

尙氏は小石川區内に住む傷痍軍人と相圖り、昭和三年二月「傷痍軍人小石川立春會」を設立した。

最初の會員は十八名。いづれも日露及び日獨戰爭で負傷した人々である。

「私ども同人同區内に居住し、同じ御役所同じ團體の下に在る者が一堂に會し、往時を追想し、舊を談じ、新を圖り、互助以て大過なき餘生を送りたく」と發會趣意書に記した如く、相互扶助と、治に居て亂を忘れざるの心懸けのためである。

「またあの兵隊さんが來たぞ、今日は面白い戦争の話が聞けるぞ。嬉しいなあ」

小石川の小學生達は、氏等の姿が學校に見えると、さう言つて喜ぶ。

それは立春會の人々が、年に二回位交互に小學校へ出張して、兒童等に、自分等の實戰談を面白く話してきかせるからである。

氏はかうして第二國民の愛國心の養成に努力すると共に春秋二回、先輩や名士を招いて軍事講演會を開き、一般の人々にも聞せて軍事思想の普及を圖つてゐる。

劍を執つては功名手柄を現し、治に居ては不自由の身を鼓して産を成し、僚友の親睦を圖る、村上氏の如きは眞に稀れなる人といふべきであらう。

立志傳中の人

市會議員に迄なつた楠本長兵衛氏

本籍地 熊本縣上益城郡白旗村

程負傷 頭部貫通銃創

熊本縣の御城下から南へ五里、上益城郡白旗村の貧しい農家に生れた楠本長兵衛は、六歳の時に父親と死別れ、母の手一つで育てられた。

『お前、ほんとは氣毒だけれど、今度は澤村さんの家に奉公に行つておくれでないか。』

十二三と言へば、遊び盛り。父親さへ生きてゐたら、遊びほうだい遊ばしてやるのと思ふと、母の胸はかき搥られるやうだつた。しかし、さうしなければ母子諸共餓死しなければならぬ現在ののだ。

『え、今からでも...』

長兵衛は元氣よく答へた。彼には年少ながら、母の自分を育てて来た苦勞が察せられて、母の言ふがまま、彼處此處と、農家の手傳ひに出てあるのだつた。

彼が生れたのは、安政元年。徳川二百五十年の封建制度が、時代に目覺めた若人達に依つて覆へされようとしてゐる頃だつた。それから萬延、文久、元治、慶應、明治と、彼が奉公生活に這入つたのが、丁度、王政復古の曉である。十二歳から滿九年間、農家から農家へ、野良仕事に追はれてゐた彼には、殆んど學問を受ける暇のある譯はない。勿論、その頃は義務教育があつた譯でもないが、時代が時代だけに、

『百姓でも學問さへあれば、官員様にもなれるんだ。』さういつて封建制度から脱出した喜びと共に、百姓達の間にも、學問熱にうかされて、寺小屋に通ふ者が非常に増加してゐた。

彼が、十五六歳となつてくると、水飲み百姓の惨めな生活を見てゐるだけに、

『これからは、何んな職業に就くにしても、學問が必要だ。文字を知ることが必要だ。』

と感じて、農家の比較的暇な冬の期間に開かれる寺小屋に通ふことにしたが、それも晝は仕事があるので、特別に先生に願ひ、夜に個人教授をしてもらふことにした。

『長や、歸つて来たかな。』

十二時近く、冬の夜風に吹かれて歸る彼を母は繩をなひながら待つてゐる。

『お母あ、寝てゐれアいに、朝早いんだから。』

彼は母の體を氣づかひ幾度となく、さう勸めたが、『なにさ、お前の苦勞を見れば、私なんか家の中の仕事だもの、樂だよ。』

と、待つてゐることを止めぬ。

この母を思ふと、彼の勉學は、いやでも眞劍になる。晝一杯働きたつての授業だが、彼の努力は、寺小屋の先生を感歎させるに十分だつた。

だが、かうした勉強も、永く續けることは不可能だつた。母は若い時からの過激な勞働に疲れて、病氣がちな體

となり、長兵衛の様な、田も畑もない小作人生活には、多期といへど、彼に勉學の餘暇を與へてはくれなかつた。

かくして、明治七年を迎へた彼は前年發布された徵兵令に依つて、検査の結果合格となつて、十二月一日には熊本鎮臺の最初の兵卒として、入隊を許されることとなつた。

各地方から、士族出、商家出と、色々の人々が集まる軍隊生活は、實に野望に燃える若い青年達の寄り合であつた。彼はその中であつて、一層好學心は熾りたてられていた。

『四民平等の世界だ。水飲み百姓出の自分にも勉強次第努力次第で、どんな高位、高官にでも就くことが出来る。』

彼は下士官に教を請ひ、餘暇を見ては讀書に耽つた。晝の教練に疲れた體を、鞭打つて勉學につとめた。母の瘦れた顔が、彼を絶えず激勵してくれた。

『楠本、貴様、今日は私に代つてやつてくれ。』

彼の勉學が、やがて隊の評判となつて、時折、かうして下士官から、代講を頼まれて、同僚に講議することさへあつた。

彼が鎮臺に入隊してから三年過ぎた。春三月には佩刀禁令が公布された。明治九年、その秋十月廿四日の神風連事變——排外主義の極端な國粹黨が、大野鐵平、加屋齊堅、上野謙吾等を先頭に兵を擧げて、縣令安岡良亮、熊本鎮臺司令長官種田政明を斬つて、鎮臺に押し寄せて来たとき、その防護にあつた彼楠本長兵衛は、神風連黨士の爲め、顔面から頸筋にかけて日本刀を浴びせられて倒れた。彼等、神風連事變の負傷兵は、直ちに大阪城へ送られて手厚い看護をうけた。

彼は其當時を回顧して、『負傷して大城城に送られて色々手厚い看護を受けましたが、その當時、畏れ多くも、明治天皇陛下下の行幸遊ばされました際には、私共は寢臺に座つたまゝで、咫尺の間に龍顔を拜し奉りました。その折のことは、六十年後の今日でも、よく印象に残つて居ります。』と語つてゐる。神風連事變の翌年、熊本では西南の役が起つたが、彼が治療を終へて大阪から熊本に歸つたのは、明治十一年で、既に西南戦争が終つてゐた。

熊本に到着した彼は、郷里白旗村の母を呼び寄せて、御下賜金の參百圓を資本に食料品店を開いた。『おい、楠本、貴様が此店を開いてゐるのか。』或る日、店に這入つて来た陸軍將校が突然長兵衛に聲をかけた。見ると、それは隊役中に下士官だつた人だ。『はい。さうです。貴方も御健在で...』『いや、あの時は大變だつたな。傷は痛むのか。何時歸つた。』と、色々昔話をした後、將校は言葉を改めていひだした。

『ところで、お前、こんな商賣をやるんだつたら、鎮臺の御用商となる希望はないか。』彼の胸はずきんとした。嬉しさがこみ上げて来たのだ。『私のやうな者でも、さうして戴けば一生懸命にやつて見ます。』答へる聲も喜びに顫へてゐる。『よし、ぢや私が出願してやらう。』さう言つて將校は歸つて行つた。彼の實直なことを知つてゐる將校が奔走して斡旋してく

れたので、話とはん／＼拍子にすゝんで、楠本食料品店は間もなく、陸軍御用商店となつて、熊本鎮臺に、米、大麥、牛肉を入れることゝなつた。これが實に、彼楠本長兵衛の今日をなすに至つた一大原因であつた。

正直の頭に神宿るといふ。正直は成功の基ともいふ。かくすより現はれるといふ言葉もある。長兵衛が在營時代に實直に勤めたことが種となつて、かうしたところに芽を出して来たことは、我々に一つの教訓を與へてくれるではないか。

御用商となつて、どん／＼繁昌して来るにつれ、一人では切廻はせず、使用人を雇ふことになつた。總てが實直を主意とする主人公に眞似て、使用人もよく働いてくれる。従つて信用は次第に増して行つた。だが、それから五十餘年の商人生活が、さう平な道を歩むことは、世の中に許さるべきものではない。或る時は失敗に失敗を重ねて、破産しようとした。又、母の死に接して悲歎も味はつた。しかし、かうした苦難にぶつつかる毎に、彼の勇氣は増



して行つた。すべて死線をくゞつて来た人には、事ある毎に神靈に等しい勇猛心が湧き立つて来るものだ。彼は苦勞を試練として幾度となく難關を突破した。

大正十年には、町内の人々の懇切な希望で市會議員選挙に立候補して、見事に當選した。

かうして、現在、熊本市春竹町に居を構へてゐる彼は、ある時は消防機械格納庫建設の寄附金、その他、公共的奉仕に金を投じてゐるので、町民の間に評判よく、且、數萬の財産を有して、悠々、八十二歳の老軀で活動してゐるが、彼が今日、かうした成功を見たのは、決して世渡り上手の爲てはなく、彼の少年時代の勞苦が、青年時代の苦學が齎らした賜である。

『成功などいふ程のことではありませんが、私が今日のやうな生活の出来たのは、全くあの御下賜金の參百圓です。あの頃の參百圓は現在の貨幣價値に換算すれば參千圓は充分ありましたから。それから私の開いた食料品店が鎮臺の御用商の資格を興へて貰ひましたことです。食料品店を開いてから、もう、五十何年といふ永い間です。色々な

こともありました。世の中は、踏張りが大切ですよ。失敗がいゝ經驗となつて、激勵してくれました。人々の勧めで市會議員もやつて見ましたが、どうも私には政界といふものが、びつたりと来ないので、一期でやめました。傷です。か、傷には除隊となつた頃は、相當苦しめられました。今では、慣れて終つたせるか、不自由なことが、人並であるやうな氣で、別にこれで、困るやうなこともありません。』

八十二歳の楠本長兵衛翁が語る回顧談。

彼が過去に教師からうけた教育は、唯一冬期間の夜學だけである。

六歳にして父を失ひ、母の手一つで貧農のうちに育てられた彼が、勤儉力行の八十餘年の人生は、波瀾多き、荆棘の道、惡戰苦闘の絶間なき日日であつた。

彼の過去を知り、彼の現在を見れば、一寸の苦難、困却に挫折する懦夫をして驅起せしめるに充分であらう。

なほ、彼は、昭和八年第二〇五號傷痍軍人特別扶助金が下附されると、彼はその全金額を國防資金に獻金した。

更生の榮光

|| 民衆の父と慕はれた谷田部夏次郎氏 ||

本籍地 茨城縣那珂郡五九二八番地
程負 左眼内出血、失明
度傷

『貴様ほんたうに下士志願をしたのか?』

『うむ、ほんたうだとも、貴様に嘘なんか言ふものか。』

『とか言つて、郷里に待つてる女があるのぢやないか?』

『そんなものゐないよ。』

『ふうむ。しかし、それもいだらう。そして、どうか、まア、俺たちの分まで國家のため御奉公してくれよ。實をいふと俺も残りたのぢや。残つて永く邦家の護りとなり

たいのぢや。しかし、何をいふにも俺は長男だし、俺の退營を待つてゐる両親があるし……』

『何を言ふのぢや。軍隊に止まるのも、郷に入つて農に従事するのも、どちらも同じ御奉公ではないか。御奉公に輕重の區別はないよ。』

『それはさうだなア。』

『俺なんか、身輕は身輕だけれど、郷里へ歸つたつて耕すべき土地もないんだよ。軍隊に残るのは、俺のやうな境遇の者が一番適してるんだよ。……それはさうと、退營の日も、もう迫つたぢやないか。久しぶりに父母の許へ歸れると思ふと嬉しくないこともないだらう。それを思ふと、貴様をはじめ、同年兵たちがみんなるなくなると思ふと、なんだか淋しくなつて来るよ。』

『俺も、入營以來、肝膽相照した貴様と別れるのは淋しいよ。お互ひに、手紙だけはずつとやりとりしようよなア。』
谷田部夏次郎は、一人の同年兵とそんな會話を取り交してゐた。除隊の日が目前に迫つた或日曜日の朝のことであつた。そのあたりでは、同年兵たちが、歸郷の日の間近に

追つた喜びに面をかがやかしながら、これを最後の市内見物にでも出掛けるつもりか、思ひ思ひに外出の支度をしてゐるのであつた。
『どうだい？ 俺たちも汁粉でも食ひに行かうか。そして大いに語り合はうぢやないか？』
『うむ、よからう。』
といふわけで、二人も早速外出の支度にとりかかつた。そして、やがて、陸じさうに肩を並べて營舎の門を出て行つた。

二

明治四十三年十二月二十三日、陸軍歩兵軍曹谷田部夏次郎は（果して彼は下士志願をして、この時はもう軍曹に昇進してゐた）銃剣術の教習中、左顔面に激しい刺突を受けその場に昏倒した。

『軍曹殿！ しつかりして下さい！ 軍曹殿！』
兵卒たちは、走りよつて軍曹を抱き起した。一人の、氣の利いた兵卒は軍醫室に走つた。氣丈な軍曹は、すぐに吾



三

母も亡くなり、今では、兄が家を繼いでゐるのだつた。

に返つたけれども、面を脱してみると、左眼に内出血を起してゐた。

軍曹は直ちに衛戍病院に收容された。しかし、左眼の内出血はなかなか重態だつた。實に二ヶ年の永きに亘つて根氣よく治療を續けたけれども、天はつひに軍曹を見捨てたのか、左眼はつひに失明してしまつた。

だが、軍曹にとつて残念でたまらないのは生れもつかぬ不具者となつたことではなかつた。そのために兵役を免除されたことであつた。郷里へ歸つても耕すべき土地もない彼にとつて、軍籍に身を置くことこそ、唯一の至誠奉公の道だ——さう考へて、同年兵たちの満期除隊の喜びをよそに、軍隊に止まつてゐた彼ではなかつたか。その彼が、思ひがけない災難のために、不具の身となつて、その、耕すべき土地もない郷里へ歸らなければならぬとは。

だが、このために、自暴自棄を起すやうな軍曹ではなかつた。一切を天命と諦めて生家に歸り、今は光を見る望の果てた眼の治療に努めるかたはら、兄を手傳ひながら、ひたすら農業に勵んだ。——彼の生家は、彼の在營中に父も

『兄さん、僕はやつぱりもう一奮發してみたいと思ひます。不具の身であつてみれば、尙更兄さんの厄介になつてこんな草深い田舎に朽ちたくはありません。』

彼の不屈な精神は、一度くらの挫折でひるむことではなかつた。左眼の痛みがやうやく薄らいだ或日、彼は家兄に上京の相談を持ちかけた。

『お前がさういふ決心であれば、一奮發してみるのもよからう。』

意外にも、兄は快く承諾してくれた。彼は、儉約をして貯へておいた貯金をたづさへて上京した。

が、天は飽くまでも彼に残酷だつた。——探せども探せども就職口はなかつたのだ。たうとう、所持金は悉く費ひ果し、その日の食にも窮する身となつてしまつた。

けれども、それでも彼は怯まなかつた。かへつて、苦難は天の試練であるから甘んじて耐へなければならぬ。といふ信念をさへ固めた。

やつと、某商店の店員になる機會を得て、就職難地獄から救はれた。しかし、商店員になることは、彼の目的では

なかつた。彼は警察官となつて、社會民衆のために盡した
いのであつた。そして、彼はどんな困難にもへこたれず、
目的に向つて邁進せずには止まない青年であつた。で、彼
は、商店員として働きたがら、一方、ひそかに、勉強の出
来さうな勤口を探した。そして、やつと見つけたのが、芝
區三田四國町にある、日本電氣株式會社であつた。
彼は、勤務の傍ら、日本大學法學専門部に通つて火の出
るやうに勉強した。かうして、苦學三年、卒業と同時に警
視廳巡查を拜命し、漸く宿志の第一歩を踏み出すことが出
來た。それは、實に、大正八年の四月のことであつた。そ
れから、同年九月には、轉勤命令を受けて、海を渡つて朝
鮮に赴いたが、至誠奉公の精神は直ちに上官の認むるとこ
ろとなり、つひに警部補にまで果進した。
しかし、左眼の失明のために、いろいろと不便を感じる
ことが多くなつたので、たうとう、昭和三年五月、職を退
き、京城府黃金町に藥種店を開いて今日に及んでゐる。

四

彼の、性來の、誠實と勤勉と不屈の精神は、藥種店の經
營にも自ら現はれて、開店以來、非常な繁昌振である。
彼は又家業に勵むばかりではちつとして居れなかつた。
至誠奉公の精神止み難きまま、同業者並びに一般有志を會
員として「大日本奉公會」を組織し、日本精神の鼓吹に努
めてゐる。
本年四月朝鮮に初めて町會規則が制定され、町役員に
推されたが、彼は思ふところあつてこれを辭した。それと
いふのは彼が築き上げた「大日本奉公會」を更に強大なも
のとし、明治大帝の賜りたる教育勸語の大精神に基いて
至誠奉公の健全なる思想を國民の一人々に植ゑつけた
大理想に燃えてゐるからである。五尺の不具の身を以て、
永遠に滅することなき大理想を實現したいからである。彼
はこの大事業をなし遂げるまでは、死すとも死なぬ覺悟で
一路理想に向つて邁進をつゞけてゐる。
艱難に際して屈せず、勤勉努力よく自己の運命を切り拓
き、更に餘力をあげて奉公に努めてゐる我が谷田部夏次郎
氏の如きは、眞に帝國軍人の模範とするに足るであらう。

道は開ける

|| 總る苦難を克服した八卷常三郎氏 ||

本籍地 福島縣信夫郡渡利村大字小倉寺
負傷 左示指關節骨折切創、頭部打撲
程度 傷(右眼盲)

「永い間お世話になつた學校とも、今日限りでお別れか」
福島師範學校の校門を出て、八卷常三郎君は淋し氣に呟
いた。

世間は既に春だ。櫻の蕾が綻びかけてゐる。
永い冬から蘇生つて、明るくなつた世間に反して、常三
郎君の胸の中は暗い。
名残惜氣に幾度も、朝夕見馴れた學校の校舎を振り返り

振り返り、彼は重い足を引摺るやうにして、我家の閭をま
たいたのであつた。

「おや、今日は歸りが早かつたね。學校は休みかえ」
彼の顔を見ると、さう聲をかけたのは母親であつた。

「あゝ、今日は早じまひだよ」
どうせ一度は打明けねばならぬ事ではあるが、老いたる
母親に心配させるのが辛くて、彼は率直に切り出す勇氣が
なかつた。

「さう早じまひか。たまには身體を休めるがえゝぞ」
母親は別に怪みもせず云つた。

彼は福島師範學校の喇叭手に雇はれてゐたのであるが、
今日解職されたのだ。別に不都合な點があつて解職された
譯ではない。日露戰爭に出征して、その時受けた打撲傷が
再發し、喇叭の吹奏が出来なくなり、それが爲止むを得ず
解職になつた譯だつた。

彼は、福島縣信夫郡渡利村大字小倉寺に生れ、元陸軍砲
兵上等兵である。明治三十七年二月六日動員令に接し、二
月八日野砲兵第二聯隊段列に編入され、直ちに出征、三月

二十四日朝鮮鎮南浦に上陸、諸所に轉戦、清國盛京省哈
 嗎塘に到着、多營準備の爲、厩舎建設に服務中、誤つて材
 木と共に打ち倒れ、左示指關節を骨折し、同時に頭部を強
 打したので、直ちに病院に收容された。
 打撲傷は可成りの重傷で、戦地に於ての治療は難しく、
 各地の病院を経たる後、仙臺病院に收容され、治療を加へ
 たが、経過は餘り良くななく、記憶力が減退した上に、右眼
 の視力が非常に不十分なつた。
 翌三十八年八月迄治療を加へ、同月八日、右の傷痕に依
 り兵役免除となり、郷里へ歸つたのだつた。が、歸郷後も
 氣候の變化毎に烈しい疼痛を覚え、遂に右眼は全く失明し
 てしまつたのである。

彼が歸郷當時、家には資産があるてはなし、一錢の貯へ
 がある譯でもなく、家族は祖父母と、兩親、妻と子供が二
 人、彼を加へて八人の大家族だ。
 家業は農業で、出征前から、田地二反八畝、畑三反を小
 作してゐたに過ぎないから、貯蓄どころの騒ぎでなく、一
 家八人が糊口を凌ぐにも十分とは云へない程度で、他の見

る眼も氣の毒な状態にあつた。

二

家計が斯かる状態であるから、傷の痛みもまだ不十分な
 がら静養する暇もなく、歸宅早々、彼は農業に従事した。
 然るにこの年は近年稀な縣下一帯に渡る大凶作で、收穫
 は皆無と云ふ有様で、それだけでなくも漸くその日の糊口を
 凌いでゐた八巻一家は、文字通り赤貧洗ふが如く困窮の極
 底に突き落され、飢餓線上に彷徨する状態に陥つた。
 籠の下に煙の上らぬ日も幾日か續いた。
 老いたる祖父母、兩親の口から出るのは、悲しい吐息許
 りである。

『みんな歎く事はないぞ。凶作は俺の家だけぢやない。困
 つてゐるのは世間の人達も同じだ。悪い事ばかりが續きや
 しない。そのうちには又いゝ事もあるよ』
 祖父母を慰め、兩親を勵まし、不自由な身體に鞭うつ
 て、彼は日傭稼ぎに出るやうになつた。
 とところが、普通の身體と違つて、不具の身體では、どん

なに齒ぎしりしても人間一人前の働きは出来ない。
 一日に取る労働賃は僅に金五錢である。如何に不自由な
 身體でも、人間一人が一日働いて、僅かに五錢とは嘘のや
 うな話だが、實際だ。
 そんな安い賃金も厭はず更生の意氣に燃えて働いた。
 又ある時は縣農務課の工夫として、雪の深い田村郡方面
 に出かけた事もある。彼は軍隊に在る時測量に關する教育
 を施されてゐた爲に、今、それが役に立つたのだ。
 寒中は特に負傷部の疼痛が烈しく、背中に懷爐を入れて
 出かけるのであつたが、祖父母や兩親に心配かけまいと、
 強ひて笑顔をして出て行く後ろ姿に、妻女の眼には涙があ
 ぶれた。

然し、さうした労働も永くは續かなかつた。と云ふのは、
 患部の爲、全身に疼痛を覚えるやうになり、如何に頑張つ
 ても、最早労働に耐へられなくなつた爲である。
 再び一家はその日その日の口を糊する事すら容易でなく
 なつた。

このまゝの状態が續けば、一家八人、餓死するより外道



は無くなつたが、縣よりの鞍旋に依り、翌三十九年の春、師範学校の喇叭手として雇はれ、月八圓の手當を給される事になつた。

この月八圓の手當こそ、一家を支へる最大の収入で、両親や妻女は農事に従ひ、親子氣を揃へて、家運の挽回に努力し、必死となつた甲斐あつて、以前のやうな悲惨な影は消え失せたが、大正二年頃より、今度は肝腎の喇叭が思ふやうに吹けなくなり、越えて大正四年四月、遂に解職されたのである。

生活の脅威は再び彼一家を襲つて來た。流石にこの時許りは、彼も心を痛めた。心が暗くなつた。

母親の前に、率直に切り出し得なかつたのも無理からぬ話である。

三

『實はな...』
何時迄隠しておく譯にもゆかぬので、その夜、彼は、兩

親や、子供達が寝静つてから、妻君に打あけた。
『お前も知つてる通り、この頃では指先がだんだん不自由になつて、肝腎の喇叭が思ふやうに吹けなくなつた。實はとうに解職になるところを、今日迄使つて貰つてゐたが、もうどうにもならなくなつたので、實は今日限り學校は解職になつたのだ』

何時にない沈んだ顔をしてゐる夫の顔を見て、不審に思つてゐた妻君も、始めてさうであつたかと、首肯した。

『解職になつたからと云つて、學校を恨むやうな事があつてはならぬ。今迄使つて頂いたのは、校長先生や、皆さんのお情だ。片輪で、満足に仕事の出來ない俺を、十年もの永い間、使つて頂いた御恩は死んでも忘れてはならない』
學校を恨むやうな事があつてはならないと、彼は嚙んで含めるやうに、妻女に云つて聞かせるのだつた。

妻女も解つた女で、愚痴らしい事は一言も云はなかつた。
『お前がよく判つてくれればそれでいい。俺は又、自分に出來る仕事を探し出して、一生懸命働くよ。働いてゐる

うちには屹度何とかなる。人間は働くやうに出來てゐるのだ。どんなに困つても悲しんだり、不平を云つてはならぬ。不平を云ふやうになつたら人間はおしまひだ』
貧苦のどん底を幾度も潜つて來た彼には、體驗より生じた、尊い處生訓を持つてゐた。

悲觀せぬ事
不平は云はぬ事
人間は一生働く事

この三つである。
斯かる立派な精神を有する彼が、何時いつ迄も、神からも、人からも見離されてゐる譯はない。

一端解職した師範學校から、數日經つて呼出されたので行つて見ると、永年勤続の功に依り、一ケ年間、今迄通りの手當を仕給すると言ふ嬉しい話であつた。
彼は涙と共に感謝の辭を述べ、急ぎ歸宅して、一家の者を喜ばせた。

『有難い事だ。有難い事だ。これと云ふのも、お前が正直に働いてくれたからだ』

兩親は涙を流して喜んだ。
一家擧つて、捲土重來の意氣に燃え、朝は曉から出かけて、夜は暗くなる迄、必死となつて働いた。

妻女はその頃から玉糸繰りを始め、朝は四時、から夕は七時迄、せつせと稼ぎ、一日六十錢の收入を得、子供達は子供達で、各々それらの仕事に従事し、和氣藹々として苦闘十年、遂に辛苦は酬いられ、家運は次第に挽回し、村内の信望は厚くなり、大正九年秋には長女に婿を迎へ、家計も漸く安定し、現在家族十一人、相當多額の貯蓄も出來、今では村内中流の生計を営み得る迄になつてゐる。
艱難汝を玉にす。

諺通りである。
八卷常三郎君、奮勵努力の甲斐ありて、幸福なる餘生を送りつつあるのである。

土にまみれて

土と共に營々三十年、前出善四郎氏

本籍地	三重縣安濃郡安濃村大字安濃一
四一四番地	
負傷	頭部貫通銃創(全身七個所銃砲創)左眼盲

「御免下さいまし。旦那様はお宅でござりまするか」
三重縣安濃郡安濃村の資産家、荒木彦九郎氏方を訪れたのは、同家の小作農前出善四郎君であつた。

「おう善四郎さんか」
玄關に出て来たのは、主人の彦九郎氏であつた。
「これは旦那様、何時も御無沙汰ばかり申してをります」
「御無沙汰はお互ひ様だ。今日は商賣の方は休みかい」

が、何分にも御承知の通りの仕末でござりましたから、遂のびのびになりまして、何とも申譯ない次第でござります。今日はここに三百圓だけ持つて参りました。どうか内金としてお納め下さいませ」
一圓、五圓、十圓と、取混ぜた三百圓を、彦九郎氏の前に差し出した。

「善四郎さん」
彦九郎氏の聲は感動に顫へてゐた。

「へえ」
「お前さんは何と云ふ感心な男だ。そりや自分で滞らせた小作米代や、家賃だから、拂ふと云ふのが當り前には違ひないが、本當はさうでも、なか／＼さうはゆかぬものだ。まして、二十年も前の親の借金迄拂はうと云ふ、そのお前さんの氣持に私は感心させられて了つたよ」
「何を仰有ります旦那様。旦那様が催促もなさらず、待つてゐて下さつたればこそ、私達親子十人に近い人間が今日迄無事に生きて來られたのでござります。その御情に對してでも、一日も早くお拂ひするのが當り前でござります。

「へえ、今日は旦那様に喜んで頂き度い事がござりましたので、お邪魔に上りました」

「さうかい。まあ此方へおいて」
彦九郎氏の居間に通された彼は、大切さうに持つてゐた風呂敷包みを解きかけて、

「旦那様、永らくの間御迷惑をかけてをりました、親父の代からの不足分と、それから先年から滞つてゐました小作米の不足分、それと家賃の滞りを、今日はせめて内金だけでもと思つて納めました」
さう云つて、彼は風呂敷敷の中から、新聞紙包みにした分厚な札束を取り出したのであつた。

「ほう、そりや又奇特な。お前さん達の借分は兎に角として、親父さんの不足分迄返済仕様と云ひなされるのか」
彦九郎氏は、戦争に行つて、左眼を失つた、この實直な青年の顔をしみじみと見直したのであつた。
「私共が滞らせた小作米や家賃は勿論の事、親父の借金は二十四年間も滞つてゐるのでござります。これを早く何とかしなくては相濟まぬと、忘れた事はござりませぬ

どうかお納めなさつて下さいませ」
幼少の頃から實直で、勤勉家である彼の人と爲りをよく知つてゐる彦九郎氏ではあつたが、心底から今日と云ふ今日は感動させられたのであつた。

「善四郎さん、お前さんがさう迄云ふなら、私は喜んで受取りませう。しかし、三百圓皆んな貰つてはお前さんも困るだらうから、半分だけ貰ひませう。あとは又何時でも、お前さんの都合のいゝ時入れて貰ひませう」

さう云つて彦九郎氏は百五十圓を返さうとしたが、彼は受取らうとしない。
「それぢやわしの氣持として濟まぬ。親父さんの不足分なんか、わしは貰はうとは思つてゐなかつたのだ。是非とも半分は持つて歸つてくれ」

「これから又何十年、旦那様のお世話にならねばならぬか判りません。そんな事を云はないで、どうかお納め下さいませ」
返さうとしても受取らうとせぬ彼の決心を見て取つた彦九郎氏は、

『うむ、さうだ』

と首肯いて、一膝進めた。

『善四郎さん。お前さんの美しい決心を見て取つたから、この三百圓は貰つて置かう。その代り私もお前さんにやり度いものがある。それを貰つてくれ。外でもないが、今お前さん達が住んでゐるなざる私の家作ぢや。あれをそつくりお前さんに上げやう』

『えッ。あの家をごさりますか』

『古い家だから、金にすれば幾らでもないが、親父さんの代から住み馴れた家だ。まあ何にも云はずに貰つて下さい』

彼は眼を丸くして驚いた。その眼からはやがて大粒の涙が止度もなく膝の上に残れ落ちた。

『お前さんの立派なその精神に對してあげるのです。遠慮しないで貰つて下さい』

『だ...旦那様...何とも御禮の申上やうがござりませぬ。有難うござります。有難うござります』

感激の涙に暮るゝ彼を、彦九郎氏はにこやかに笑つて眺

めるのだつた。

二

この稀に見る感心なる小作農前出善四郎君は、日露戦役に出征した、名譽ある傷痍軍人である。

明治三十七年九月一日召集を受け、第三師團歩兵第三十三聯隊補充大隊第一中隊へ編入され、同月十九日宇品港を發し大連に上陸、十月五日より同月九日迄小東山堡、大東山堡、柳家堡附近の戦闘に参加、同月十日より十八日迄沙河堡の戦に参加、その他諸所轉戦し、翌三十八年三月七日李官堡の大激戦に参加した際白兵戦となり、胸部三ヶ所、足部大腿に一ヶ所、背中に二ヶ所の劍傷を受け、猶もひるまず奮戦中、右の耳から左眼後方へ貫通銃創を受けて打ち倒れ、遂に人事不省に陥つた。

全身に受けた傷は、劍銃創、實に七ヶ所、いづれも重傷であつたが、天は忠勇の士を見放さなかつた。

奇蹟的にも助かつて、直ちに野戦病院に收容された。遼陽、大連等の病院を経て、廣島へ後送され、一時第七

分院にて治療を受けたが、その彼名古屋病院に來つて完全なる治療を受ける事になつた。

胸部その他の傷は、起居に差支えなき迄に癒えたが、頭部を貫通した銃創は、彼から左の眼を盗み去つた。

同年十一月十六日、右の創傷に依り、兵役免除となり、戦功に依り勳八等白色桐葉章、従軍記章、及び恩給八十三圓を下賜されたのである。

名譽の負傷のため不具となつた彼の榮えある凱戦を、村人達は心から迎へて呉れた。が、一步自分の家に入ると、惨たる状態をまざく〜と見せられた。

彼の家は、父の代より貧困を極め、彼が出征前と云へど、貧困の状態には何の變る所がなく、出征後は働手を失つてゐたので、その状態は一層甚しく、赤貧洗ふが如しと云ふ言葉通りであつた。

『さあ、これから死身になつて働けど、俺は幸運にして生きて歸つて來たのだ。働かさへすれば何とかなる。稼ぐに追ひつく貧乏なしだ』

敢然として、更生の意氣物凄く、七人の兄弟を督勵し、



好きな酒も断然廢して、歸郷早々、不健全なる身を野良に運び、或る時は日傭稼ぎに出て、それも無い時は賣薬行商に出てるなど、寸暇も休むところなく、自己の宣言通り死身になつて働いたのだつた。それでも當時の一家は漸く糊口を凌ぐ程度であつたが、日を経るに従つてだんだん餘裕を生ずるやうになつた。

歸郷後丸三年目には、遂に三百圓の貯へが出来た。「何よりも先づ一番に、我々一家の大恩人荒木の旦那様にお父さんの借金をお拂ひせねばならぬ」兄弟七人が、血と膏の結晶とも云ふ可き三百圓が、荒木氏方へ持参した金であつた。

その誠意に感じた荒木氏は、彼に家一軒を贈つたのだ。この小作人にして、この地主あり。村内の者擧つて、兩者の行爲に感歎の聲を發したのだつた。

三

彼等兄弟の奮闘は漸次酬いられて、田地を買入れ、畑を

買入れ、生活も次第に豊になつて来た。

地主荒木彦九郎氏の、彼等に對する信用は非常なもので、田地を買入、普請等をするに就いて、入用の金は、信用貸でいくらでも融通された。

血の出るやうな努力と荒木氏の助力のお蔭で、明治四十年の秋には、田地八反四畝七步、畑二反一畝十五步、それに松林五反歩を自分の名義にすることが出来た。爾來彼はこの土地を守つて農耕に汗みどろの努力をつゞけると共に、家業の暇な時を利用して、賣薬に精出し、年と共に家運を挽回した。

それに下賜される恩給も大正十二年以來、年額五百四十圓となり、生活はいよゝゝ樂になつてきた。

七人の兄弟は皆一里内外のところにそれゝゝ一家をなし、いづれも豊かなる生活を営んでゐる。

彼は當年五十二歳、二十一歳を頭に三人の親である。現在では村内中流の生活をなし、常に奉公大義に殉ずるの精神を持ち、資性温厚、村内の信望厚く、家庭も至つて圓滿である。

闇に輝く光

|| マツサイジ師として成功した藤本財吉氏 ||

本籍地	香川県大川郡引田町二三九一番
程負傷	兩側眼窩骨傷貫通銃創

日露戦争が始まると、日本の國民は上下をあけて、熱狂の嵐に捲きこまれた。明治三十五年の除隊兵であつた藤本財吉も、若い胸に血を躍らせつつ、出征の日を待ちわびてゐると、間もなく召集令は下された。陸軍歩兵一等卒として、彼は愈々戰場へ赴く事になつたのだ。

『お國の爲だ。しつかり働いておくれよ。』
『後の事は俺が居るから心配するな。』

母親と兄の二人は惜別の涙をかくして激勵した。彼は幼い時に死別れた父の墓に詣でて、奮闘を誓つて出發した。彼の所屬は歩兵第十二聯隊第九中隊であつた。戦友の誰も彼が決死の覺悟で船が盛大な見送りを受けつつ詫間灣を出る時には、

『もう二度と此處へは歸らないぜ。』
『見納めだと思ふと、懐しい景色だな。』

などと、悲壯な氣持で語合つたものであつた。苦しい陣中の生活がそれから暫く續いて、八月の二日に上等兵に昇進すると、間もなく大孤山の戦闘。

八月の八日、——これこそ彼にとつて終生忘れる事の出來ぬ日だ。砲煙を濺り、彈雨を浴びて、彼の中隊は突進又突進を續けた。露軍は優勢な兵力を以て頑強に戦つた。盛り返し、盛り返され、彼の軍は文字通り血みどろの闘争を繰返してゐる激戦の最中に、彼はとある塹壕の前で、げつたりと倒れた。憎む可き敵の彈丸が左眼から右眼へ貫通したのだ。——しまつた。やられたのだ。焼火箸で頭を抉られる様な激痛、そして天地が崩れかか

つて来た様な騒音と、一瞬にして閉ざされてしまった修羅場の視界。

——残念だ。

さう思ひ乍ら、しつかと銃を握りしめて、

『萬歳！』

と叫んだが、そのまゝ気が遠くなつてしまつた。

意識を恢復した時には、彼の身體は野戦病院の一室に横へられてゐた。併しもう彼の兩眼は、既に物を見る力を失つてゐたのだ。小銃弾は左眼の視神経を切断し、右眼球を全く破壊した上に、嗅覺神経すらも目茶々々にしたのである。

長い病院の生活を終つて彼が歸郷すると、家の人々も、村の人々も、名譽の負傷者として彼を慰めたはつてくれた。

それから三年の長い間、彼は家の中で寝て居なければならなかつた。起きると貧血を起して、直ぐに倒れるのだ。だが貧しい農家で、而も兄一人で營々と働いてゐるのに、傷病者とは云へ、若い自分が寝たきりで、何一つの手傳

と訪ふ人聲が聞えて来た。

彼はハツと夢から覺めた様に立上つて、

『誰方です。』

『私ぢや。財吉さんお精が出るなう。』

にこやかに話しかけつつ、近づいて来たのは、何時も暇を見ては立寄つて、彼に親切に慰めの言葉をかけてくれるこの村の村長であつた。

二

『實はなあ財吉さん。あんたから度々相談を受けるので、私も色々と研究して居つたんぢやが、これならばあんたにも適するだらうと思はれる職業を考へついたものぢやから早速やつて来ましたよ。』

『えつ？ それは何です、どんな事です。』

彼は膝を乗出した。

『それはな、此處らでは餘りやつて居らんが、マツサージぢや。』

『マツサージ？ つまり鍼灸師ですわね。』

ひも出来ないといふのは、心苦しい極みである。

失明の苦惱と、家人への氣がね。それは彼をいたく憂鬱にした。三年目に漸く起上れる様になると、不自由を忍んで、藥細工の手傳ひなどを始めたが、盲人の手探り仕事位が、何の家計のたしにならう。恩給の百三十七圓三十錢は貧しい一家の重大な助けにはなると云つても、それで生活の安定が得られる筈は勿論ない。

——盲目でも、どうにかして獨立し、母親を安堵させてやり度い。

さうは思ふのだけれ共、さて不具者がどうすれば、世の中を渡つてゆけるであらうか。

彼はただいらく／＼と獨り悶え乍ら又此の三四年を過ごして来た。

——もう俺も三十二歳だ。眼さへ見えれば立派に一人前の男として立つてゆけるのに、あゝ、口惜しいなあ——。納屋に坐つて、何時までも暗い想ひをたくつてゐる彼の耳に、

『今日は……、誰も居りませんか。』

『いや、一口に鍼灸師といふと何だか下品に聞えるが、今都會ではマツサージ師と云つて、とても流行つて居るさうぢや。勿論鍼灸も一緒にやるのぢやらうが、マツサージの方は機械を使つて文明的で品がいいし、覺えるのにもさう骨は折れないといふ話。それで充分暮しは立つてゆくさうぢやから、ひとつ奮發してやつて見なさんか。その氣があつたら、私が高松の盲啞學校から規則書を取寄せて、とくと研究して上げよう。』

併し彼は黙つて考へこんでしまつた。鍼灸にしてもマツサージにしても、どうせ人の情に縋つて僅かの金を稼ぐ、いはば乞食商賣に類したものではないか、いくら盲目になつても未だそこ迄落ぶれたくない——と、世間を知らぬ彼の一徹な勝氣が、村長の折角の言葉も、快く受入れないのである。村長は少し不本意さうに歸つて行つた。

併し彼の責え切らぬ態度にもこりずに、人の好い村長はその後もしきりに、この職業をすすめるに來るのだつた。その熱心な親切に、彼の心もいつしか動いて來た。母親や兄に相談すると、それはお前の心任せだ——といふ。



—よし、何時迄も職業の體裁にこだはつてゐても仕方はない。又考へて見れば、どんなに下賤に見える商賣でも額に汗して報酬を得る以上、それは神聖な勞働といはねばならぬ。やらう。男らしく全力を盡してやらう。彼は遂に決心した。そして高松の盲啞學校專修科に入學

する事になつた。それからの彼の勉強ぶりは物凄かつた。彼は今や帝國軍人として戰場に望んだ時の勇猛心を勉學の世界にふり向けたのだ。そして困難な點字も忽ちに覚えこみ、鍼灸、マツサージを習得して、三年の後には、首尾よく開業の資格を獲得した。その後の事は、彼の偽らざる言葉を記述した方が、くだ／＼しい叙述よりも、簡明にして印象深い。彼は靜かに過去を振り返つて言ふ。『始めの内は辛い思ひました。併し自分の腕で獨立して生活する悦びは又格別でした。世間の人達も決して冷いものではなく、暖い心を以て接してくれたので、急に今迄の無明の闇が霽れて、人生が明るくなつた様な氣がしました。そして私が唯ありきたりの皮相な概念でこの職業を蔑しもの様に考へてゐたのも、全くの間違である事が判りました。斯くして私は暫く大阪で開業してゐましたが、間もなく現在の土地に移り、

以來順調に今日に至つてゐます。今では恩給もずつと増し、努力の甲斐あつて相當の收入をあげて來ましたので、最近二三年に亘る病臥生活にも難なく耐へる事が出來、どうやら暮しに困らない程度の貯へを持つて、一家四人の圓滿な明るい家庭を樂しんで居るのです。』

三

香川縣大川郡引田町の藤本財吉氏は、斯うして、自ら不具の身を鞭ち、輝しい甦生の生活を樹立した。併し此處に至るまでには、彼の内部的な生活に、敬虔な努力が費されてゐる事も見逃してはならない。彼は己れの悲痛な體驗に省みて、同じ苦しみに喘ぐ人々に向つて、宗教心把握の必要な事を、聲を大にして叫びかける。人生の第一義は自己完成にあります。即ち人間の終局目的は自分自身を完成するにあると固く信じて、それに向つて努力精進するのです。だが單なる精進では中々吾々弱い人間には困難であるから、そこで宗教の力を借りて念佛生活に入るのです。念佛とは何であるか、即ち此處に、如來

様といふ至大、至善、至美の圓滿具徳の靈格者の存在を信じ、而して如來様は常に吾々の眞正面に居られて我等を救はんと思ひ、吾々が心から南無阿彌陀佛と如來の御名を呼ぶのを待ち侘びてゐるのである、といふ事を固く信じて疑はず、且吾も亦如來様の如き圓滿具徳の人格者たらしめんと意欲して、一心に南無阿彌陀佛々々々々々と唱へるのであります。斯くして行住坐臥、一心に念佛してゐるうちに何時かは心の眼が開き、何とも形容し難い喜悅が湧いて來て、不平も不満も、僻みも、呪ひも、苦惱も消え失せ、そこにはただ感謝の念のみが生れます。この光明歡喜の世界こそ宗教の絶對境であると共に、又人間を一步々々向上させ、社會國家を正しく、明るくするものでありませう。私は人間生活の安住地は此處に在ると信じて疑ひません。況んや我等傷痍軍人の安住地に於てをやであります。『理窟や文句をゆるさぬ崇嚴な宗教生活を、己れの身に體得し、この平和と歡喜を人に分たむとするに至るまでには、恐らく何人も企及し難き、克己、忍耐の尊い内省苦行が續けられた事であらう。』

同病者の爲に

|| 盲啞學校經營に盡瘁せし柴内魁三氏 ||

本籍地	盛岡市仁王第三地割平山小路七十七番地
程負傷	兩眼上眼瞼貫通銃創失明

陸軍歩兵大尉柴内魁三氏の経歴の中から、日露戦争従軍記だけをぬいても、それだけで血湧き肉躍る獨立した讀物となるであらう。それ程彼は、三十年前の滿洲の戦場で、悪戦苦闘、奮戦に次ぐに奮戦を以つてした勇士である。大尉が、野戦歩兵第十七聯隊の小隊長として、出征の途に就いたのは、明治三十七年十月八日のことであつたが、早くも十三日には、沙河の戦闘に参加した。

更に、十二月五日には、かの難攻不落の旅順口でも有名な、二〇三高地の攻撃軍に参加した。翌れば明治三十八年、一月二十五日より同二十八日に渡る黒溝臺附近の戦闘に於ては不幸半數の部下を失つたが、大尉は微傷だも負はなかつた。二月二十三日よりの奉天附近の會戦では、月堡子の攻撃に際し、敵砲弾のために唇に擦過傷を受けた。

ついで三月六日、楊子屯の夜襲戦に参加して、翌七日、繼續戦闘中、敵の猛射を受け、一丸宛、兩度に互り上眼瞼に貫通銃創を受けた。そして、この負傷によつて、彼は全く戦闘能力を失つてしまつたのである。

大尉は取り敢へず假纏帶所に收容され、それから大連野戦病院に送られた。そこで、やや傷の癒へるのを待つて、本國に送還され、廣島衛戍病院に收容されたが、後、東京澁谷豫備病院に入院した。

しかし、傷漸く癒え、親族知己に護られて澁谷豫備病院

を退院した時、黒眼鏡に隠された大尉の兩眼は無慘にも盲ひてしまつて、もう永久に光を見ることの出来ない、生れもつかぬ不具の身とはなつてしまつてゐたのである。

迎への人々は、この變り果てた大尉を護りながら、慰さめの言葉もなく打ちしめつてゐた。そして、出迎人同志、大尉に聞えぬやうな低聲で、そつと

『お氣の毒な』

とか、

『國家の爲とは云へ、あんなになつてしまはれて...』

とか、氣の毒さうにささやき合つた。

人々の顔は曇つてゐたのだ。

だが、どうしたわけか、大尉自身は至極朗らかで、出迎人の誰彼に、元氣な聲で、留守の間のことをたづねたりした。それが、わざと元氣を裝ふてゐるやうにも見えて、人の顔は益々曇るのであつた。

『まあ、生命に別條がないだけでも拾ひ物ぢや。兩眼は、國家のために捧げたと思つて諦めるんだな。これからは、まあ、呑氣に暮して行くことにするんだな。』

舊友の一人が、大尉の肩に手を掛けながらさう言つて慰さめた。すると、

『呑氣にだつて...』

と、見えない黒眼鏡を舊友の方に向けて、大尉は咎めるやうに微笑つた。そして、

『呑氣などどころか、僕は益々働らかなければならないと思つてゐる。』

と、謎めいた事を言つた。

『えッ！ かう云つちや失禮だが、そんな體となつて、君は一體どんな仕事をしようと思ふのかね?...。不自由な身になつて、心境の變化を來したとでもいふのかね?』

『まあ、さうだよ。』

『で、如何なる心境の變化を來したといふんだ——何をやらうといふのだね?』

舊友は、つひ、釣り込まれて云つた。

『不言實行だよ。今に分るよ。』

と、大尉は又朗らかに笑つた。



人々にも、大尉が、わざと朗らかさを装つてゐるのでは
ないことが、段々分つて来た。そして、自分でも亦、吻つ
と救はれたやうな氣持になつて行つた。
大尉の凱旋の祝宴が、盛岡市仁王第三地割平山小路の、
大尉の家で催された。
澁谷豫備病院まで迎へに行つた親戚知己の他に、それら
の人々の家族だの、昵懇の間柄の人だの、近所交際をして
ゐる人々だのが集つた。
祝宴とは言つても、凱旋をした人が生れもつかぬ不具に
なつて歸つてゐるので、座はやはり浮きたたなかつた。
床の間の前に靜かに坐つてゐる大尉の、黒い眼鏡に、氣
の毒げな又痛ましげな視線を走らせては、ぼそぼそとささ
やき合つたりしてゐた。
その浮き立たぬ座を、無理に浮立たせやうと骨を折つて
ゐるのは、大尉を東京まで迎へに行つて、大尉が何かしら
確固たる信念をつかんだらしいことを知つた、大尉の舊友
であつた。
「皆さん！ 大尉の心境は朗らかなんですよ。兩眼を、

天皇陛下のために、國家のために捧げたことを、悲しん
てはゐらないですよ。さア、皆さん、大いに朗らかになつ
て下さい。」
少しは酔も手傳つて、そんなふうな聲を濁して歩いたが
やつぱり座は浮き立たなかつた。
親戚の老人が立つて、形式的な祝辭を述べた後で、大尉
が立ち上つた。盲ひた兩眼は黒眼鏡に遮られて見えなかつ
たが、口邊には穩やかな微笑が漂つてゐた。息詰るやうな
拍手が室中にこめた。
やがて、その拍手の止むのを待つて、大尉は落ちついた
信念に満ちた聲で語り出した。——座はしいんと靜まり返
つて、しはぶきをする人さへなかつた。
「皆さん！ 皆さんは、私が生れもつかぬ不具者となつた
ことを、私のために悲しんでゐられるやうであります、が、
實は私は、このことを、皆さんに喜んで頂きたいのであり
ます。幾萬の同胞が、戦場の鬼と化しましたことを思ひま
すと、兩眼を失ふなんぞ、何程でございませう。
天皇陛下の爲、國家の爲ならば、一命を捨てて顧みない

のが、日本軍人の精神なのでございます。それを思ひます
れば、體の一部分しか捧げることの出来なかつた私などは、
大いに愧ぢ入らなければならぬと思ふのであります。だ
が、何事も天命です。天皇陛下の爲、國家の爲、一命を捨
つることの出来なかつたことは残念ですが、これは恐らく、
生きてゐて何事かを成せ、といふ天の命でありませう。さ
てそれならば、私は何を成すべきでせう？ 五體の完備して
ゐた出征前ですら、これといふ仕事もなしてゐない私が、
ましてや光を奪はれた今日、天は私に何事を成さしめよう
とするのでせうか？ 私は今更ながら、盲學者鳩保己一の
逸話を思ひ出すのであります。風に灯を消された弟子たち
に向つて、へさてさて眼明きといふものは不自由なものだ
と言つたといふ、あの有名な逸話を。皆さん！ 世の中に
は、盲目の方が重寶な場合があるものなのでございます。
いや、盲目でなければならぬ仕事があるものなのでござ
います。私は、天が、私から光だけを奪つて生命を捨てさ
せなかつたのは、その盲目でなければ出来ない仕事を、私
にせよと命じたのだと信するのであります。これから私は

天が私に命じた仕事に私の生涯を捧げるつもりでありま
す。實に、私は、失明をしてはじめて、此世に生き甲斐を
見出したやうな氣がするのであります。どうか、これから
私の仕事を見てみて下さい』
言葉は切つた大尉の口元には、依然として穏やかな微笑
が漂つてゐた。眼鏡の黒い二つの玉が、何かしら神聖なも
のを包んでゐるやうに、人々には感じられた。

三

大尉の所謂、與へられた天職といふのは何であつたか？
それは、一生を盲啞子弟の教育に捧げることであつた。
で、その準備のために、明治四十二年三月末單身上京
した大尉は、小石川區指ヶ谷町に在る官立東京盲啞學校教
員練習科に入學、翌年の三月優秀の成績を以つて卒業した。
卒業證書を握ると、大尉は直ちに郷里盛岡市に歸り、早
速私立盲啞學校設立計畫の實行に取りかかり、早くも翌
四十四年八月には岩手盲啞學校の設立、並に大尉自ら同校
の校長たることを認可された。そして、九月一日から、同

市平山小路の一民家を借り受けて授業を開始した。

經營方針としては、自ら社會事業を興して財源をその收
益に求むることにしたが、その事業の主なるものは、

- 一、全國の軍隊、朝鮮、滿洲屯在の除隊兵に對するメリ
ヤス製シャツの販賣。
- 二、小林區署より拂下げた薪炭の販賣。
- 三、知名の士の揮毫、畫會等に依つて得たる書畫の販賣
- 四、その他種々の催物。等。

そして、着々として好成績を収めたが、その収益だけで
は經費に間に合はないため、宮内省の御内帑金、其筋の助
成金、補助金等に頼るところも亦多かつた。すなはち――
岩手縣からは、大正二年より同十三年迄補助金を交付せ
られた。

盛岡市からは大正元年より同十三年まで補助金を交付
せられた。

内務省からは大正五年より同九年まで助成金を交付せら
れた。

文部省からは大正十年より同十三年まで奨勵金を交付せ
られた。

宮内省からは大正九年より同十三年迄御内帑金を下賜さ
れた。

尙、その間行はれた江湖同情者の喜捨は、感謝を以つ
てこれを受けた。

かうして、大尉の苦闘は漸次むくいられて社會の耳目は
大尉の仕事の上を集められ、つひに、大正十四年四月一日
から、私立岩手盲啞學校は、岩手縣立盲啞學校となつてそ
の權威を伸張した。従つて、個人としての大尉も亦、社會
的にむくはれない筈はなく、昭和三年には、教育功勞者と
して岩手縣から懷中時計一個を授與せられ、昭和八年には、
同じく教育功勞者として帝國教育會から表彰された。

なほ大正十一年七月七日、攝政宮殿下北海道御見學
の途次盛岡驛御通過に際し、職員生徒奉迎申上ぐると同時
に殿下には武官長をして校長柴田魁三に負傷當時の状況
並に學校の近況を御下問あらせられた。
更に降つて昭和三年十月六日、天皇陛下には東北地方

に於ける陸軍特別大演習御統裁のため御鳳章を止めさせら
れた際、特別の恩召を以て海江田侍從を御差遣あらせら
れ、學校の状況その他に關し御下問あらせられた。大尉は
天恩の無窮にたいく感涙にむせぶのみであつた。

尙、同校創立以來の卒業生及び現在生の數字を擧ぐれば
(昭和八年十月現在) 次のやうである。

- 卒業生 三一七名(内盲生一九四名、雙啞生一二三名)
- 現在生 九二名(内盲生三九名、雙啞生五三名)

四

教育事業だけでも、失明の身にとつては相等骨の折れる
仕事であるのに、大尉の努力は、更に其他の公共事業の上
にまで及んでゐるのだから驚嘆するではないか。

- その主なる例を擧ぐるならば、
- 一、年來傷痍軍人並に戦死病歿者遺族の生活上に意を
用ひたが、大正十五年傷痍軍人會を組織して、具體的
に慰藉その他の方法を講じはじめた。
- 二、同年岩手盲啞教育後援會を組織してその會長となり

具體的な仕事としては、取り敢へず、貧困盲啞兒童に對して給費をすることになった。

三、盛岡市北部地方は飲料水の質がよくないので、昭和三年、ボーリングを用ひて、二ヶ所に百餘尺の井泉を掘り、組合組織で約二千戸に地下水を供給した。尙こ

四、昭和六年同志と共に盛岡消費組合を組織してその組合長となつた。現在、四百餘名の組合員があり、物品を廉價に販賣してゐる。

五、昭和八年盛岡市購買利用組合盛岡病院を創立してその長となつた。利用区域は盛岡市並に岩手、紫波の兩郡。現在の組合員數約四千で、組合員の入院患者百餘名、外來患者二百名を超え、院運日に日に隆盛に赴きつつある。

一寸くらの體をお休めになつては...

と、人はよく大尉にすすめる。

しかし、大尉はそんな時、微笑しながらかう答へるのである。

『私は働くことだけに生き甲斐を感じてゐるのです。日露戦争の時死ななかつたのも一生を社會のために捧げよ、といふ天命だつたと信じてゐるのです。仕事さへしてゐれば心も常に明るく生きてゐる幸福を感じるのです』

そして、老いてなほ元氣よく、身を粉にして社會のため民衆のため、そして不幸なる同病者のために活躍をつとけてゐる。彼の如き信念に燃える人士でなくては到底企て及ぶところではない。

誠實の二字

貴金屬商として成功した遠藤納氏

本籍地	石川縣金澤市尾張町五十六番地
負傷	下顎骨挫滅砲創

『遠藤さんはあれで若い頃にやあクラリオネットなどを吹いてゐたんだぜ』

『ほんとかい？』

『ほんとかい』

『さうかなあ』

『おや、お前俺のいふことを信じないのかい？』

『どうもね、お前のいふことよいやア何時も途方のないこ

とだからね、この間もさ、一杯飲まうといつたらう。それで俺ア景氣がいゝらしいなつていふと、もちだつて、ちや金はあるんだと訊くと、天下の廻り持ちぢやねえか、何時もビイ／＼してゐねえつて反つくり返つていつたらう。俺アもう安心して、矢張り眞實の友達といふもなあいもんだ。うれしいもんだ。ちよいとづきあひでは、お互ひにいゝときはいゝ顔をするが、少しでも貧乏をするとなんで相手にしないからね。町でひよつこり會つても、ぶいと横をむいて鼻も引つかけない風をするんだから癪に障るよ。そこへゆくと昔からの古い友達はさうぢやねえ、何處で會つても氣持ちよく腹の底を割つて話をする。何うだといとか何とかいつて、揚句の果が、くよくよ／＼するなよ、一杯飲んで貧乏神を追拂はうと来るよね。——丁度お前がさうだと思つたんだ。ところがさ、二十本もあけて、俺アいい氣持になつてると、お前のいひ草は何だい、少し金が足りねえ、いやなあに直ぐ拵へて来るから濟まねえが暫く待つてくれつていふんで、俺アそれを信じてちびり／＼やりながら待つてると、お前は、なか／＼來ねえ、もう来る

か、もう来るかと思つてるうちにかんばんさ、俺ア金は一
文もねえ、仕方があるから紐をつけてお前のうちイ行つて
見ると、お前は何うだい、ぐうぐう高軒ぢやねえか……」
『いや、あの時ア濟まなかつたよ、眠るつもりぢやなかつ
たんだが、つい横になつたのがいけなかつたんだ』
『馬鹿、實際お前は無責任極まるよ。その前だつてさ』
『もういゝよ、さう怒るな、今度ア屹度、御恩返しをする
よ。』

『何時もその手だから、お前は信じられねえんだ』
『何も俺ア、決してお前を欺すつもりでやつたんぢやねえ
んだから、勘辨してくれよ。思はず結果がさうなつたんだ
からな』
『お前はほんとに圖々しいよ。馬鹿にするのもいゝ加減に
しろよ』

『まあさう怒るな、悪氣があつてやつたんぢやねえから
な』
『フ、フ、フ、フ……』

二人の男は兼六公園をぶら／＼歩きながら、こんな他愛

もないことをいひ合つてゐた。どちらも人は餘程いゝと見
える。怒つてゐるやうで、何時となく心がとけ合つてゐる
やうな、如何にも幼な馴染といつた仲である。

小春日の陽が、さん／＼と、木の芽や草にふり灑ぎ、
早咲きの梅が馥郁とした香りを四邊に撒いてゐた。
あちらのベンチ、こちらのベンチには、若い夫婦が――
中にはラブ・ソングのコーラスに心を躍らしてゐるものも
るよう――微笑を頬に湛へて、しきりに笑つたり、囁いた
り、早春の日曜日は幸福な色彩に溢れてゐた。

二人の男は、さく／＼と砂利を敷いた道に音を立てゝ歩
いてゐた。
『ところで、お前のいふ遠藤さんてえのは、さつき會つた
遠藤さんのことかい？』

と、かう問ひかけたのは、何時も喜劇的に胡麻化されて
ゐる男だ。
『うんさうだ、あの遠藤さんだがね、お前にやアあの人が
俺たちの時代にクラリオネットなんか吹いてたとは思はれ
ぬえが、こりやあほんとのことなんだ。昔からあんなにグ

ロテスクな顔ぢやなかつたさうで、俺ンとこの親爺にい
せると、なか／＼何うして紅顔の美少年で大した評判だつ
たさうだよ。それが間違つて小間物商になつたといふんだ
が、音楽家にならうとしてなれずに、金澤市一流の商人に
なつたといふのは面白いぢやねえか』

『そりやアほんとか？』
『モチさ』
『さうか、面白さうだな。知つてゐるなら話さないか』
『よし、話さう』

二

旅順は全滅、全滅、全滅の文字で埋まつたところなん
だ。今でも土を掘ると、骸骨が出たり、弾に穴を開けられ
た水筒がころがつたり、物凄い戦場さ。

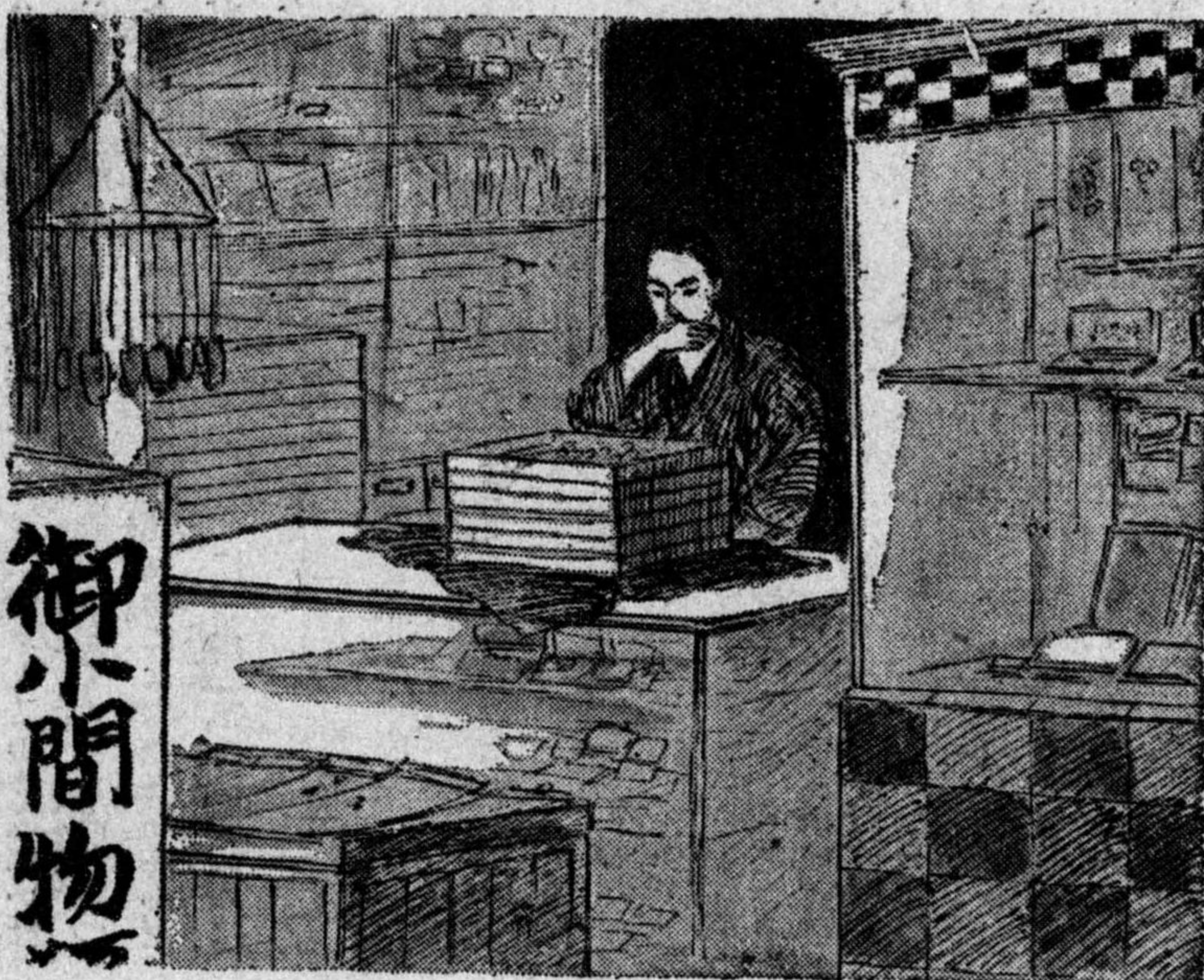
乃木さんが一日に半年分の弾を撃つたつていふんで、ど
えらく叱られたさうだが、それでも落ちなかつたんだ。
その時の乃木さんの苦しさいふまでもないこつたが、
かういふ命令があるよ。

聯隊が全滅したら、旅團長は旅團の總豫備隊を以て突撃
すべし、旅團が全滅したら、師團長は師團の總豫備隊を以
て突撃すべし、師團が全滅したら、軍司令官――乃木さん
自身だね――は軍の總豫備隊を以て突撃するてんだよ。
又或る師團長の報告には、我が師團は殘軍を以て、たゞ
一回の攻撃をせんとするのみ――何といふ悲壯な報告ぢや
ないか。

我が軍は累々たる屍を踏み越え／＼突撃を敢行したん
だが、露軍はビクともしないんだ。
雀が鷹に向つて行くやうなもんで、てんで相撲にならな
いといふ始末だ。

遠藤二等卒は、高地の歩哨勤務で、眼を尖らして、露軍
の保壘を睨みつけ、死んだ戦友のことを思つては何うして
も仇を取らなまやア死にきれない心持で、十二月の凍える
やうな寒さを忘れて、眞暗な空の下に立つてゐたんだ。

彼の胸の中には、遠い故郷の思ひ出が、町の人々の顔や
兼六公園の風景などがスクリーンのやうに浮び上がり、そ
して、今頃みんなは何をしてゐるだらう、と思つたり、そ



の人々の幸福のために選ばれてゐる自分を思つたり、立派な手柄を立てたい、といふ考へが湧いて来るのを何うしやうもなかつたらう。

時をり風がひゆ　唸つて過ぎると、彼はハツとして、「敵？」と身構へたりした。後は深く沈黙なんだ。晝間の激戦はハタとやんでしまひ、もう二度とあゝいふことはないやうにさへ思はれるくらゐ静かて、音といふ音はこの地上から消えて失くなつてゐた。

と、突然だ。

パチ〜と、小銃の音が闇の静寂を破つて聞えた。その音は、前の方からか、右翼か左翼からか、はつきりわからなかつた。誰か悪戯者が、故意にやつてゐるやうにも思へた。勿論彼は全身を耳にして、音のする方向を確かめようとしたのであるが、小銃の鳴つたのはそれきりだつた。時間にしたら、一分とは續かなかつたかも知れない。戦場にあると、頭が狂つたやうになつてしまふこともあるさうだから、或ひは彼の耳が狂つてゐたのかも知れない。彼自身はそんな腰抜けぢやないがね。

御小間物

しかし、戦場だ。敵の弾は、何時何處から飛んで来るかわからない。

彼は尙ほも耳を澄ましてゐた。

と、パチ〜と、しかも彼の頭上をかすめて行くもの、足元に炸裂するもの、横にそれて行くもの、その中の一發は、彼を無言のまゝぶつ倒してしまつた。

三

彼を撃つた弾は意地が悪いや、ところもあらうに下顎を滅茶苦茶にしたんだ。美少年と謳はれた顔は一夜にして天の醜男に變つてしまつたんだ。

顎から右の頸にやもりの這つてゐるやうな傷はまだいゝとして、下顎の骨は殆んどなくなり、齒は折れてしまひ、絶えず涎が流れて、ものを食べることも出来なければ、話をする力も失つたんだ。

そこで整形術を施したんだが、言語はハツキリしないし、ものを噛むことも出来ないんだ。

顔が醜くなつたくらゐなら辛抱も出来ようが、人間とし

て生きて行く一番大事なものだ失はれたんだからたまらな

いよ。

嘗てはクラリオネットなんかを吹き、未来の大音楽家を夢見てゐたのに、それは永久の夢になつてしまつたんだ。...

『こりや嘘ぢやない、ほんとなんだよ』

と、しみじみとして、今まで話してゐた男はいつた。

『さうか、しかし、遠藤さんを知つてゐるものゝ人氣は大したもんぢやないか』

『うん、そこだよ、俺たちは、少くも俺はこれからは、のらくらしてちやゐられなれないと思ふんだ』

『そりやア當り前のことぢやないか』

『考へてみると遠藤さんの苦勞は並大抵ではなかつたらうな。しかし、御國のために傷つた人だ。お國で放つておく譯はない。軍人恩給法第九條第一項症に該當するといふので、相當の恩給を頂いてゐる。まあ、普通の者なら寢て暮らすかも知らん。しかし遠藤さんはその恩給を基金に

して貴金屬小間物商を開いたのだ。人間といふ奴は、一生働くやうに出来てゐるんだ。働かないで居れる者は、よつほどの馬鹿だよ。遠藤さんが商賣を始めるとみんな同情した。御國のために傷ついた方だから、みんなして買って上げませうとて、お客さんも多い。さうなると、遠藤さんの方でもお客さんの親切に對して御恩報じをしたい心持になる。兩方の心持がびつたりと合つて、善い品が安く買へる。これで失敗しては商道は立つて行かない。最初は元さへ取りかへせばよい。遊んでゐても仕様がなからといふ氣持だつたのに、元どころがどん／＼子がふえて、年々貯金はふえるばかりだ。かくて二十餘年、自分の負傷も忘れて營々と働いてゐる中に、いつのまにか數萬の産をなすやうになつたのだ。今では遠藤貴金屬店といへば廣い金澤市中でも知らない者もない程の大商店だから、貴金屬小間物同業組合の役員に推されてゐるとかいふが、實際偉いもんだよ』

『恩給といへば拾ひ物みたいにしてゐる人も少くないのにそれを資本にして現在の地位を築き上げたんだから、矢つ

張り凡人ではないな』

『そればかりか、あの體でさ、金澤市第四分會の救護班役員の籍にも入つてゐて、何か公共事業の時には、口も碌々利けないのに、眞先になつて働くのだから、いよく凡人の眞似られるところではないよ』

『かうなると、俺達も、ぐづ／＼しちやゐられぬよ。これからお互ひ飲み競べをしたかはりに、働く競争をしようぢやないか。あの遠藤さんのやうにならずとも、少しでも世のために働けるものにならうぢやないか、地位や財産は何うだつていゝ、人間の價値はそんなもので極るぢやない。その正しい心から生れた仕事によるんだからね』

『よし、働かう！』

『うん働かう！』

喜びを知る人

雜貨商として成功した遠藤盛芳氏

本籍地	福島縣雙葉郡川内村大字川内字
程負傷	澤五十番地 頭部大打撲傷

遠藤盛芳は海軍一等水兵だ。

明治四十三年の暮に横須賀海兵團に入團してからもう足掛け六年になる。

『早いものだなア』と、彼はその夜箱のやうな臥床で毛布にくるまつて指を折つてゐた。

彼にとつてその六年間はあまりに短かつた。
『人生は坂に車を押す如し』

と徳川家康はいつたさうだが、彼も自分の生涯にもつともつと波瀾があつてよささうに思ふのだが、海上生活の六年間は坦々として平和に過ぎた。尤もその間には生命的に難航をつゞけたことがないわけぢやなかつた。恐ろしい濃霧につままれ、怒濤と闘ひ、疾風に抗したことも數へきれないほどであつた。が、それがみな楽しい思ひ出の頁に繰り込まれ、淡紅色に染まり、永遠の彼方に消えてしまつた。——幸福な過去よ！

幼ない頃、彼はどんなに海に憧れたことだらう！ 青い青い海、青い／＼空、白い鷗が空に浮き上がり、いろ／＼な魚が泳いでゐる。其處はお伽噺の國に通じてゐる唯一の世界であつた。祕密の扉を開いて眞珠を漁る海女の話も本で讀んだ。又、鮫や大蛸と闘つてゐる潜水夫の繪も見た。或る時は地球儀を凝視めて、日本の國のあまりに小さいことに驚き悲しんだ。四方八方海に取りかまされてゐる姿が物寂しかつた。狭い陸の上では大手をのばして自分の働く餘地がなささうに思へたのだ。そして、海に關するあらゆるものが、幼い彼の血を湧き立たせた。

そのうち仁川沖の海戦によつて日露戦争の幕が切つて落された。

連戦又連勝だ。海に陸に、そして、東郷大将の率ゐる聯合艦隊は、日本海で、世界最強を誇つた露國の精銳を木葉微塵に撃滅してしまつた。

その時であつた。連藤は未來の標的をかつきり擲んだのである。

『さうだ、海軍軍人にならう！』

彼の目的は達せられた。しかも幸福であつたのだ。

彼は六年間の月日が、夢のやうに過ぎて行つたのを思つて無上に樂しかつたことが嬉しかつた。世には希望を空しくして自殺をさへする人々が多いのだ。それ等の人々はそれぞれあるひは自分のやうに、いや、もつとく樂しい夢を未來に馳しらしてゐたことだらう！ それなのに、運が悪くといふのか、魔がさしたとでもいふのか、人生を自ら煉獄にしてしまひ、敗北の黒袴に圍んでしまつたのだ。――彼は、自分が容易く希望を達し幸福なのが、何か勿體ないやうな、又これはいふのか、とさへ思ひ何時となく深い

眠りに落ちて行つた。

二

海の色は青く紺の布を張りつめたやうであつた。眞夏の陽の光が、焼きつくやうに照つてゐた。

左手に房總半島が突き出て、近くの海水浴場では、幼い河童たちが、ばちや／＼やつてゐた。その間に混つて、女がきやつ／＼いつてゐる。

横須賀の港は軍艦で一杯だつた。巡洋艦、驅逐艦、戰艦、等々があちらにこちらに點々と錨を下してゐた。

軍艦旗が、快い微風にはた／＼とひらめいてゐる。小蒸気が鼠のやうに走り廻つてゐるのも愛嬌ものだ。

遠い沖では、帆を張つた舟がのんびりと流れてゐる。海は何時もそれ自身素晴らしい畫であり、詩であり、例へやうのない藝術品だ。

連藤は軍艦隊名の艦橋で、石炭積載作業に従事してゐた。クレインで捲き上げ／＼するのだ。空に大きく輪を描いて。ずし／＼と落ちて來、大口開けて石炭を捲き込み、

不可能であつた。

『こんなことはいふのか？』

と、自分の幸福に酔つてゐた彼は、悄然として故郷（福島縣雙葉郡川内村）へ歸つて行つた。

彼の家は百姓であつた。兄は既に結婚し、弟は彼と同じやうに水兵になつてゐた。

家には歸つて來たものゝ、もう水兵になる前のやうに鍛を擔ぐことは出来なかつた。だが、六年間の海上生活は無駄ではなかつた。機械を扱ふことなら、さう人には引けを取らないやうになつてゐた。

『何でもいふ、お前の好きなやうにするが！』

父も兄も優しくいつてくれた。彼は毎日々々いろいろ考へた。と、誰にも必要な、日用

缺いてはならない商賣をするのが一番い／＼やうに思へた。そのうち幸ひに村の電氣會社員の口が見つかつた。彼はそこで働きたが、村に小さな雜貨店を開いた。

しかし、二つの仕事を一つの手ですることは容易なことではない。

唸つて宙に浮き上り、くるツと首を廻して、ガタ／＼バラバラと吐き出してしまひ、又頭を擡げてする／＼と落ちて來て石炭を口に入れるのであつた。

『いよく／＼近いうちに出航か、樂しいなア』

と、彼は心の底で呟いた。出航の日が待遠しかつた。航海してゐると、時に港に入ることが故郷に歸つたやうに懐しく嬉しかつたが、港にゐると矢張り海が戀しかつた。

クレインは巨大な首を、ぶらんこのやうに宙に持ち上げた。と、何うしたはずみか、巖のやうな石炭の塊が落下して來た。

『アツ！』

彼の體は石炭と共に、もんどり打つて海中へ沈んでしまつた。

三

遠藤は不思議に助かつた。頭部に大打撲傷を受け、公傷として横須賀海軍病院に入院した。そして八週間ばかり經つて退院することになつたが、再び兵役に従事することは



置かう！
彼は更に自分の思想を掘り下げて行つた。
一體労働の目的といふのは何處にあるのだらう？
國家の隆盛と子孫の繁榮のためであらう。それは間違ひのないことだらう。
だが、もつと大きなものがありはしないか？ 言葉の上の飾りだけでなく、もつと人間の心の底を揺り動かすやうにいへることがありはしないか？
あるある...自分たちが労働するのは、前の人が仕残してくれた仕事を、更によりよくして、後から来るものに引續かためだ。
一言でいへば、皆が樂に生きられるやうな、それ／＼の天分を十分に生かし切れるやうな、自分の生命を傷つけることなく、他人の生命をも尊重し、共に楽しく生きられる生活、全人類が、その個人をもいたためず、人間らしく働くことによつて人間らしく生きられる生活、怠けるもの、社會に害毒を流すもの、人を傷つけるもの、その人々は罰せられ、働くもの、そして働けるもの、自分の天分を生かす

古語に「二鬼を追ふものは一鬼をも得ず」と——二鬼を同時に射とめようとするものは、二鬼とも遁がしてしまふものだ。しかし、遠藤の家はその二鬼を追はなければならぬほど貧しく、彼は自分の體のことなど考へてゐられなかつた。

「盛さん、無理をしてくれるなよ、病氣でもしたら皆が困るからね」
顔を合はす度に、父や兄たちは心配してさういつた。

「大丈夫ですよ」
彼は笑つて答へたが、二重の労働は腦の悪い彼には重い荷物であつた。

尤も家が樂なら、かういふことをせずに済んだのであるが、決して樂ではなかつたのだ。

それを思ふと彼は、何とかして父や兄を喜ばしたいと一心になつてゐた。

純朴な父や兄は、畑の仕事の合間々々に來ては、店の仕事を手傳つた。

彼等には息子であり弟である盛芳の體が心配でならな

かつたのだつた。働いてくれるのは嬉しかつたが、この上體を悪くしては何うなるだらう？ 忽ち皆の足手まといになつてしまふのぢやないか——。

四

ある夜ふと、彼は床の中で考へた。

自分は何のために働くのだ。會社に勤めるだけでいゝ加減（人なみには）の仕事ではないか、それだけでは食つていけないといふのか、食へないことはない、それなら何のためだ。

さう自問自答してみると、彼は何だか慾張り過ぎてゐるやうに思へた。しかし今の仕事を、會社をやめるか商賣をやめるか、どちらか一つにしたのでは、何時まで経つても自分たち一家は人間なみの人間らしい人間の生活は出来なかつた。それは考へるまでもなくあまりにはつきりしてゐた。

他人が何といはうと、矢ツ張り働かう。自分が働くのは金のためばかりぢやない。さう思ひたいものには思はして

もの、生かきつたもの、その人々へ素直に喜びをもつて暮して行ける生活、つまりは食へることに心配のない、楽しく生きて行ける生活、それを希ひ、それを希ふために自分ほろく／＼眠りもせずに働いてゐるのだ。

自分の考へは夢かもわからない。しかし、間違ひのない本當の考へではないだらうか、平凡ではあらうが、自分には、それといふと彼は思ふのであつた。

店は次第に繁盛して行つた。だが、彼の健康は、この二つの労働に耐へなくなつた。彼は遂に電氣會社をやめて商賣に専心した。

彼のその熱心はやがて酬はれて来た。何時となく村では屈指の店になつて行つた。兄の子供は又、彼と同じやうに海兵團に入つて、彼の弟と共に楽しい海上生活をするやうになつた。

その間今までに遠藤は消防組員になつたり、在郷軍人分會の役員になつたり、それから消防組基本金に若干を寄附したり、村役場に大掛時計を持つて行つたり、愛國機獻納のため進んで寄附したり、彼はまだ／＼自分の力の足りない

さを思ひ、仕事の多く残つてゐることを思ひ、商業に専念してゐるのである。
労働の價値は、労働からしか生れては來ない。遠藤盛芳は眞に喜びを知る人の一人であらう。この人あるは喜びではないか。

苦難の險路

|| 數度の災禍に耐えた平川市平氏 ||

本籍地 廣島縣御調郡八幡村字垣内
程負 頭蓋骨中央部彈丸打撲傷

「貴方、これまでよく看病して下さいました。わたしは今度はとも助かるまいと思ひます。どうかこの上は、後に残る子供のことは呉々もお願ひします」

瘦せ衰へた妻は、兩眼に涙を一杯湛へ、力ない聲ながらも、嘆願するやうにいふのであつた。彼は妻の手を固く握りしめ、口を耳許に持つて行つて云つた。
「そんな氣の弱いことをいふではない。なアに、大丈夫だ、

きつとよくなるよ。お互に苦勞して来たが、楽しみは子供だけぢやないか？ 早く大きくなつて一人前になる日まで、お互に丈夫で居ようよ——なア、俺達は苦勞して来たが、子供だけはちやんと一人前に育てゝ行かうなア」
氣力衰へた妻をはげます積りの聲が、何時しか涙に曇つて來るのだつた。しかし、人事をつくしての看病も、遂に天命には勝てず、妻はいまはの際まで後に残る幼い子供の心配をしい／＼、遂に不歸の客となつてしまつた。
それは大正十年の晩秋のことである。

彼、平川市平は廣島縣御調郡八幡村の貧しい小作農の家に生れた。生來、體はあまり丈夫な方ではなかつたので、明治三十六年適齡に達して、徴兵検査の結果は歩兵乙種となり、晴れの現役生活に入ることが出來ずに非常に残念がつたものだ。
家にあつても、百姓如き労働には堪へられさうになかつたので、偶々廣島縣で施行中の巡查募集に應じ、採用せられて廣島縣巡查を拜命した。

明治三十七年、日露戦役が勃發した時には残念だった。『去年の徴兵検査に合格して居れば、第一線に立つて、千載一遇の御奉公の折を得たのに...』

續々として出征して行く皇軍を見送る度毎に、彼は唇を噛んで口惜しがった。せめても銃後にあつて、御奉公に専念せんと、忠實に職務に従つてゐるうち、思ひがけず、第一線に立つて皇國のために活動する機会が與へられたのである。即ち、同年十月に補充兵として召集せられ、歩兵第四十一聯隊第八中隊に入營し、短期訓練の上にて、その年も押しつまつた十二月二十九日に、祖國を後にして征露の旅に上つた。

『これで、男子として生れた面目が立つ、先祖への土産話が出来る』

欣喜雀躍として、戰場に赴いた。

當時、彼我兩軍は沙河を挟んで、多越しの陣を張り、着着準備を整へつゝ待機の状態にあつた。明れば三十八年、二月も漸く末に近づく頃より、我軍の活動は徐々に開始された。即ち、兩軍の運命を決する奉天會戰の幕が切つて落

されたのだ。

敵はこの一戦に連敗の恥を雪がんとし、我はこの一戦に敵の死命を制せずんば、千仞の功を一實に缺く結果になる。そこに壯烈なる戦ひが展開するのは當然であつた。しかし、決死の勇に燃ゆる我が軍の前には、さしも世界一を誇つた敵軍も物の數ではなかつた。屍を踏み越え踏み越え、怒濤の如く押し寄せる我が軍の攻撃に、さすがの敵も支へかねて、次第々々に押しつめられ、三月十日には、混乱の中に算を亂して奉天を見捨てる結果となつた。かくて、皇軍の運命を賭したこの一戦は遂に、我が軍の勝利に歸したのである。

彼は奉天快捷の報を野戦病院で聞いた。嬉しさに思はず涙がこぼれた。かうして戦ひ半ばにして斃れたことが、決して無駄でなかつたことを喜んだ。

彼は三月六日、頭蓋骨中央部彈丸打撲傷外四五箇所の負傷のため、昏倒してゐるところを、野戦病院に收容されたのである。各地の病院を轉々し、内地に送還されて、六ヶ月の間、手篤い看護を受けた。しかし、負傷箇所が全身の

神經を掌る頭腦部であるために、病狀遅々として快癒せず、遂に同年八月十七日除隊となつて歸郷したのであつた。

爾後、郷里にあつて、専念療養にとめた甲斐あつて、漸く良好になつて來たが、記憶力減退し、思考力も十分ならず、今は巡査としての職務に復する希望も捨てねばならなかつた。それかといつて、農業の如き労働にはとても堪へられない。

『どうしたらいいか——どうしたら今後の生治を立て、行くことが出来るか？』

彼は全く困つてしまつた。家は小作農として裕福ではない。何とか身を立てねば、一家は倒れてしまふのだ。

悶々として暮してゐる中に、薦める人があつて、新領土朝鮮に渡つて、運命を開拓しようとした。この體で氣候不順で不馴れな土地に行くことは心細かつた。しかし自己の運命を開拓して行くためには、この際どうしても一大決心がなければならぬ。幸ひに當時、體力も幾らか恢復してゐた時なので、明治四十四年一月、思ひきつて合併後



間もない朝鮮に渡り、群山府に到着して細やかな米穀商を始めた。

二

夫婦力を協せて働いた。

時機もよかつたし、誠實な營業ぶりも信用を博して、店は次第に榮えて行つた。蓄財もいくらか出来、子供も三人の女兒と下三人の男子に恵まれ、女兒の二人は女學校に入れられる程になつた。賑やかな家庭生活が幾年かつた。

しかし、その幸福も一朝にして、惨めにもへし折られてしまつたのである。

大正十年一月、十幾年の間丹青をこめて育てた長女が、女學校卒業を眼前に控へて、ぼつくり死去したのである。彼等夫妻の落膽ははたの見る目の氣の毒な程だつた。一時は精も根も盡き果て、暗然として涙の中にすごした。その心痛が、彼の妻の體に禍したのであらう——その年の秋になつて、今まで病氣一つせず彼を助けてくれた妻

い酒に走る。また彼の片腕となつて働いてくれた妻がなくなつたために、家業にも支障を來す。

それやこれやで、今まで順調な道を辿つてゐた家業も、次第に衰へて來た。

友人達はそれを見るに見兼ねて、彼に後妻をすゝめた。子女はまだ幼く、とても男手一人ではやつて行けないので、すゝめられるまゝに後妻を買ひ受けた。そして、新規更新のつもりで、思ひ出悲しい群山府を去つて、現在の忠清南道保寧郡大川面に移り、こゝに新に日用雜貨商を開業し、傍ら醬油醸造をなすつゝ、家運の挽回に努力することゝなつた。

『子供のこととは呉々も願ひします』

さういつた亡妻の言葉は、今もなほ耳に残つてゐた。

『子供だけは立派に育てなければ、この子の母に對して申譯がない』

さういつた責任感、そして父としての愛の力で、如何に困つても子供の教育のためには全力をあげた。

商賣の方も漸次好調に起き、彼の前には新しい希望が湧

が、病魔に見舞はれ、百方手をつくした甲斐なく、十一月にたうとう不歸の客となつてしまつた。

彼は今、妻の冷たい骸を前にして、腕を拱いたまゝ涙にくれてゐた。

『子供のこととは呉々も願ひします』

いまはの際まで口走つた妻の聲が、まだ耳の底に残つてゐた。

懇ろな野邊の送りもすむと、長い看護の疲れと落膽のために、彼の氣力は更に弱つてしまつた。みるもの、聞くもの、盡くが悲しみの種だつた。

ふと見ると、十六の女兒を頭に五人の子供が、枕を並べて無心に眠つてゐる。

『最愛の母を喪つて、この子達はこれからどうして行くのだらうか』

さう思ふと、胸がはり裂けるやうな悲しみに突き落された。不覺の涙がはら／＼と頬を傳つて流れた。

さういふ有様で、暫くは家業も手に着かず、呆然として日を暮してゐた。悲しさ、やるせ無さを慰めるために、つ

き上つて來た。

その矢先、昭和三年に、又しても不幸が降りかゝつた。

二男と三女が前後して傳染病に罹り、四ヶ月の長い間入院したのである。幸ひにして生命だけはとり止めたが、後には恐ろしい負擔が残された。

『俺は何といふ不幸者だらう』

彼は沁々と思つた。しかし、考へてみれば、たとへ如何に負擔が残つたとはいへ、二人の子供が不幸にして死去したことを思へば、何でもないではないか——さう思ふと諦めもついて、彼は自からに鞭打つて家業に精出したのであつた。

その間、莫大な負債を背負つての活動は、實に血を絞るの思ひであつた。子供には三度の食事を與へても自分は二度ですましたことさへあつた。

さうした、砂を食み蕪を着る思ひで、家運の挽回につとめてゐる最中、又しても第三の不幸が襲つたのである。昭和四年、彼の妻が大病にとりつかれ、あれよこれよと、有らん限りの力を盡したにも拘らず、遂に歸らぬ客となつて

しまつたのである。

『俺は何といふ不幸者だらう』

彼は三度自分の不運を嘆く溜息を洩した。

又しても、負債のみが後に残された。度重なる禍に、

彼は氣力體力共に衰へたのを感じた。

子供のためだ！ 子供のためだ！

彼はたゞ、子供に對する責任と愛とに勵まされて、不自

由な身に鞭打つて働いた。その間の苦心は到底筆舌のつく

すところではない。

かくて數年、二女三女共に良縁あつて他家に嫁し、長男

二男も學業を卒へて一人前に働けるやうになつた。従つて

彼の負擔も次第に軽くなり、それと同時に家運も漸く挽回

して來た。

『よくやつて來たもんだ！』

三十年の年月をふりかへつて、彼は泌々不思議に思ふの

である。

この不自由な體で、よく度重なる不幸を切り抜けて來た

ことを思ふと、何か人間の力でない力があるやうな氣がす

るのだ。

彼は遂に父として果すべき義務を果した。今や、彼は子

供達に仕へられつゝ、なほも家業にいそしみつゝ安樂な餘

生を送りつゝある。

『苦あれば樂あり』といふ『苦は樂の種』ともいふ——三

十年の苦は今や樂の實を結んだ。

それといふも、不撓不屈、毆られても起き上る力の賜物

といはねばなるまい。

乃木將軍の訓示

|| 盲啞教育に身を捧げし森清克氏 ||

本籍地	大分縣東國東郡國東町大字原六
程負	百拾參番地
度傷	兩眼盲

日露の國交が斷絶したといふことは、米國人の總べてのものに砲彈をブツ飛ばしたやうに大きな衝動を與へた。物好きなアメリカ人に取つて、これは確かに百パーセントの話題に違ひない。彼等はよるとさはると戦争の話で持ち切つた。しかし、誰も日本が勝つとは思つてゐなかつた。日頃親日を唱へてゐる人々でも、『日本は全滅する、日本人の最後の一人まで殺されてしまふだらう、そして、この地球

から日本民族といふものは失くなつてしまふだらう』と悲觀する有様であつた。

『馬鹿なことをしたものだ、何ういふ心持で日本は露西亞と戦ふのだらう』

『ほんとにさうだ、象の背中に蠅がとまつたぐらゐのものだ、いくら蠅が力瘤を入れて象を押し潰さうとしても、象は蠅がとまつてゐるとも知らないで、のし／＼歩いてゐるやうなものだ』

アメリカ人が日本を蠅に例へるのも無理はなかつたらう。その頃の露西亞の陸軍は世界最強を誇り、自他共に許してゐるのであつた。兵器の點に於いて、裝備の點に於いて、又軍隊の數に於いて、確かに露西亞は日本の敵でなく見えた。アメリカ人が洩らした言葉は正直に自分たちの思つたまゝを、いつたまで誇張してはゐるが、誇張といつて片づけられなかつたらう。親日論者は日本の敗北を悲しみ、反日論者は手を叩いて喜んだ。

さうした空氣の中に森清克はゐた。彼は渡米してからまだ數年にしかならなかつたが、學生時代から日本の將來は